

# 博士論文

## 「ペルシア絨毯」にみるオリエント像の変容

—ヴィルヘルム 2 世期ドイツにおける  
絨毯の商人・研究家・収集家の三者関係を中心に

日本女子大学大学院 文学研究科史学専攻 博士課程後期

田熊 友加里

2017 年（平成 29 年）3 月

## 博士論文目次

<b>序章</b>	<b>本論文の構成と目的</b>	
第1節	絨毯研究史の整理と問題提起	1
第2節	日本に現存するマイヤー・ミュッラー絨毯コレクション —国立民族学博物館（大阪府吹田市）を事例に	7
第3節	本論文の構成	9
<b>第1章</b>	<b>オリエントの絨毯をめぐる歴史</b>	
第1節	「ペルシア絨毯」の登場（1873年）以前のオリエントの絨毯	11
(1)	絨毯の起源	11
(2)	古代から中世ヨーロッパ世界への伝播	13
(3)	16～18世紀サファヴィー朝イランにおける絨毯産業の繁栄	16
第2節	19世紀イランの貿易構造の変容と「ペルシア絨毯」の普及	18
(1)	ウィーン万国博覧会における絨毯収集家層の拡大	18
(2)	イランへ進出するヨーロッパの外国商会	19
(3)	小括	22
<b>第2章</b>	<b>絨毯商人がとらえたオリエント像—マイヤー・ミュッラー商会を中心に</b>	
第1節	マイヤー・ミュッラー商会の創業	24
(1)	初代マイヤー・ミュッラー時代（1870～1904年）	26
(2)	2代目ゲオルク・マイヤー・ピュンター時代（1904～1949年）	27
(3)	3代目マイヤー・ヴィドメール時代（1949～1958年）、 4代目フェルディナンド・ブレージャー時代（1959～1994年）	28
第2節	会社解散に至った経緯—元社員の証言に基づいて	30
(1)	聞き取り調査①サンバスチャン氏とルディン氏の事例	30
(2)	聞き取り調査②ツィーグラウ氏の事例	33
(3)	小括	36
第3節	イランおよびトルコにおける絨毯交易	38
(1)	経営体制の特色	38
(2)	1900年代初頭における絨毯交易の経路	39
(3)	1980年代における絨毯交易の経路	43
(4)	「ペルシア絨毯」の複製の試み	44



(5)	小括	44
<b>第3章</b>	<b>絨毯研究者がとらえたオリент像—ベルリン美術館を中心に</b>	
第1節	ヴィルヘルム・ボーデの絨毯コレクション	47
(1)	ボーデとオリントの絨毯	48
(2)	「アンティーク絨毯」の再評価の動き	50
(3)	研究分野「絨毯研究」の創始	51
第2節	美術館のなかの絨毯コレクション	54
(1)	ベルリン・イスラーム美術館の設立への道のり	54
(2)	ボーデと個人収集家の相互扶助関係	56
(3)	小括	58
<b>第4章</b>	<b>絨毯収集家がとらえたオリント像</b>	
	—イエームズ・ジーモンとその一族の動向を中心に	
第1節	東方系ユダヤ人ジーモン家の台頭	60
(1)	ポーランドの行商人からベルリンの大ブルジョワジーへ	62
(2)	ジーモン兄弟社の伸張	63
第2節	ドイツ・オリント協会の設立	66
(1)	ヴィルヘルム 2 世皇帝夫妻のオリント旅行がもたらした オリント像の変化	66
(2)	オリント委員会からドイツ・オリント協会へ	68
第3節	オリント学研究史におけるイエームズ・ジーモンの動向	72
(1)	ドイツ・オリント協会における影響力	72
(2)	イエームズと皇帝ヴィルヘルム 2 世の関係 —「カイザー・ユーデン」の一員として	73
(3)	小括	75
	<b>結論</b>	77
	<b>注釈</b>	85
	<b>参考文献</b>	
	<b>添付資料</b>	

## 添付資料一覧

- 【資料 1】マイヤー・ミュッラー商会の絨毯証明書①～⑥
- 【資料 2】マイヤー・ミュッラー商会の商業登録抄本（チューリヒ市商工会議所）電子媒体 a
- 【資料 3】マイヤー・ミュッラー商会の商業登録抄本（チューリヒ市商工会議所）電子媒体 b
- 
- 【図 1】トルコ結びとペルシア結び
- 【図 2】ペルシア絨毯の輸出先（1913 年 5 月 21 日～1914 年 5 月 20 日）
- 【図 3】産地区分表
- 【図 4】マイヤー・ミュッラー商会を取り巻く関係図
- 【図 5】ボーデと個人収集家の関係図式
- 【図 6】ジーモン家の家系図
- 【図 7】億万長者の図（1912 年頃）
- 【図 8】皇帝ヴィルヘルム 2 世に資金提供するユダヤ人達（1911～1912 年頃）
- 
- 【表 1】国立民族学博物館で杉村棟氏が収集した絨毯（標本名一覧）
- 【表 2】国立民族学博物館で杉村棟氏が収集した絨毯（製作地別）
- 【表 3】国立民族学博物館で杉村棟氏が収集した絨毯（収集年月別）
- 【表 4】国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯一覧
- 【表 5】マイヤー・ミュッラー氏の絨毯コレクション目録①～⑥
- 【表 6】ベルリン・イスラーム美術館の寄進者
- 【表 7】イエームズ・ジーモンが関与した社会慈善活動と東欧ユダヤ人難民の支援
- 【表 8】DOG への資金提供金額（1898～1914 年）
- 【表 9】イエームズ・ジーモンが支援した発掘調査(1894～1914 年)
- 【表 10】イエームズ・ジーモンによるベルリン美術館への寄贈数(1885～1920 年)
- 【表 11】皇帝の側近を務めたユダヤ人メンバー「カイザー・ユードン」
- 
- 【グラフ 1】ベルリン・イスラーム美術館所蔵絨毯の内訳
- 【グラフ 2】DOG への資金提供金額（1897～1914 年）
- 
- 【地図 1】イランの地図
- 【地図 2】オリエントの絨毯の流通経路

- 【写真 1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯①～⑨
- 【写真 2】 絨毯織りの種類
- 【写真 3】 現存する世界最古のパジリク絨毯
- 【写真 4】 現存する世界最古のパジリク絨毯に描かれたモチーフ
- 【写真 5】 フラ・リッポ・リヒ「聖母の戴冠」（1441～1445 年頃）
- 【写真 6】 ハンス・ホルバイン「大使たち」（1533 年）
- 【写真 7】 ロレンツォ・ロット「聖アントニヌスの施し」（1542 年）
- 【写真 8】 ヨハネス・フェルメール「眠る女」（1657 年）
- 【写真 9】 アルダビール絨毯（1539～1540 年頃製作）
- 【写真 10】 ビクトリア・アンド・アルバート美術館に展示されているアルダビール絨毯
- 【写真 11】 ハンス・ホルバイン「ヘンリー8 世」（1537 年頃）
- 【写真 12】 創設者カール・マイヤー・ミュッラー肖像
- 【写真 13】 チューリヒ本店（1904 年、1970 年、2015 年）
- 【写真 14】 チューリヒ本店の内観（1904 年頃）
- 【写真 15】 チューリヒ本店跡の内観（2015 年）
- 【写真 16】 ベルン支店（1904 年、1970 年）
- 【写真 17】 ゲオルク・マイヤー・ピュンター肖像
- 【写真 18】 ゴロトゥーン支店（1970 年、2015 年）
- 【写真 19】 新聞紙に掲載されたマイヤー・ミュッラー商会の広告（1992 年）
- 【写真 20】 新聞紙に掲載されたマイヤー・ミュッラー商会の広告（1993 年）
- 【写真 21】 ベルン支店とゴロトゥーン支店閉店の通達文書（1992 年）
- 【写真 22】 インタビューに応じたマイヤー・ミュッラー商会元社員のサンバスチャン氏とルディン氏
- 【写真 23】 インタビューに応じたマイヤー・ミュッラー商会元社員のツィーグラー氏
- 【写真 24】 絨毯専門国家試験の合格証明書（ツィーグラー氏）
- 【写真 25】 開店当時のゴロトゥーン支店①
- 【写真 26】 開店当時のゴロトゥーン支店②
- 【写真 27】 ツィーグラー氏の中東への絨毯買い付けの旅（1988 年 7 月 23 日～9 月 6 日）
- 【写真 28】 『イスラエル週刊新聞』30周年記念号に掲載されたマイヤー・ミュッラー商会の広告（1931 年 1 月）
- 【写真 29】 『イスラエル週刊新聞』50周年記念号に掲載されたマイヤー・ミュッラー商会の広告（1950 年 12 月）

【写真 30】マイヤー・ミュラー商会の広告（1904 年頃）

【写真 31】イスタンブールにおける絨毯の買い付け

【写真 32】絨毯の運送（イスタンブール～スミルナ）

【写真 33】スミルナへ向かう絨毯運搬用の駱駝

【写真 34】スミルナの絨毯織り

【写真 35】トリエステ港への入船

【写真 36】チューリヒ本店への絨毯の搬入

【写真 37】マイヤー・ミュラー商会が複製したパジリク絨毯

【写真 38】ゲオルク・マイヤー・ピュンターの領事執務室

【写真 39】ヴィルヘルム・ボーデ肖像（1900 年頃）

【写真 40】ボーデがイタリアで購入した絨毯

【写真 41】王立美術館彫刻部門に陳列された絨毯（1892 年）

【写真 42】ウィリアム・モリス肖像

【写真 43】モリスの手織り絨毯（ハマスミス・ラグ）

【写真 44】東洋絨毯博覧会（1891 年、ウィーン）

【写真 45】カイザー・フリードリヒ博物館内に設置されたムシャッタ宮殿の城壁（1912 年）

【写真 46】カイザー・フリードリヒ博物館外観（1903 年）

【写真 47】カイザー・フリードリヒ博物館内のイスラーム美術館（1909 年）

【写真 48】フリードリヒ・ザッレ肖像（1895 年）

【写真 49】フリードリヒ・ザッレのアラブ・ペルシアコレクション（1899 年）

【写真 50】イエームズ・ジーモンの肖像（1914 年）

【写真 51】現在のジーモン家の末裔（2006 年）

【写真 52】ジーモン兄弟社の外観

【写真 53】ジーモン家邸宅（1885～1886 年）

【写真 54】「ネフェルティティ王妃の胸像」の発掘（1912 年）

【写真 55】皇帝ヴィルヘルム 2 世からイエームズ・ジーモンへ贈られた表彰状（1903 年）

【写真 56】パレスチナ（ハイファ）の科学技術のための研究教育機関（テクニオン、1914 年～1915 年）

【目録】ベルリン・イスラーム美術館所蔵絨毯目録

【年表】絨毯をめぐる年表（1830 年～現在）

## 序章 本論文の構成と目的

### 第1節 絨毯研究史の整理と問題提起

東西文化交渉史研究においては、従来から欧米はもとより日本においても、ヒトやモノや情報の伝播と受容に関する多様な研究が盛んになされてきた。本研究は、こうした流れを受けつつも、とりわけ「絨毯」というモノが表象するイメージの変遷に着目して、東西文化交渉史を新たな視点から再検討しようとするものである。本研究で取り扱う「オリент」とは、広義の中東と同義であり、言語による定義に基づいてアラビア語・ペルシア語・トルコ語・テュルク諸語および少数民族語が話された地域を指す。アラビア語・ペルシア語・トルコ語名の英語表記については、『岩波イスラーム辞典』（岩波書店、2002年）の凡例にしたがった。

また、本論文で取り上げる「ペルシア絨毯」とは、イランで織られた絨毯そのものを指すわけではない。そもそも「ペルシア」という用語は、ヨーロッパ人からみたイランの呼称であり、オリентを示す漠然としたイメージである。同様に、「トルコ絨毯」のトルコもヨーロッパ人からみたオスマン帝国を含む小アジア地域の他称である。よって、本論文では「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」をカギ括弧付きで使用する。また、絨毯の特定の産地を示す場合は、イラン産絨毯や小アジア産絨毯という名で区分して論じる。オスマン帝国領内で織られた絨毯を「オスマン絨毯」とは呼ばないからである。

オリентで織られた絨毯の最大の特徴は、製作地であるオリентとヨーロッパにおいて、その用途と価値が大きく変化する点である。元来、遊牧生活の中で織られてきたパイル織り絨毯は、オリентにおいて保温性・断熱性に優れた生活消耗品であった。一方のヨーロッパでは、単に縦糸と横糸を組み合わせた表面が滑らかな平織り（タペストリー）が主流であった。

ここで平織りとパイル織絨毯の違いを整理しておこう。平織りは、単純に縦糸と横糸を組み合わせたもので、表面が滑らかなものである。キリム、タペストリー織り、コプト織り、ゴブラン織り、日本の綴織などはこれに属する。これに対して、パイル織り絨毯の構造は、縦糸と横糸とパイル糸からできている。縦糸と横糸には羊毛のほか綿や絹が用いられ、ときには山羊や駱駝の毛が使用されることもある。パイル織り絨毯の大きな特徴は、二本の縦糸に染色されたパイル糸を絡めて毛羽を立てる手法である。この毛羽が表面に図案となってあらわれ、絨毯に厚みを与える。

オリエントの絨毯は、11 世紀以降に地中海貿易を介してヨーロッパに伝播すると、その稀少性から専ら鑑賞品として愛好され、原価の数百倍から数千倍に上る高い市場価格で取引された。近代に入ると、万国博覧会や工芸品展覧会を媒介にヨーロッパへの流通量を飛躍的に伸張し、その収集家層を従来の王侯貴族から産業革命以後に台頭したブルジョワジーへと拡大させたのである。

絨毯が他のオリエントの工芸品に比べて多く流通した理由としては、丸めた状態での保存ができて携帯性に優れ、例えば陶器に比べて破損しにくい点、そして同じく緻密な手工技術を有するミニアチュール（細密画）に比べて生産量自体が多い点があげられる。また、オリエントの絨毯はヨーロッパで織られた絨毯が技術革新でもっても及ばない、現代イランの「ペルシア絨毯」に代表される独自のブランドを築き上げたのである。

このように、絨毯は、東西交渉の過程で用途とその価値を状況に応じて変化させながらも、絨毯そのものがオリエントやエキゾティズムを表象する特殊な素材として存在してきた。絨毯をテーマとする研究の大きな特徴は、研究対象の織物が消耗品であり、17 世紀以前のものがほとんど現存していないため、文献学的アプローチに頼らざるを得なかった点である。

そのため、絨毯を題材とする研究は、絨毯の織られた時代の歴史・地理関係の史資料が比較的よく渉獵され整理されおり、研究分野は絨毯自体を研究対象とする美術史だけに留まらない。絨毯をめぐる商取引の記録、現地で絨毯工場を経営したヨーロッパの外国商会による記録、あるいはオリエントに在留したヨーロッパ人の駐在員や旅行者による記述等の一次史料から、当時の経済史・産業史・社会史・文化史・文化人類学・文学史等の多様かつ複合的な視座に基づいたアプローチが可能な研究題材と捉えることができる。ここで絨毯に関連した研究史を整理してみよう。

経済史や産業史の分野においては、「ペルシア絨毯」が 19 世紀ヨーロッパで流行した要因を論じた Housego [1973]、19 世紀イランにおける絨毯産業とショール産業について論じた Seyf [1990]、19 世紀末の絨毯市場の拡大に伴うイランの絨毯産業の構造変化を分析した Herfgott [1994] による研究が、現在においても有用である。また、坂本[2015]は絨毯というモノを通じて、19 世紀の絨毯流行以降の中東地域の社会史を論考した。

近年では、吉田[2010]が 1950 年代以降のイラン諸地域における手織り絨毯の生産について論じ、田村[2013]は文化人類学的立場からトルコ産絨毯をめぐる市場における顧客関係に関する論考を発表している。さらに、文学研究においても絨毯はテーマとして扱われており、

杉田[1985, 1986, 1987, 1993]は絨毯の歴史的・文化的背景を視野に入れながら、西洋古典世界、中東世界、近代ヨーロッパ世界の各文化圏における文学と絨毯の関係を比較研究した。

Vernoit [2000]の研究によれば、絨毯を含むイスラーム美術史研究は、東アジア美術史や古代エジプト・メソポタミア考古学より遅れて、20世紀初頭に美術史学の一分野として確立された。イスラーム美術とは、イスラームを主要な宗教とする地域で生み出された美術作品、ムスリム（イスラーム教徒）が作り出した美術品、あるいはムスリムのために作られた美術作品を包括的に指し示す名称である。特徴的な点は、キリスト教美術や仏教美術のようにそれぞれの宗教と直接関連する美術品のみが含まれるのではなく、宗教とは無関係の世俗的な美術品も含まれる点である。扱う時代は、イスラームが誕生した7世紀から現代まで広範囲に及ぶ<sup>1</sup>。

19世紀後半以降、ヨーロッパの好事家の間ではイスラーム地域の美術品が収集され始め、各国の主要な美術館にイスラーム美術コレクションが形成された。ドイツ語文化圏では、すでに1865年から1890年の期間にウィーンとニュルンベルクを中心に、主に絨毯と陶器の分野で研究が進められていたのである。

オリエン特で織られたアンティークの絨毯に特化した「絨毯研究」という研究分野は1870年代に創始され、ベルリン美術館のヴィルヘルム・ボーデ（Wilhelm von Bode 1845～1929年）によって本格的な絨毯研究の嚆矢となる研究論文「ベルリン王立博物館所蔵のペルシア古絨毯」（Wilhelm Bode, 1892, 'Ein altepersischer Teppich im Besitz der Königlichen Museen zu Berlin', in *Jahrbuch der Königlich Preussischen Kunstsammlungen* 13.）が発表された。文献資料と絵画資料を併用して論理的に組み立てられたボーデの学説は、「ペルシア絨毯」を専門に扱ったアメリカ人研究者のPope [1939]や、ヨーロッパに渡ったオリエンの絨毯の700年間にのぼる歴史を膨大な文献資料を用いて概説したErdmann [1966]などの後世の研究者に多大な影響を与えたのである。近年においては、Blair [1994] および Ettinghausen [2001] が、絨毯を含むイスラーム美術史全般について詳細な専論に基づく概説を著している。Troelenberg [2012] は、1910年にミュンヘンで開催された「回教美術大博覧会」（Meisterwerke muhammedanischer Kunst）の図録資料を基に、絨毯を含むイスラーム美術の展示に携わったドイツ国内外の研究者の詳細を明らかにし、イスラーム美術史研究における博覧会の学術的な意義を論じている。日本人による研究では、杉村[1994]・深見[1999]・Okumura[2007]・鎌田[2010]が挙げられる。

さて、前述したように、19 世紀後半以降のイスラーム美術に対する高い関心と研究の進展に連動して、各国の美術館コレクションの構成にも大きな変化がみられるようになった。1904 年には、ドイツのベルリン美術館が、ヨーロッパで初めてイスラーム美術を専門とする新しい美術館を設立した。

ベルリン美術館 (Staatliche Museen zu Berlin) は、ベルリン中心部に隣接する旧博物館 (Altes Museum)、新博物館 (Neues Museum)、カイザー・フリードリヒ博物館 (Kaiser-Friedrich Museum、のちにボーデ博物館に改称される)、旧国立美術館 (Alte Nationalgalerie)、ペルガモン博物館 (Pergamonmuseum) の 5 つの博物館と美術館の総称であり、別称「博物館島」(Museumsinsel) と呼ばれている。

当初、イスラーム美術館は、プロイセン王家の美術コレクションを収蔵したカイザー・フリードリヒ博物館の一区画に開設され、その後、1936 年に隣接するペルガモン博物館の二階へ移設された。博物館の中に入れ子式に博物館が設けられた形となるが、本論文では便宜上、「ベルリン・イスラーム美術館」と記すことにする。

ベルリン・イスラーム美術館は、ボーデが寄贈した「ペルシア絨毯」コレクションと、同館初代館長に就任したフリードリヒ・ザッレ (Friedrich Sarre 1865~1945 年) による古代ペルシア陶器・金属器コレクションを基底としていた。絨毯研究者として著名なボーデは、自身の研究書および手記において、「ペルシア絨毯」(alt persische Teppich) と、小アジア産絨毯 (kleinasiatische Teppich) とアルメニア絨毯

(armenische Teppich) を含むオリエント産の絨毯 (Orientarische Teppich) を理論の上では、区別して論じていたことが分かっている<sup>2</sup>。

しかしながら、筆者は次のような疑問を呈したい。すなわち、19 世紀半ばから 20 世紀初頭において、オリエント産絨毯の売買・収集・研究に携わっていたヨーロッパの人々は「ペルシア絨毯」を厳密に識別することができていたのであろうか。

その疑問に答えるために、筆者はベルリン・イスラーム美術館所蔵の絨毯コレクションの目録 (Spuhler, Friedrich. ed. 1988. *Oriental carpets in Museum of Islamic art, Berlin*. London.) を基に絨毯の製作地、所蔵された年代、入手経路の統計を取った。統計と分析の結果、収集された「ペルシア絨毯」は 16 世紀から 18 世紀に生産されたものが主流であるが、時代を下るにしたがって、小アジア産絨毯が大半を占めるようになったことが判明した。

これは、イランの絨毯産業が 18 世紀末から 19 世紀中葉にかけて停滞したことと対応



している。おそらく、入手困難な「ペルシア絨毯」に代わって地理的にドイツに近く、当時において絨毯の一大市場であったイスタンブールで買い付けた「トルコ絨毯」が「ペルシア絨毯」に準ずるものとして扱われたのだ。また、18世紀以前に製作された古い絨毯の中には、本来の所有者からの転売を重ねた結果、製作地や流通経路が正確に記録されていないものが多くみられた。

このような曖昧な「ペルシア絨毯」の捉え方と、実際に収集された絨毯の製作地の齟齬は、なぜ生じたのであろうか。筆者は、この「ペルシア絨毯」に対する認識の曖昧さに、当時のヨーロッパの人々が抱いたオリエント像を分析する重要な鍵が隠されていると考える。

同時期のドイツの外交に目を向けると、皇帝ヴィルヘルム2世（Wilhelm II 在位 1888～1918年）が英仏に出遅れたオリエントへの進出を挽回するために、オスマン帝国のアブデュルハミト2世（İkinci Abdülhamid 在位 1876～1909年）とバグダード鉄道建設の密約を交わしていた。

このようなヴィルヘルム2世の外交政策を受けて、ドイツの知識人の間においてもオリエントへの政治的・経済的関心が急激に高まっていた。絨毯もまた同様に、オリエントの実像を捉えるための媒介として研究が活発に行われたのである。筆者は、オリエントで織られた絨毯の流通（絨毯商人）・研究（美術館）・収集（収集家）の各分野に携わったドイツ人の多様な動向を総合的に俯瞰することによって、絨毯商人・美術館・収集家の三者の「ペルシア絨毯」に対する認識の相違を創出した要因を分析することが可能であると考ええる。

そこで、本論文では、スイス系絨毯商社マイヤー・ミュッラー商会を媒介として「絨毯商人がとらえたオリエント像」「絨毯研究家がとらえたオリエント像」「絨毯収集家がとらえたオリエント像」という3つの異なる視点から、「ペルシア絨毯」に象徴されたオリエント像の変容と相互関係について論じる。

マイヤー・ミュッラー商会（Teppichhause Meyer- Müller & Co.）は、1870年代に手工芸製品と英国産の建木材リノリウムを取り扱う輸入代理店としてチューリヒで創業された。後に、ウィーン万国博覧会（1873年）を契機とするペルシア絨毯の流行を背景に、絨毯輸入業で急成長を遂げた。マイヤー・ミュッラー商会は1990年代初頭に会社が解散する事態に陥ったため、同社が所有する絨毯コレクションは大手美術品競売会社のクリスティーズ・ニューヨーク支店によって売却され、世界各地へ散逸する結果となった。

その売却された絨毯の一部が、1980年から1990年代に絨毯研究家の杉村棟氏（当時は国立民族学博物館教授）の手によって日本へもたらされた。マイヤー・ミュッラー商会の絨毯の大半は現在の所在が不明であるため、杉村氏が収集した絨毯コレクションは、現物を確認することができる数少ない事例として大変貴重である。

## 第2節 日本に現存するマイヤー・ミュッラー絨毯コレクション

### ー国立民族学博物館（大阪府吹田市）を事例に

国立民族学博物館（大阪府吹田市、以下民博と略称する）には、杉村棟氏（当時は同館教授）が収集した 227 点にのぼる織物・絨毯加工品・織り機・道具類が所蔵されている。同館の標本資料目録データベースに基づく内訳は【表 1・2・3】の通りである。これらの標本は、1979 年から 1992 年にわたる計 4 回の期間に分けて収集された。製作地別にみると、「イラン回教共和国」（杉村氏による標本資料収集カードの表記のまま）と「トルコ共和国」が最も多く、次いでシリア・アラブ共和国と旧ソ連下の中央アジア産が多くを占める。

絨毯の収集にあたり、杉村氏は次の 3 通りの方法で情報収集に努めたと述べている<sup>3</sup>。

第一に、ヨーロッパの主要な美術専門誌に掲載された絨毯の広告を手掛かりにする方法。第二に、ロンドンで定期的に行なわれた競売会社サザビーズ（Sotheby's）やクリスティーズ（Christie's）の下見会や競売目録を参考に、絨毯売買の国際的な相場を把握する方法。第三に、時間と手間を要するが、主要都市で中東の美術工芸品を扱う美術商や古物商に直接足を運ぶ方法である。

スイスにおいては、チューリヒに本店を置くゾーランヴァリ社（Zollanvari AG）とマイヤー・ミュッラー商会から絨毯を購入した。杉村氏によれば、前者のゾーランヴァリ社は、20 世紀初頭に元外交官が創設した老舗であり、以前から取引を行ってきた。後者のマイヤー・ミュッラー商会は、杉村氏がチューリヒを訪れた際に偶然見つけた絨毯商会であり、その詳細は明らかにされてこなかった。

そこで、筆者は杉村氏の協力のもとで、2014 年 1 月 10 日に民博が所蔵する絨毯の実地調査を行った。結果として、マイヤー・ミュッラー商会から購入された絨毯および絨毯加工品の合計 9 点を確認することができた。そのうちの 8 点の標本については、杉村氏がマイヤー・ミュッラー商会発行の絨毯証明書【資料 1】を保持している。

【表 4】【写真 1】に示した標本のうち、「敷物」は 3 点で、残り 6 点は絨毯を素材とした加工品である。例を挙げれば、標本番号 H0186126（標本名「らくだ用鞍袋」）は、厚みのある頑丈な作りで、写真に示したように、真ん中の絨毯の継ぎ目部分をらくだの背中のコブに引っかけて使用する。

また、標本番号 H0186127（標本名「テント装飾帯」）の房部分には、マイヤー・ミュッラー商会が添付したと見られる手書きのタグがみられる。タグには、6 桁の商品番号、商品

名、寸法のほかに、ドイツ語で「Hubschmid（高品質）」と記載されている。これは売値の参考資料とされていたと推測できるであろう。

標本番号 H0186134（標本名「敷物」）に添付された荷札の「3908」は、【表 5】に示したマイヤー・ミュッラー氏の絨毯コレクション目録⑤の整理番号「No.3908」（下線部）と一致しており、また標本番号 H0186135（標本名「敷物」）に添付された荷札の「5634」は、同目録②「No.5634」（下線部）の整理番号と一致しており、両者の絨毯がマイヤー・ミュッラー商会の商品であることを立証している。

9 点の標本の調査結果から、マイヤー・ミュッラー商会が取り扱った絨毯は、美術鑑賞品としての敷物だけに留まらず、らくだ用の鞍掛けや塩袋入れなどの遊牧生活に根づいた素朴な民芸品も含まれており、これらもまたオリエントを象徴するモノとして欧米社会に向けて盛んに輸出されていたことがうかがえる。

### 第3節 本論文の構成

本論文の構成は次の通りである。

まず、第1章で古代から近代に至るオリエントの絨毯の伝播と受容の歴史を概観する。第1章は、第1節「『ペルシア絨毯』の登場（1873年）以前のオリエントの絨毯」と第2節「19世紀イランの貿易構造の変容と『ペルシア絨毯』の普及」の二節から構成される。

「ペルシア絨毯」がヨーロッパの一般大衆に広く認知される契機となったウィーン万国博覧会（1873年）を境に、何を要因に絨毯の消費者（収集家）層がどのように変化したのかについて、文化史・社会経済史・住居史の観点から検討する。

さらに、絨毯需要の急増を受けてガージャール朝イラン（カージャール朝イラン、1779～1925年）へ進出した英独系外国商会と、彼らと拮抗した地元のタブリーズの商人の動向を取り挙げて、19世紀から20世紀イランにおける絨毯交易の諸相を多角的に論じる。

続く第2章では、「絨毯商人がとらえたオリエント像」の視点に立ち、マイヤー・ミュッラー商会に焦点を当てる。筆者が独自に入手したマイヤー・ミュッラー商会の文献資料と元社員へのインタビュー調査の結果を基に、同商会の創立から解散に至る120年余りの歴史、その経営体制、スイスとトルコおよびイランを結ぶ絨毯交易のネットワーク、同時代の外国商会との相互関係を解明する。

第3章では、「絨毯研究家がとらえたオリエント像」の視点から、ベルリン・イスラーム美術館のヴィルヘルム・ボーデを中心に発展した研究分野である絨毯研究を通して、以前にはボロ切れ同然に扱われていた古絨毯が、「アンティーク絨毯」としての価値を再評価されていった歴史的過程を論じる。また、ベルリン・イスラーム美術館のコレクションの拡充の方向性を大きく左右したボーデと皇帝ヴィルヘルム2世、ボーデと個人収集家の関係を明らかにする。

最後の第4章においては、「絨毯収集家がとらえたオリエント像」の視点に立ち、1880～1910年代ベルリンにおける絨毯を含むオリエント産の美術コレクションの拡充に大きく貢献したユダヤ人収集家イエームズ・ジーモンとその一族を事例に取り上げる。

現在のポーランドに一族の由来をもつイエームズ・ジーモンが、ベルリンの経済界及び政治界の重鎮を占める大実業家へと立身出世した背景を解明した上で、イエームズが自らの関心を絨毯収集から、古代エジプトや古代メソポタミアをはじめとするオリエント考古学へと転換していった動機を分析する。

そして結論では、絨毯商人・絨毯研究家・絨毯収集家の三者のとらえたオリエント像の共通点と相違点を浮かび上がらせ、「ペルシア絨毯」が 19～20 世紀ドイツの人々にとってどのような存在であったのかを究明する。

## 第1章 オリエン트의絨毯をめぐる歴史

### 第1節 「ペルシア絨毯」の登場（1873年）以前のオリエン트의絨毯

#### (1) 絨毯の起源

西アジアにおける織物の技術の歴史は、人類が狩猟採集生活から農耕牧畜生活へ移行した紀元前 7000 年から 6000 年頃に始まった。その頃に北部の山岳地帯から肥沃な三日月地帯にかけて生息していた野生の羊や山羊が家畜化され、毛皮に代わって羊毛を踏み固めたフェルトが作られるようになった。さらにフェルトから単純な平織りへと技術が進歩し、やがて複雑なパイル織り絨毯の手法に発展していった<sup>4</sup>。

パイル糸の絡め方は大きく分けて二種類【図 1】に分類される。コッラブ（qollab）と呼ばれる鉤針を使う地域は、縦糸二本に対してパイル糸を左右対称に結ぶ。この技法は、閉鎖型、左右均等結び、トルコ結びなどと呼ばれ、毛脚の長い絨毯を織るのに適している。

一方で、鉤針を使わない地域は、縦糸二本にパイル糸を左右非対称に絡ませる技法で、開放型、左右非均等結び、ペルシア結びなどと呼ばれる。この技法は細かく複雑な文様を表すのに適している。一般にパイル糸が羊毛の場合にウール絨毯といい、パイル糸が絹の場合はシルク絨毯と呼ぶ。

絨毯の織り機には二つのタイプ【写真 2】がある。水平機（すいへいばた）は、織り幅と密度に応じて地面に 4 本の杭を打ち、二辺に横木を固定し、この間に一定の数の染めていない経糸を地面に平行して張る。この織り機は簡単に設営できるため、主に遊牧民や半遊牧民の間で用いられてきた。もうひとつのタイプは縦機で、垂直に固定された織り機に経糸を垂直に張る。縦機は都会の工房でや村落で大型の絨毯を織ることができる利点をもつ。

パイル織り絨毯の発祥をめぐっては、従来さまざまな説が存在するが、ジョージ・バードウッドは紀元前 1500 年頃の古代エジプトを発祥の地とする説を主張した<sup>5</sup>。しかしながら、古代エジプトではパイル織り絨毯の原料となる羊毛を使用していなかったことが判明しており、現在までの発掘調査で出土した多くの織物の中にもパイル織り絨毯は含まれていない。このことから、エジプト起源説は否定されている。この他に、インドや中国を起源とする説も唱えられているが、これらの地域では羊毛よりもリネン、綿、絹が主流であったため、いずれも発祥地としての確証が得られなかった。現在最も有力とされているのが、ペルシア高原を中心に乾燥地帯に分布する遊牧民族を起源とする説である<sup>6</sup>。

乾燥と激しい気温差のある過酷な環境の中で暮らす遊牧民族は、絶えず移動する生活を

送っていた。彼らは移動可能なテントの中で暮らし、家具の類をほとんど使わなかった。寝食を地面や床に敷かれた敷物の上で済ましたため、保温・断熱・防水性に優れた絨毯が非常に重宝された。つまり、絨毯自体が「床に敷く」家具としての役割を担っていたのである<sup>7</sup>。また絨毯は羊などの家畜の毛を原料とするため、移動を伴う遊牧生活の中でも絶えず生産することができた。絨毯が自給自足生活を成り立たせる要素のひとつであった。このような環境的な要因から生まれた絨毯は、生活必需品としての性格が強く、後の時代にみられる装飾用や鑑賞用の絨毯とは対照的である。遊牧民に重宝された絨毯は、その後あらゆる階級へ広がっていった。

以上に述べた絨毯の古い起源に対して、現代までに残されている絨毯の歴史はさほど古いものではない。絨毯は使われているうちに摩耗し、劣化していった。また絨毯は傷みが激しくなると廃棄された。この点は実用品であった絨毯の役目を考えれば当然のことである。ただし、例外的に装飾や観賞を目的につくられた絨毯は損傷が少なく、現存しているものもみられる。

現存する最古のオリエントの絨毯は、1949年に旧ソ連の考古学者のルデンコ（S. J. Rudenko 1885～1969年）によって南シベリアのアルタイ山脈のパジリク（Pazyryk）に位置する墳墓から発掘された【写真 3】。墳墓はスキタイ人の王子のもので、絨毯は副葬品のひとつとして馬具や楽器とともに埋葬されていた。これは高い身分の人々の来世での身分の保証と安泰を願って、生前のあらゆる所有物を遺体とともに埋葬した慣習に基づくものである。

絨毯はサンクト・ペテルスブルクにある国立エルミタージュ美術館に運ばれ、調査が行われた。調査の結果、絨毯の大きさは約 200×183 センチメートルで、駱駝の毛をベースにトルコ結びで織られていることが分かった。この絨毯の周縁部にはヘラジカと騎馬像がそれぞれ二層の装飾帯に分けて描かれており、絨毯の中央部分および二層の装飾帯の間に幾何学模様が施されている<sup>8</sup>【写真 4】。絨毯の文様がアケメネス朝ペルシアの様式と類似していることから、この絨毯がアケメネス朝からもたらされたものであると推定されている。同時に、この絨毯の精巧な技法は、紀元前 5 世紀において、パイル織り絨毯の技術がすでに高い水準に達していたことを証明している。

通常、羊毛を原料とする絨毯をはじめとする織物は劣化しやすく、現存する絨毯の大半は 17 世紀以降に製作されたものである。しかし、パジリクの墳墓は奇跡的に盗掘の被害にも遭わず、また墳墓自体が永久凍土に覆われていたために、今日までその一部の形を留めるこ



とができた稀有な例である。

したがって、今や現存しない絨毯、あるいは現存しても製作年代が明らかでない絨毯については、ペルシア民族叙事詩『王書』<sup>9</sup>などの年紀が明らかな諸写本のミニアチュール、ヨーロッパへ輸出された絨毯が克明に描かれている 15 世紀イタリア・ドイツ・フランドルの絵画、中央アジアの絨毯の描写がみられる中国の宋元の絵画などの絵画資料と照らし合わせて研究が進められている。またこれらの資料に加えて、アラブ人やヨーロッパ人の旅行者の残した記録から、絨毯の製作地、絨毯の種類などの貴重な見聞を得ることができる。次節以降では、これらの傍証資料を参考にヨーロッパにおける絨毯伝播の過程を整理する。

## (2) 古代から中世ヨーロッパ世界への伝播

古代世界においては、すでにバビロニア、リューディア、ペルシア、ミレトスなどが絨毯の生産地として繁栄していた。ここで生産された絨毯は、フェニキア人の手を通じて西方のギリシア世界へもたらされたと考えられている<sup>10</sup>。ホメロスの叙事詩『イリアス』や『オデュッセイア』の中では、絨毯がヴェールやマントとともに座椅子や寝床の覆いとして使用される場面がよく見られる<sup>11</sup>。絨毯は客人歓待の場面での贈り物としても用いられ、家の主人が客人をもてなす特別な場面にのみ絨毯を床に敷いていたという記述が残されている。

ギリシアにおいては、絨毯は希少価値の高いオリエントからの舶来品として、特に神殿など聖なる場所に捧げられた。例えば、『ギリシア案内記』を著したパウサニアース（115～180 年頃）は、オリンピアの神殿に絨毯と思しきオリエントの絨毯がセレウコス朝シリアのアンティオコス 4 世（在位紀元前 175～前 164）によって奉納されていたことを伝えている<sup>12</sup>。ヘレニズム時代に入ると、オリエントへの遠征によって絨毯が地中海世界に流入する機会が増えたが、絨毯は一部の王族や貴族を除いて、非日常的な贅沢品であった。

ヨーロッパにおいてオリエントの絨毯交易が顕著な形でおこなわれるようになったのは、11 世紀以降のヴェネツィアをはじめとするイタリア諸都市の商人達による地中海貿易である。絨毯は、遅くとも 13 世紀にはイタリアに伝播していたことが確認できる。その由来は、1204 年の第 4 回十字軍の際に、ヴェネツィア出身の兵士達がビザンツ産とセルジューク朝で織られた絨毯をヴェネツィアへ持ち帰ったことに始まる。

これらの絨毯は、十字軍の戦利品としてサン・マルコ大聖堂に奉納された。この十字軍が持ち帰った絨毯の製作地からうかがえるように、中世ヨーロッパ世界に初めて流入したの

は小アジア産の絨毯である。エジプトのカイロを産地とする絨毯がもたらされたのが 15 世紀後半で、イラン産絨毯が流入するようになるのは、16 世紀以降のことである。

15 世紀から 18 世紀にかけてのオリエントの産物に対するヨーロッパ人の関心は「トルコ趣味」(Turquerie) という表現に要約される風潮にあり、オリエントで織られた絨毯はその産地にも関わらずに一括して「トルコ絨毯」(tapis de Turkie, Turkey carpet, Turkish tebach) という呼称で呼ばれることもあった<sup>13</sup>。これは古代において、オリエント産の絨毯がすべて「バビロニアのもの」(Babylonica) と呼ばれていた事例と似ている<sup>14</sup>。

13 世紀にアナトリアを訪れたマルコ・ポーロは旅行記のなかで、

「トゥルコマニアの住民は 3 種類からなる。トゥルコマン人以外の 2 種類はアルメニア人およびこれと雑居して都市・集落に住むギリシア人で、ともに商業や手工業に従事する。世界でも無比に美しい絨毯や、深紅色そのほかの色とりどりの高級絹布、そのほか種々な産物がある<sup>15</sup>。」

と述べており、この頃すでにアナトリア産絨毯の名声が高かったことが推測できる。

ヴェネツィア商人を介してヨーロッパに輸入されたオリエントの絨毯は、王室や教会、裕福な大商人の間で収集され、貴重な財産の一部となった。Erdmann[1966]は、ヴェネツィア商人の財産目録と遺産目録から、15～16 世紀初頭にかけて商人達が 10 枚程度の絨毯を財産として所有することが一般化していた点を明らかにした。さらに、当時は床に敷く絨毯 (tapedi da terra) よりも、テーブル掛け (tapedi da desco, tapedi da tavola) として記録されることが多かったのである<sup>16</sup>。

当時の絨毯の使用法の変遷については、財産目録のほかにルネッサンスおよびバロック時代の絵画からも読み取ることが可能である<sup>17</sup>。14 世紀にはほぼイタリア絵画に限られていた絨毯の描写が、16 世紀までに徐々にドイツ、オランダ、フランドルなどの地域の絵画にも現われるようになったが、これは実際の絨毯の伝播の過程とちょうど重なり合っている。

絨毯は 14 世紀から 15 世紀にはほとんどが宗教画のなかで、祭壇の装飾として描かれていた。それに対して、16 世紀以降はベランダの手摺りの飾りやテーブル掛けなど、世俗的でより日常生活に近い存在として表現されるようになる。これは初期に貴重品としての儀式的な象徴性を帯びていた絨毯が、貴族や教会聖職者以外の人々の間でも受容されはじめ、

裕福な商人を中心にステイタス・シンボルへと変化していった過程に対応している。

ここで疑問視されるのが、キリスト教が支配するヨーロッパにおいて、イスラームのアラビア文字が抵抗なく受け入れられたのかという点である。この点に関しては、イスラームの図像のもつシンボリズムがキリスト教のそれに抵触しなかった、もしくはシンボルの意味合いをキリスト教徒が理解していなかったために、抵抗なく受け入れられたと考えられている。ムスリムにとってアラビア文字は、コーランに記された聖なる文字であり、宗教的象徴性を強く帯びたものであるのに対し、キリスト教徒はむしろそれを純粋な装飾文字として捉え、平気で祭壇や宗教画のなかに用いたのであった。例えば、画家フラ・リッポ・リッピ (Fra Lippo Lippi 1406～1469 年) の「聖母の戴冠」(1441～1445 年頃) には、アラビア語の装飾帯がそのまま聖母の衣服の装飾に転用された例がみられる【写真 5】。

英国においては、アラベスク文様の流行と相まって、枢機卿トーマス・ウォルジー (Thomas Wolsey 1475～1530 年)、テューダー朝のヘンリー 8 世 (Henry VIII 在位 1509～1547 年)、チャールズ 1 世 (Charles I 在位 1625～1649 年) らが数百枚もの「トルコ絨毯」の収集に熱中していたと記録に残されている<sup>18</sup>。

17 世紀に入ると、イラン産絨毯が貿易新興国として繁栄していたオランダやフランドルの画家達の作品に頻繁に描かれるようになった。ドイツ人画家のハンス・ホルバイン (Hans Holbein 1497～1543 年) の「大使たち」(1533 年)【写真 6】、イタリア人画家のロレンツォ・ロット (Lorenzo Lotto 1480～1556 年) の祭壇画「聖アントニヌスの施し」(1542 年)【写真 7】、そして、ヨハネス・フェルメール (Johannes Vermeer 1632～1675 年) の「取り持ち女」(1656 年)、「眠る女」(1657 年)【写真 8】、「窓辺で手紙を読む女」(1657 年) が代表的である。この時期はちょうど、サファヴィー朝イラン (1501～1736 年) における絨毯産業の最盛期に該当する。同時に、スペイン、フランス、英国、ドイツにおいてもパイル織り絨毯の自国製作が奨励され、試行錯誤が繰り返されていたのである。

スペインにおける絨毯制作はヨーロッパで最も古く、すでにイスラーム支配下の 11 世紀よりおこなわれていた。レコンキスタ完了後に、カルロス 1 世 (Carlos I 在位 1500～1558 年) とフェリペ 2 世 (Felipe III 在位 1556～1598 年) の治世に黄金期を迎え、バレンシア (Valencia)、マドリード (Madrid)、サラマンカ (Salamanca) など各地に絨毯工房が設立され、イスラーム文化から受け継いだ織り技術と図案の要素に、西洋のルネサンスやゴシック様式を融合させた独自の絨毯が製作された。

一方のフランスでは、17 世紀以降、アンリ 4 世 (Henri IV 在位 1589～1610 年)、ルイ 13

世 (Louis X III 在位 1610~1643 年)、ルイ 14 世 (Louis XIV 在位 1643~1715 年)、ルイ 15 世 (Louis X V 在位 1715~1774 年) の治世に、王室直営の工房で宮廷向けの絨毯が織られた。その後、フランス革命の勃発により、絨毯工房は閉鎖に追い込まれたが、ナポレオン 1 世 (Napoleon I 在位 1804~1815 年) による絨毯産業に対する振興政策が功を奏し、絨毯製作は最盛期に達したのである。最後に、英国では、工藝協会(the Society of Art)が 1756 年より「ペルシア絨毯」や「トルコ絨毯」の複製品を競うコンテストを開催し、絨毯織り技術の獲得と向上に貢献した<sup>19</sup>。

### (3) 16~18 世紀サファヴィー朝イランにおける絨毯産業の繁栄

イランは古代より絹交易 (シルクロード) の要衝として栄えてきた。中国原産の絹が中央アジアを経てイランにもたらされ、そこからさらにアナトリアやシリアを経由して地中海世界、ローマ帝国まで輸出された。7 世紀頃に、中国からイランに門外不出の秘伝とされる養蚕技術が伝播すると、イランでは蚕や桑を育てるのに適した気候であったカスピ海南岸地方のギーラーンが繭と生糸の主要な生産地になっていった<sup>20</sup>。

サファヴィー朝時代に入ると、政府から絹貿易の独占権を与えられていたアルメニア人商人は、オスマン帝国の都市アレppo、イズミルなどを中継地としながら、ヨーロッパにおける二大絹織物の生産地であるイタリアのミラノ、フランスのリヨンなどに原料としての生糸を供給し続けた<sup>21</sup>。また、生糸の生産と並行して、高品質の絹織物が自国で製作されていた。

イランの絨毯産業は、美術工芸の庇護者であった二人の王によって最盛期を迎えた。一人は 2 代目のシャー・タフマースプ 1 世 (Tahmāsb ibn Ismā'īl Safavī 在位 1524~1576 年)、もう一人は 5 代目のシャー・アッバース 1 世 ('Abbās ibn Muhammad Khudābanda 在位 1587~1629 年) である。彼らの治世は、いわば美術工芸産業の黄金期にあたり、英国のビクトリア・アンド・アルバート美術館に所蔵されている「アルダビール絨毯」(1539~1540 年製作)【写真 9・10】に代表される数々の傑作が生み出された。

サファヴィー朝の宮廷工房 (ペルシア語 Kārkhāna) は、首都の移転とともにタブリーズ、カズヴィーン、エスファハーンと変遷した【地図 1】。なかでもアッバース 1 世の築いた首都エスファハーンは、イラン産絨毯の発展において重要な役割を果たした。アッバース 1 世の首都遷都によって、エスファハーンには宮殿や公共施設、住宅が相次いで建設さ

れた。これらの新規の建築物の急増にともなって、膨大な絨毯の需要が生まれたのである。

宮廷内に設置された工房では、羊の飼育から染色植物の栽培まで徹底した管理の下に置かれた。そして、宮廷工房に所属する写本挿絵画家もしくは装飾家が絨毯の下絵を描き、その下絵を基に、最高の技術をもった職人が絨毯を織った。とはいえ、製作年代が明らかな現存する絨毯の数は少なく、年代を推定する手がかりとなる基準作品はわずか数点にすぎない。その中で、「ポーランド（ポロネーズ）絨毯」は、貴重な基準作品例のひとつとして挙げられる。「ポーランド（ポロネーズ）絨毯」の呼称は、パリ万国博覧会（1878年）で、絨毯の紋章がポーランド王家の紋章と誤解されたことに由来する<sup>22</sup>。

「ポーランド絨毯」は、アッバース1世の治世に、滞在中のヨーロッパ人向けの贈答品として、あるいはヨーロッパの貴族からの発注を受けて、17世紀前半にエスファハーンで製作された。このような豪華な宮廷絨毯には、羊毛だけでなく、絹がふんだんに使用された。

また、絨毯以外にも服飾用の布や家具、調度品などに掛けられる布にも絹が用いられており、当時のエスファハーンにおける絹の需要は非常に高かった。そのため、アッバース1世は絹の取引を独占していたアルメニア人に強制移住を命じた。彼らは、元来、アゼルバイジャンのアラスセス川流域に位置する町ジョルファに居住していたが、集落ごとエスファハーン郊外に移住させられたのである。

当時のエスファハーンにおける絨毯産業の繁栄の様子は、ヨーロッパから来訪したフランス人商人のジャン・タベルニアー（Jean Baptiste Tavernier 1605~1689年）<sup>23</sup> やジャン・シャルダン（Jean Chardin 1643~1713年）<sup>24</sup> によって記録されており、絨毯産業はサファヴィー朝宮廷の収入の基盤となっていたのである。

また、英国人歴史家のリチャード・ハクルト（Richard Hakluyt 1552~1616年）はイラン産絨毯の製作技術の修得と現地職人の英国への誘致を目的に、1579年に英国よりモルガン・ハッブルソーン（Morgan Hubblethorn）という名の職人がイランに派遣された可能性を示唆しているが、詳細は明らかにされていない<sup>25</sup>。いずれにせよ、当時のヨーロッパ各国がイラン産絨毯の織り技術に注目していたことは、前掲の数多くの記録史料からうかがうことができる。

アッバース1世の死後、絨毯産業は次第に衰退していき、1721年のアフガン族の侵攻によって停滞した。しかし、ヘラート、タブリーズ、ホラサーン、カーシャーン、ケルマーンなどの地域では、なお絨毯の製作が継続されたのであった。

## 第2節 19世紀イランの貿易構造の変容と「ペルシア絨毯」の普及

### (1) ウィーン万国博覧会における絨毯収集家層の拡大

1736年にサファヴィー朝が滅亡すると、イラン国内には遊牧民や地方勢力が分立し、1779年にガージャール朝が成立するまでの間、抗争が繰り返された。ここで19世紀イランにおける貿易構造に目を向けると、1830年以降にヨーロッパ向けの生糸の輸出量が急増しており、輸出内訳の約8割を生糸が占めるなど、生糸産業への依存が非常に高かったことが指摘されている<sup>26</sup>。一方で、英国を中心に機械織りの綿織物製品がイラン国内に大量に流入し、イランの伝統的な織物産業を衰退に追い込んだ。

しかしながら、イランにおける生糸の輸出貿易は、1867年を境に激減する。その原因は、1850年代にフランス、イタリアの養蚕地で発生した微粒子病（ペブリン）が西から東へと広がり、1864年にはオスマン帝国を経て、イランで発生したからである。従来、イランのタブリーズの輸出入の貿易収支は入超、赤字の状態にあり、貿易差額の支払いに充てる正貨の国外流出が問題化していたが、この生糸貿易の衰退によって事態はさらに悪化したのである。

経済危機に直面したイランでは、事態を打開するために様々な対策が検討された。なかには、微粒子病菌に冒されていない蚕種をわざわざ日本から緊急に輸入して、生糸生産の復興を図ろうとする試みもおこなわれた。また、生糸に見切りをつけて、タバコや米、茶のような換金性の高い商品作物に作付けを転換することも行われた。

しかし、生糸に代わる有望な輸出品はすぐに現われず、イランの貿易構造は、輸入が輸出を極端に上回る不均衡な状態が1860年代後半から1870年代前半まで続いた。こうした状況のなかで、イランに進出して絹の輸出貿易に携わっていたヨーロッパの外国商会と、イラン現地の商人が互いに競い合う形で新たな輸出品を模索した。そして、サファヴィー朝時代に精緻を極めた絨毯産業に商品価値が見出されたのである。

ここで絨毯の受容者の視点に立ってみよう。英国では、1840年代末までに産業革命を終えており、機械制工業化によるモノの大量生産が可能となった。また大量の原材料と生産物、労働力となるヒトを輸送するための鉄道網が急速に整備されていった。それにともなって、農村部の労働者が大量に都市部へ流入し、都市化が進んだ。このような社会構造の変化は資本主義の発展をもたらし、新興市民層であるブルジョワジーが台頭してきた。英国に少し遅れて産業革命に参入したフランスやドイツにおいても、工業化の進展によって一般大衆の

生活水準が格段に向上していったのである。

生活水準の上昇にともない、人々の住居形式に大きな変化がみられるようになった。都市化と交通手段の発達を背景に、従来の家内制工業から職場への通勤制が確立し、職住分離が進んだ。中流以上の人々は、玄関ホール、食堂、居間、寝室、応接間など、生活の場として複数の機能の異なる部屋をもつ我が家を得るようになった。彼らは自慢の我が家を居心地の良い「くつろぎ」の空間とするべく、家具の選択や配置、カーテンや絨毯の配色にもこだわりを見せた。19世紀の中頃に入ると、住まいに華やかさを演出する格好の調度品（インテリア）として、オリエントの絨毯を購入する者が徐々に増えていったのである。

さらに、1873年に開催されたウィーン万国博覧会は、近代ヨーロッパ社会にオリエントの絨毯を広く普及する大きな契機となった。今日ではすっかり定着した「ペルシア絨毯」という商標名はこの時期に由来する。当時の万国博覧会の様子については、久米邦武の『米欧回覧実記』においても「波斯国ヨリ敷物ヲ多ク出ス」と記録されている<sup>27</sup>。そもそも万国博覧会とは、基本的にヨーロッパ諸国がそれまでに達成した工業化の成果を外に向けて経済的、文化的に知らせ、発信するという意味合いをもっていた。加えて、ヨーロッパ以外の地域で制作された優れた工芸品を展示、紹介することによって、異文化認識・異文化交流を深めていく役割も担っていたのである。

ガージャール朝イランの第4代君主ナーセロッディーン・シャー（Nāser al-Dīn Shāh 在位 1848～96年）は、直々に万国博覧会の会場であったウィーンに赴き、特別に輸出関税を免除する措置を取ることで、絨毯輸出を促進した。対するヨーロッパ側も、輸入関税を免除し、陸路と海路の双方からの輸送料を割引にするなどの優遇政策を取って、これに応えた。万国博覧会の開催による需要を見越しての絨毯の値上げもみられたが、1870年代半ば以降、絨毯の輸出は順調に伸長したのである。

## (2) イランへ進出するヨーロッパの外国商会

並み居る外国商会のなかで、欧米市場における「ペルシア絨毯」の需要をいち早く察知し、イラン現地における絨毯の生産と買付けに参入したのが、英国系のツィーグラール商会（Ziegler & Co.）である。

1850年創業のツィーグラール商会は、マンチェスターに本店を置く商社であったが、もともとはスイスに拠点を置き、織物を手広く取引する商社であった。その商圏はロシア、中東

地域、南北アメリカ、極東にまで及んでいたが、英国を中継地として貿易を行っていたため、**1855**年に英国の保護臣民の資格を取得したのである。以降、英国に本拠を移して商業活動をするようになった。

**1867**年にイランに進出したツィーグラール商会の商業活動は当初、マンチェスター周辺地域で生産された英国製の綿製品をリヴァプールからオスマン帝国のイスタンブルまで運送し、そこを中継地としてイランへ商品を輸出していた。と同時に、イランで生糸を含む様々な商品を買付けてヨーロッパの市場に卸していた。

しかし、前述したように、**1867**年以降イランの生糸貿易は微粒子病の影響で減退する事態に陥った。そこで、ツィーグラール商会は主力商品を生糸から絨毯へと切り換えたのである。

ツィーグラール商会の商業活動は、初期の段階ではイラン各地で織られる絨毯を買い付け、それを輸出するという流通分野のみに限られていた。だが、**1881**年にソルターナーバードに絨毯工場を設立することで、ツィーグラール商会は絨毯の生産分野まで自社の管理下に直接置くことに成功した。

ソルターナーバードは、テヘランの西南に位置するファラハーン地方の町である。古くから、この付近のある村々で織られた絨毯はソルターナーバードに集積され、バーザールで取引されていた。ツィーグラール商会がソルターナーバードを重視したのは、そこが輸送面でコストを抑えることができ、輸送時間も短縮できると判断したからである<sup>28</sup>。

この絨毯工場の生産工程の特徴は、多数の婦女子を雇い、統一した規格のマニュアルにしたがって絨毯を織機で織らせるという工場制手工業の形態にあった。絨毯が織り上がると、渡された図柄に忠実で、マニュアル通りであるかどうか検査された。よくできていれば僅かな報奨金が与えられ、間違っている場合は、ペナルティーが科せられた<sup>29</sup>。

この絨毯工場と並行して、ツィーグラール商会はソルターナーバード周辺の村落で個別に職工と契約を結んで、絨毯を織らせる方法をとっていた。前者の絨毯工場が工場制手工業ならば、こちらは問屋制家内工業の形態といえることができる。ツィーグラール商会は、工場制手工業と問屋制家内工業をうまく組み合わせながら、イランにおける流通と生産の確固たる基盤を築いていったのである。

ツィーグラール商会に遅れること**10**年、**1884**年頃にはオランダ系のホッツ商会（Hotz & Sons）もソルターナーバードに進出し、ペルシア絨毯製造会社（Persian Carpet Manufacturing Company）を設立して絨毯産業に乗り出した。ホッツ商会は、染色のための自前の作業場をもち、絨毯貿易に熟知する若い社員を配するなどして、次第にツィーグラ



一商会に対抗する存在へと成長を遂げた。それでもなお、ツィーグラール商会は、毎年平均して 4,000 枚の絨毯をソルターナーバードで生産しており、その取扱量は 1902 年においてイランから輸出される絨毯の 57%に達したのである<sup>30</sup>。

外国商会による絨毯産業の成功はイラン各地に影響を及ぼし、地元のイラン商人たちの中にも絨毯を輸出用商品として生産しようとする動きが顕著に現れてきた。

例えば、西北部に位置するイラン最大の交易都市のタブリーズである。この都市はもともとイラン国内で織られた絨毯を集荷し、それをトラブゾンからイスタンブルへ、さらにヨーロッパ方面へ輸出する流通の要衝であった。

タブリーズの絨毯産業には、外国商会が経営する二つの絨毯工場と地元の問屋制家内工業によるものがあった。資本をもつ者は、大規模な工場を建設し、多くの職工を雇い、絨毯を大量に生産する体制を整えた。例えば、ロシア系の商人は 200 台の織機を導入し、2,000 人もの職工を雇って絨毯工場を経営していた。地元の商人では、タブリーズ出身の有名な歴史思想家のキャスラヴィー (Ahmad Kasravi 1890~1946 年) の父親が、従兄弟と折半で資本を出し合って小規模な工場をしていたことが分かっている。しかし、いずれにせよ工場の規模は先述したソルターナーバードの規模には及ばなかった。

タブリーズで経営された絨毯工場の特徴は、労働力の違いにあった。ソルターナーバードの織り手が婦女子であったのに対し、タブリーズの工場では成人の男性や少年であった。特に 8 歳から 12 歳くらいまでの少年が中心で、キャスラヴィーの父親の工場でも慈善精神から、孤児の少年が多数雇われていたといわれている<sup>31</sup>。

このような特徴をもった理由としては、生産性の問題が挙げられる。タブリーズはアゼルバイジャン地方の中心都市であり、住民の大半はイランのなかでは少数言語であるアゼリ語 (アゼルバイジャン語) を日常的に使い、それに基づく文化のなかで暮らしてきた。よって、絨毯の織り方もペルシア結びではなく、鉤を使ってパイル糸を縦糸の間に通して結ぶというトルコ結びで行われていた。この作業には瞬発力とともに、体力が求められる。この点から、女性よりも体力のある男性で、かつ、安い賃金で生産性の高い労働力として少年が大量に雇われていたのである<sup>32</sup>。

タブリーズの絨毯は、絨毯工場のほかに問屋制家内工業という方法でも生産された。全体的な割合でみれば、むしろこちらの方がタブリーズ産絨毯の大部分を占めていたのである。商人たちは、あらかじめ染色した羊毛の糸と図案の下絵を用意し、前貸し金を織り手に渡し、絨毯を織らせた。絨毯が完成した後に、賃金の残り金を改めて織り手に支払った。織り手

の中には、商人から支給された羊毛を勝手に売り払い、代わりに安くて粗悪な羊毛を別に買って絨毯を織る者もいたが、概して絨毯生産は順調に伸びていったのである<sup>33</sup>。

タブリーズの商人たちが絨毯の生産に参入するようになるのは、ツィーグラール商会よりも時期が遅れたが、彼らは他の地域にも積極的に進出していくことで、外国商会と十分に對抗できるだけの力をつけていった。彼らは民族コミュニティを基盤にした強固な商業ネットワーク上で絨毯貿易を展開していったのである。

ツィーグラール商会をはじめとする外国商会が絨毯の生産に関わることによって、絨毯のサイズ・図案・染料に大きな影響を与えられた。元来、イランの絨毯は概して細長く、小さなサイズのものが多かった。しかし、顧客の要望に応じて、絨毯はヨーロッパの住居に収まる大きさに変えられた。また、遊牧民が好んで織る伝統的で素朴な図案よりも、西欧人好みの華美で人目をひく図案が採用されるようになった。図案に合わせて、絨毯には派手な色合いが求められ、アニリンなどの化学染料で絨毯が染色された。

こうした化学染料の使用は、絨毯の質を著しく損なうという弊害を生んだ。ガーજャール朝政府はアニリン染料の輸入を禁止したが、絨毯を安価で大量生産する上で化学染料の使用は欠かすことができず、その使用を止めることはできなかった。

ヨーロッパの絨毯需要によって活気を帯びたイランの絨毯産業だが、皮肉なことに顧客からの要望と急増する需要を満たすために、絨毯の伝統的な図案と色調が失われ、安価で粗悪な絨毯を生み出す結果を招いたのである。

### (3) 小括

これまで論じてきたように、オリエントの絨毯の用途は時代の流れとともに変化してきた。元来、遊牧生活のなかで織られてきた絨毯は、厳しい遊牧生活に耐えうる性質を持ち合わせた生活必需品であった。その後、フェニキア人によって古代地中海世界にもたらされると、絨毯はその稀少性から珍重され、神殿への奉納物や特別な歓待用として用いられていた。

中世ヨーロッパにおいては、イタリアの商人を介して王侯貴族や裕福な商人の間で財産の一部として収集された。絨毯は当初、教会の祭壇の装飾としての儀式的な用途で使われていたが、次第にテーブル掛けなどの日常用品としての使用が広まり、富裕階級のステイタス・シンボルとなったのである。

16世紀以降になると、王室を中心に膨大な絨毯コレクションが形成された。この時期の

絨毯は権力の象徴としての意味合いが強く、王が自らの権威を示すために用いた例や、外国使節が外交上の便宜をとり図ってもらうために贈呈する例が多かった【写真 11】。王たちは、オリエントの美術品を所有することで、自らを「先進的な王」であること、また「世界を知る王」であることをアピールすることができたのである<sup>34</sup>。

他方で、自国内で絨毯を生産しようとする試みもなされた。ヨーロッパ各国で製作された絨毯は、オリエント伝来の製法に独自の図案を取り入れられ、ここに新しい装飾美術が誕生した。王室主導のもとで作られ出された絨毯は、国王の絶対権力をより一層強調したのであった。

近代において絨毯が一般大衆に浸透する過程には、新興のブルジョワジーの成長が大きく関わっていたと指摘できる。産業革命以降に台頭したブルジョワジーは、「ペルシア絨毯」をはじめとするオリエントの絨毯の新たな顧客として定着した。彼らの中には絨毯を含むイスラーム美術コレクションを美術館に寄贈する者も現れた。

経済的成功を収めて自信をつけた彼らは、自らの富で収集した私有財産一部である美術品を一般市民に広く公開することで、近代ヨーロッパ社会における存在感を強めていったのである。例を挙げれば、ベルリン・イスラーム美術館は、個人収集家から寄贈された美術コレクションを基底としているため、彼らの美術的な嗜好が美術館コレクションを特徴づける重要な要素を構成していたと指摘できよう。

## 第2章 絨毯商人がとらえたオリент像—マイヤー・ミュッラー商会を中心に

### 第1節 マイヤー・ミュッラー商会の創業

マイヤー・ミュッラー商会は、1994年の会社解散に際して、会社運営に関連する大部分の記録資料を廃棄処分したため、これまで同商会の詳細は明らかにされてこなかった。昨今の電子媒体の普及によって、筆者はスイス・チューリヒ市商工会議所のホームページ上から、同商会の商業登録抄本を閲覧することができた。また、スイス市内の古書店を通じて、同商会に関連する文献資料を数点入手することができた。

本研究で用いる資料 a～f の概要を以下に掲げる。なお、資料 f を除いて、すべてドイツ語表記の資料である。

#### a. Handelsregister des Kantons Zürich (チューリヒ市商工会議所の商業登録抄本)

チューリヒ市商工会議所に保管されている電子媒体の商業登録抄本である【資料 2・3】。マイヤー・ミュッラー商会の所在地、役職員の氏名、株式資本、株式額面価格が記載されている。筆者は商工会議所に商業取引に関する記録を問い合わせたが、すでに会社が実在していない点を理由に、記載事項以上の有力な情報を得ることはできなかった。

#### b. *Der Orientalische Teppich*. (『オリントの絨毯』)

1904年にマイヤー・ミュッラー商会が顧客向けに出版した文献である。寸法は、縦 32 センチメートル、横 22.5 センチメートルの横長判である。本文 44 ページの構成は、前半部分でオリント産絨毯の歴史と「アンティーク絨毯」の価値を解説し、後半部でマイヤー・ミュッラー商会によるオリントへの絨毯買い付けの行程、チューリヒ本店とベルン支店の様子が豊富な写真と地図とともに紹介されている。巻末には、絨毯に関する参考文献のリスト、さらに「オリントの国々の景色」(*Bilder aus orientalischen Ländern*)と名付けられたチュニジア、エジプト、パレスチナで撮影された天然総色の写真が 13 枚添えられている。

#### c. *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel*.

(『美術工芸史と貿易史におけるオリントの絨毯』)

マイヤー・ミュッラー商会の 2 代目経営者のゲオルク・マイヤー・ピュンター (Carl Georg

Meyer-Pünter) が執筆し、1917 年に出版した絨毯研究書である。縦 23 センチメートル、横 17 センチメートルで、表紙には絨毯の装飾を施した布張りのハードカバー様式である。全 88 ページの前半部分でオリエントの絨毯の歴史および当時のイランとの政治的経済的関係が論じられ、後半部分ではマイヤー・ミュッラー商会が所蔵した絨毯コレクション 159 点の寸法が製作地別の一覧表にまとめられている。収録された絨毯のうち 45 点は、鮮やかなカラー図版とともに、製作年代、素材、織り技法、図案の解説が記載されている。

本書は初版（紺色）と第 2 版以降（深緑色）で表紙の色が異なるが、筆者が現物を比較した結果、版ごとの内容に相違はみられなかった。

d. *Meisterwerke altpersischer Teppichknüpferei von Carl Meyer-Pünter.*

（『カール・マイヤー・ピュンターによるアンティークのペルシア絨毯傑作品集』）

同じくゲオルク・マイヤー・ピュンターによる著書で、マイヤー・ミュッラー商会の創業 50 周年を記念して 1921 年に出版された。本書は、縦 29 センチメートル、横 22.5 センチメートルのハードカバー様式で、16～17 世紀に織られたアンティークのイラン産絨毯を近代ヨーロッパの技術によって複製した成果をまとめている。全 58 ページの内容は、前半部分のオリエントの絨毯の歴史の概説と、後半部分の複製されたイラン産絨毯 12 点の詳細情報（寸法、素材、織り技法、図案等）から構成されている。本文がドイツ語、フランス語、英語の 3 ヶ国語で併記されている点から、本書の読者層はヨーロッパ広域にわたる絨毯商会や美術（博物）館の専門家向けであったと考えられる。

e. *100 Jahre Teppiche aus dem Orient.* （『オリエント伝来の絨毯 100 年史』）

1960 年にマイヤー・ミュッラー商会が顧客向けに出版した小冊子で、寸法は縦 21 センチメートル、横 15 センチメートルのペーパーバック様式である。全 38 ページのうち、巻頭の 5 ページで社史を解説しており、残りのページで 24 点の絨毯をカラー写真とともに紹介している。絨毯の個別情報は寸法と図案の簡略な記載に留まっており、前掲の文献 c、d とは趣が異なっている。巻末に絨毯の図案集と製作地地図が収録されており、絨毯コレクター向けの入門書のような平易な作りである。

f. クリスティーズ・ニューヨークの競売目録

Christie's [1990] [1991] [1992]

マイヤー・ミュッラー商会は、1994 年の解散に先駆けて、自社の絨毯コレクションを 1990 年から 1992 年の間に 3 回に分けて競売で処分した。1990 年に 35 点、1991 年に 81 点、1992 年に 56 点の合計 172 点が出品された。目録にはカラー写真とともに絨毯の寸法、製作地、図案の解説、希望売却価格が記載されている。

以上の文献資料を基に、マイヤー・ミュッラー商会の創業から 4 代目にわたる社史を整理する。

### (1) 初代カール・マイヤー・ミュッラー時代 (1870～1904 年)

マイヤー・ミュッラー商会の創業者カール・マイヤー・ミュッラー (Carl Meyer-Müller 1849～1918 年)【写真 12】は、現在のスイス北端に位置するシャフハウゼン (Schaffhausen) の農家の出身である。彼は地元で初等教育と研修期間を経た後に故郷を離れ、フランスのパリにある手工業製品を扱う商社で経験を積んだ。

1870 年夏、普仏戦争の勃発を機にカール・マイヤー・ミュッラーはシャフハウゼンへ帰郷し、手工業製品と絨毯を扱う輸入代理店を‘Carl Meyer-Müller’の屋号で創業した。その後まもなく本店はチューリヒに近い都市のヴィンタートゥーア (Winterthur) に移転した。この地にはカール・マイヤー・ミュッラーの舅である地方判事ゲオルク・ミュッラー (Georg Müller) が邸宅を構えていたのである。

数年後、同社は英国産の建木材リノリウムの市場需要にいち早く着目し、建木材の輸入業で売り上げを急増させることに成功した。1890 年、同社は再び本店をチューリヒに移転し、‘Teppichhause Meyer-Müller & Co.’の名で商業登録した。当初は建木材のリノリウムの販売が中心であったが、次に機械織り絨毯、そして最終的に、オリエントの手織り絨毯を主力商品として取り扱うようになった。

1894 年、ミュッラー商会は、蒸気機関工業の大手であったエッシャー・ウィス商会 (Escher-Wyss & Co.) からチューリヒ市内のシュテンフェンバッハ通り (Stempfenbachstraße)にある不動産を買収し、そこへ本社を構えた。創業から 20 年余りの期間に、マイヤー・ミュッラー商会は地方都市の小さな輸入代理店から、大都市チューリヒの中心部に拠点を置く総合商社へと著しく成長を遂げたのである【写真 13・14・15】。1898 年には新たにベルン支店【写真 16】を開店し、本社と支店はいずれも 1994 年の会社解散時まで存続した。

カール・マイヤー・ミュッラーには二人の息子がおり、長男のカール・ゲオルク・マイヤー・ピュンター (Carl Georg Meyer-Pünter 1872～1959 年) と次男のエルンスト・ポール・マイヤー・ビュルギー (Ernst Paul Meyer-Bürgi 1879 年～没年不明) は共に 1899 年にマイヤー・ミュッラー商会に入社した。

## (2) 2 代目ゲオルク・マイヤー・ピュンター時代 (1904～1949 年)

2 代目経営者のカール・ゲオルク・マイヤー・ピュンター【写真 17】は、絨毯研究家として 2 冊の著書を発表する一方で、イラン領事として政治的な手腕を振るうなど多方面で活躍した人物であったと記録されている。彼は、ヴィンタートゥアーで 9 年制の中等学校ギムナジウムを卒業後、家業を継ぐ準備のためにイタリア、フランス、英国で商業の専門教育を受けた。

1891 年、ウィーンで東洋絨毯博覧会（詳細は第 4 章で後述）が開催されると、彼は「ペルシア絨毯」の流行の兆しを鋭敏に察知し、直ちにオリエントの絨毯の輸入に着手した。当初は英国の絨毯市場を経由して絨毯を輸入していたが、1904 年に自らガージャール朝イランとオスマン帝国へ絨毯の買い付けに赴き、現地の絨毯商人や外交官と幅広い人脈を構築した。

この際に、彼自身も絨毯の魅力の虜となり、16 世紀から 20 世紀に織られた数百枚の絨毯を収集した。ピュンターが 1917 年に発表した著書（資料 c）、および 1921 年に発表した著書（資料 d）には、ピュンターのプライベート・コレクションの目録が収録されており、その製作地や分類方法から、ミュッラー商会が絨毯を選別した基準を探ることができる貴重な資料である。

ピュンターは、長年にわたる絨毯研究の成果が評価され、1917 年に在チューリヒのイラン領事に任命され、さらに 1921 年から 1937 年まで総領事を務めた。領事としてのピュンターの仕事は、ガージャール朝イランの王族や政府関係者がスイス国内で法律に抵触した場合に、彼らの治外法権を主張し、保釈させるための交渉人の役割を担った<sup>35</sup>。故に、ピュンターはスイスとガージャール朝イラン政府との外交関係において重要な役目を果たしていたと推測できるが、ピュンターの領事時代の記録はスイス国内で所在を確認することはできない。

### (3) 3代目マイヤー・ヴィドメール時代(1949～1958年)、4代目フェルディナンド・ブレイジー時代(1959～1994年)

カール・ゲオルク・マイヤー・ピュンターには、3人の子供(息子一人、娘二人)がおり、1949年に彼が経営陣から引退すると、長男のカール・ゲオルク・ヘンリー・マイヤー・ヴィドメール(Carl Georg Henri Meyer-Widmer 1905～1958年)が3代目経営者に就任した。ヴィドメールは有能な働きかけで経済界に影響力を及ぼしたと記録されているが、1958年に心臓発作で急逝したため、彼の詳しい記録は確認できない。

ヴィドメールに代わって急遽経営者に就任することになったのが、ピュンターの長女(ヴィドメールの妹)の婿フェルディナンド・ブレイジー・マイヤー(Ferdinand Blaesi-Meyer 1908年～没年不詳)である。とはいえ、最初からブレイジー単独での経営ではなく、舅で隠居の身にあったピュンターと12年間におよぶ共同経営を経てから、正式に4代目経営者に就任することになった。

ブレイジーは1962年にゾロトゥーン支店【写真18】を開店する一方で、1973年にリュムラング(Rümlang)に建木材用の自社倉庫を設置した。マイヤー・ミュッラー商会は、オリエント産絨毯と建木材(フローリング)の二つの看板を掲げることで、住宅環境を総合的に提案できる専門商会に特化し、他の商会との差別化を図った。このブレイジーの企業戦略の背景には、現代様式の住宅に床暖房が導入されることによって、厚手のパイル織り絨毯の需要が減少することに対する危機感を指摘できる。一部の絨毯蒐集家を除いて、一点数百万もする大判の豪華なパイル織り絨毯を買い求める顧客は減少の一途を辿っていたのである。

その後、1994年にマイヤー・ミュッラー商会は突如として解散することになった。チューリヒに現存する資料においては、同社が解散に至った経緯と要因が一切記録されていない。ブレイジーの次に会社経営がどのように展開されたのか、経営破綻による会社解散なのか、あるいは他に要因があるのか、真相は長年にわたり明らかにされてこなかった。19世紀後半から20世紀にかけて欧米における絨毯交易で巨万の富を築いたとされるマイヤー・ミュッラー商会の歴史は、1994年を境にまったく途絶えてしまったのである。

そこで、筆者は、絨毯研究家の杉村棟氏の友人で、スイス在住の美術書出版業の熊野幸太郎氏からの協力を仰ぎ、マイヤー・ミュッラー商会の内情を知る関係者を博搜した。結果、同社の元社員3名が見つかり、2015年11月にスイスで聞き取り調査を行うことができた。

この調査は、1994年の会社解散に至る経緯を究明することを主要な目的とした。また、



インタビューに応じた元社員から、1990年代初頭のマイヤー・ミュッラー商会店舗の写真や新聞広告の切り抜き【写真 19・20】、さらに内部従業員向けに発布されたベルン支店とゾロトゥーン支店の閉店通達文書【写真 21】を入手することができた。

次節では、文献資料と聞き取り調査で得た証言を併用することで、マイヤー・ミュッラー商会の経営形態、絨毯の専門知識をもつ社員の育成方法、会社解散に至った経緯を明らかにする。

## 第2節 会社解散に至った経緯—元社員の証言に基づいて

筆者は、2015年11月14日と16日の2回に分けて、スイス国内でマイヤー・ミュッラー商会の元社員3名に聞き取り調査を実施した。なお、元社員3名全員がスイス方言のドイツ語の話者で、英語での会話が不可能であった。そのため、11月14日の聞き取り調査では、チューリヒ在住の専門通訳士の真理子・シュナイザー氏に、16日の聞き取り調査では熊野幸太郎氏とアンヌ・クロード夫人に、それぞれ同席の上、インタビューを適宜補助して頂いた。各回の聞き取り調査の要約を以下に記す。なお、無回答の項目は除外し、正確な回答を得られた部分に厳選した。

### (1) 聞き取り調査①サンバスチャン氏とルディン氏の事例

1回目の聞き取り調査は、2015年11月14日午前10時から昼の12時過ぎにかけて、チューリヒ市内で行われた。インタビューに応じたのは、元社員のホセイン・アリー・サンバスチャン氏（Hossein Ali Sang Bastian）とリチャード・ルディン氏（Richard Rudin）【写真22】である。

サンバスチャン氏は、1959年生まれのイランのマシュハド出身で、インタビュー当時57歳である。母国イランの実家は代々、バーザールで絨毯店を営んでいた。彼はイスファハーンで絨毯の修繕職人として働いていたが、1978年から1979年にかけて勃発した「シャールの革命」<sup>36</sup>を機にスイスへ移住して来た。1986年にマイヤー・ミュッラー商会に入社し、絨毯の修理専門のアトリエのチーフを務めた。ただし、1994年には社員が不足していたため、営業部門の業務も請け負ったという。しかし、彼もまた同年に会社を退職して独立し、現在はチューリヒ市内に絨毯工房を構えている。今回のインタビューは彼の絨毯工房で行われた。

一方のルディン氏は、1933年生まれのチューリヒ出身で、インタビュー当時82歳である。彼は、15歳からマイヤー・ミュッラー商会で研修生として働きながら、商人になるためのビジネススクールに3年間通ってビジネスのディプロマを取得した。当時、ビジネススクールに通学できる条件は学校における成績優秀者に限られており、マイヤー・ミュッラー商会の全社員150名中、研修生は4名であったという。その後、ルディン氏は、経理部門、営業部門、絨毯と木材の買い付け先を選定する責任者を経験し、取締役のブレイジー氏

の右腕的存在として、社内でナンバー2の地位を登りつめた。同社に42年間勤めて退職した。

筆者がマイヤー・ミュッラー商会の解散の経緯について尋ねると、サンバスチャン氏は次のように答えた。

3代目経営者のマイヤー・ピュンターの息子が早世したため、長女の夫であるブレイジー氏が4代目を引き継いだ。しかし、ブレイジー氏には子供がいなかった。会社は長らくブレイジー氏とルディン氏の二人三脚で経営してきたのだった。1990年代初頭に、マイヤー・ピュンターの次女の娘で、ブレイジー氏の姪にあたるミレラ・ガバトゥール嬢（Mirella Gaberthüel）が、当時80歳位だったブレイジーを役職から引退させ、5代目経営者に就任した。会社は彼女の独断で解散させられ、社員は退職金等をほとんど受給することなく解雇させられたという。サンバスチャン氏は、会社解散の日に本社前に巨大なコンテナが設置され、経営に関するすべての書類が投げ込まれ廃棄された光景を目撃している。

その後、ゾロトゥーン支店とベルン支店は賃貸物件であったため、不動産会社に返却された。チューリヒ本店は自社ビルで、ガバトゥール嬢の私有財産となった。現在は改修して、スポーツジムとレストランに賃貸しており、彼女はこの家賃収入で生活している。また、彼女の娘2人はチューリヒの山手地区にある別荘を相続している。

1994年以降、マイヤー・ミュッラー商会は二つの会社に分裂した。一つがボーデンペラーゲ社（Bodenbelage）で、テキスタイル、リノリウム、PVCの床敷きの専門会社である。リュムラングに本拠地を置き、2000年頃まで存続した。マイヤー・ミュッラー商会のフローリング部門を担当した元社員が会社株主として名を連ね、床敷き職人も多数所属した。主な顧客は、IBM、スイス再保険会社（Schweizerische Rückversicherungs-Gesellschaft AG）、チューリヒ空港駅で、とりわけIBMとスイス再保険会社からは何千平方メートルものフローリングの発注があった。

二つめの会社は、オリエント絨毯会社（Orient Teppich Gesellschaft）で、これは各店舗にあった絨毯の在庫をすべて売却するために2000年頃まで存続した。マイヤー・ミュッラー商会が誇った貴重な絨毯コレクションは、ニューヨークやロンドンで競売にかけられ処分された。

次に、筆者は会社解散以前のマイヤー・ミュッラー商会の経営体制について質問し、以下の貴重な証言を得ることができた。

マイヤー・ミュッラー商会の店舗は、チューリヒ本店、ベルン支店、ゾロトゥーン支店で

ある。顧客はスイス人と他のヨーロッパ人で、イラン人も来店していた。同社が保有した 200 年から 250 年前に織られた絨毯コレクションは、当時のヨーロッパで随一のコレクションであった。

新入社員はまず研修生として上司から 3 年間にわたって技術を学び、最後に絨毯の専門試験を受験した。社員は、部族ごとに模様と色合いと織糸に基づいて、「ペルシア絨毯」と他の絨毯を識別した。オリエントに工場をもたず、現地の村民に手織り絨毯を織らせて、その中からヨーロッパ人好みの寸法と良質の色合いのものを選び出していた。というのも、イラン人の織り手はヨーロッパ側の寸法やデザインに関する要望に合わせて織ることができなかったからである。

ここで筆者が絨毯の買い付け経路について尋ねたところ、マイヤー・ミュッラー商会の資料 b に記録されているイスタンブル経由の経路は初期のルートであることがわかった。サンバスチャン氏やルディン氏が勤務していた 1980 年代には、イラン現地の村長と取引価格を取り決めて絨毯を買い上げ、テヘランからトラックでチューリヒへ運搬した。アッペンツェル地方（Appenzell）に位置する絨毯清掃業のクネヒト株式会社（Knecht AG）で輸入した絨毯を洗浄することが義務付けられていた。後年には中国やチベットからも絨毯を輸入したこともあった。

2 代目経営者でチューリヒ在住のイラン領事を務めたゲオルク・マイヤー・ピュンターは、イラン政府と非常に近い関係にあった。彼は、スイス滞在中のイラン人に対して経済的な支援を行った。また、ピュンター自身もテヘランで絨毯を買い付けて、タブリーズへ運搬したり、飛行機でカブールへ赴き、現地でロシアやアフガニスタンで織られた古絨毯を探し出してきた。当時コーカサス産の古絨毯を購入する場合、買い付けの内訳を、近年織られた絨毯とアンティーク絨毯の比率を 9:1 にしなければロシア政府が絨毯の輸出を許可しなかった。ピュンターは毎回の出張で何万フランもの絨毯を買い付けたが、それでも数が足りない場合は、ロンドンやイスタンブルの絨毯市場へ買い付けに向かった。

以上がサンバスチャン氏とルディン氏への聞き取り調査の結果である。サンバスチャン氏は、1994 年当時の絨毯売却契約書を保持していたが、顧客の個人情報が多く含まれている点を理由に、筆者が記録を取ることは叶わなかった。

## (2) 聞き取り調査②ツィーグラー氏の事例

続く 2 回目の聞き取り調査は、2015 年 11 月 16 日午前 10 時から夕方 4 時にかけて、ベルンとバーゼルの間でアーレ河畔に位置する地方都市ゾロトゥーン（Solothurn）で行われた。チューリヒからは、特急列車で 1 時間ほどの距離である。

ここでゾロトゥーンについて少し解説しよう。その歴史はローマ時代に遡り、中世には自由都市として発展した。現在も旧市街に 12 世紀から 18 世紀の建物が残っており、とりわけスイスで最も美しいバロック建築を有する都市として有名である。この都市の最大の特徴は、教会や噴水、塔の数、大聖堂の祭壇や鐘、正面階段の数などがすべて 11 あり、州としても 11 番目にスイス連邦に加盟するなど、聖なる数字 11 にまつわる町と呼ばれている点である。

インタビューに応じたのは、元社員のオリヴァー・フランツ・ツィーグラー氏（Oliver Franz Ziegler）【写真 23】である。ツィーグラー氏は、1964 年<sup>37</sup>にゾロトゥーンに生まれ、インタビュー当時 51 歳である。ツィーグラー家は 1525 年から続く地方名士の家柄で、インタビューを行ったツィーグラー氏の絨毯店の店舗も中世から残る歴史的建築物であった。

また、ツィーグラー氏の曾祖父の又従兄弟（der Coucousin meines Urgrossvaters）のフィリップ・ツィーグラー（Philipp Ziegler）氏は、英国系大手絨毯商社のツィーグラー商会の創業者である。

ツィーグラー氏は、ゾロトゥーンの商業学校を卒業後、1982 年にマイヤー・ミュッラー商会に入社した。彼は同社で働きながら 2 年間ビジネススクールに通った。さらに、研修生としてスイス国立専門学校（SFD Zürich）で絨毯と染色の専門知識を 4 年間にわたり学んだ。専門学校修了時に国家試験を受験し、当時としては最年少の 24 歳<sup>38</sup>で合格したという【写真 24】。

国家試験合格後の 1988 年、ツィーグラー氏は故郷のゾロトゥーン支店長に着任した。すでに 1962 年に開業していたゾロトゥーン支店【写真 25・26】では、ツィーグラー氏の支店長就任時の従業員は 7 名で、全員がツィーグラー氏よりも年長者であった。

絨毯の専門知識をもつツィーグラー氏は、ミュッラー商会全店舗における絨毯の買い付けを担当し、トルコやイランへ度々出張した。その様子はツィーグラー氏の私蔵アルバム【写真 27】に記録が残されている。絨毯販売の繁忙期は春と秋であり、その間の期間の年

2 回に絨毯の買い付けがあった。1 回の買い付けにつき、5 万フランから 30 万フランを投資しており、毎回 80 枚から 150 枚の絨毯をスイスへ輸入した。ツィーグラー氏の証言によると、過去最高価格の絨毯は 29 万フランであった<sup>39</sup>。また、顧客の要望に応じて好みの絨毯を仕入れて販売することもあったという。

ツィーグラー氏の仕事は絨毯の仕入れ業務だけに留まらなかった。彼は、チューリヒ本店、ベルン支店、ゾロトゥーン支店における絨毯の展示販売会の企画立案から、顧客向けのカタログの作成に至るまで、絨毯の流通に関連する複数の業務を幅広く担当したのである。

以下、ツィーグラー氏からの聞き取り調査の要約を記す。なお、筆者はツィーグラー氏に対して、すでに 11 月 14 日のサンバスチャン氏とルディン氏からの聞き取り調査で、ガヴァトゥール嬢が会社解散に関与した証言を得たことを話した。筆者が事情を把握していると知り、ツィーグラー氏も率直に質問に回答した。

ここで改めて、筆者はマイヤー・ミュッラー商会が解散した要因をツィーグラー氏に尋ねた。ツィーグラー氏の話によれば要因は 3 つ挙げられる。第一に跡継ぎがいなかったこと。第二に、マイヤー・ミュッラー商会が主力商品としていた古典的なデザインの絨毯の需要が低くなったこと。そして、第三に、ガヴァトゥール嬢の出現である。

1970 年代は絨毯ビジネスの盛期だったが、1980 年のイラン・イラク戦争以後、イラン産絨毯の質は低下した。しかしながら、一部の顧客はツィーグラー氏の鑑定眼を信頼して購入し続けたのである。マイヤー・ミュッラー商会は、高級で古典的な図案の絨毯を販売し続ける一方で、キリムの販売をあまり重要視しなかった。このような経営方針が時代の変化と傾向についていくことができず、経営不振の一因になったとツィーグラー氏は結論づけた。

ツィーグラー氏は 4 代目経営者のブレイジーに目をかけてもらっていたが、彼の死去後にガヴァトゥール嬢が会社の整理に着手した。ツィーグラー氏がガヴァトゥール嬢にゾロトゥーン支店を買い取ると申し出たところ、不動産の売値を高く上げられたので、彼は断念した。ツィーグラー氏はミュッラー商会を退職して、1991 年 11 月 14 日にゾロトゥーンで現在の店舗を開業した。

続いて、筆者はツィーグラー氏が勤務した 1980～1990 年代におけるマイヤー・ミュッラー商会の経営体制に関する詳細な情報を得られた。

マイヤー・ミュッラー商会のチューリヒ本店は、体育館の広さに（販売用の）絨毯が敷き詰められていた。ベルン支店の従業員は 30 名ほどであった。サンクトガレン支店は 1920 年に開店したが、第二次世界大戦前に閉店した。従業員 100 から 150 名のうち、絨毯の専門

家は4名であった。

「ペルシア絨毯」と他の絨毯を識別方法については、「ペルシア絨毯」の80%が花模様と植物模様であることから、絨毯の図案に依拠して区別していたことがわかった。オリエントの絨毯の枠組みは、イラン、アフガニスタン、ロシア、トルコ、コーカサスである。インド、パキスタン、モロッコの枠組みは第二次世界大戦後にできたものである。

マイヤー・ミュッラー商会の事業の内訳は、絨毯販売が65%、床敷き（フローリング）と絨毯の修繕・クリーニング関係が35%である。オリエント現地で絨毯の織工を雇い、絨毯の生産過程を管理下に置いていた。トルコでは、個人の職工と契約を結んで織らせていた。イランでは、二通りの方法があり、一つめの方法は個人の職工と専属契約を結び、家内制工業で織らせた。二つめの方法は、ソルターナーバードの工場職工を雇い織らせた。この工場は1920年まで操業したが、世界大恐慌の影響で閉鎖された。同時期に英国系のツィーグラマー商会もソルターナーバードで絨毯工場を経営しており、両者が互いの存在を意識していた可能性は高い。

ツィーグラマー氏が買い付けを担当していた時代は、イランやトルコの現地の代理店を通して売買取引を行い、初めに先方に売値の15%を支払い、スイスに商品が到着してから残額を支払う方式を導入していた。支払い手続きや経理書類、税関書類は現地の会計事務所を通し、買い付けの際に車の運転手と通訳者を同行させた。通訳者は英語またはフランス語のできる者で、学生の通訳者も含まれていた。マイヤー・ミュッラー商会のような絨毯取引は、当時のイランとトルコにとっては外貨獲得の良い商売であったとみられていた。

1960年代から1980年代にかけては、仕入れ価格の7倍の価格で絨毯を売却することができた。チューリヒ本店では、1970年代から1980年代に年間500万フランの絨毯の売り上げがあった。しかし、1990年代に入ると、絨毯の販売価格は仕入れ価格の3.5倍に留まった。ゾロトゥーン支店では閉店の1年前の時点で、年間70万フランの売り上げがあり、床敷きの収益を含めると年間90万フランであった。

昨今の顧客は15年に一度のサイクルで、部屋の模様替えに合わせて、カーテンのように手頃な価格の絨毯に買い換える傾向に変化した。ツィーグラマー氏の店の年間売り上げは総額130万フランで、そのうち絨毯が60万フランを占めている。ツィーグラマー氏は、絨毯の収益が今後増える見込みはないと推測している。

マイヤー・ミュッラー商会の絨毯貿易に関する経理書類は、会社解散の日に廃棄処分されて現存していない。だが、このツィーグラマー氏へのインタビューで、ミュッラー商会がチュ

ーリヒのイスラエル週刊新聞に広告を出していたという証言を得ることができた。

インタビュー実施後、筆者はフロリダ大学デジタルコレクション（University of Florida Digital Collections）でマイヤー・ミュッラー商会の広告を確認することができた。広告が掲載された媒体は、『イスラエル週刊誌』（Israelitisches Wochenblatt）30 周年記念号（1930 年発行）と 50 周年記念号（1951 年発行）【写真 28・29】である。ミュッラー商会の広告は、30 周年記念号で 1 ページ分、50 周年記念号で半ページ分の紙面を占めており、顧客層に大きな影響を及ぼしていたと推察できる。

会社解散後、マイヤー・ミュッラー商会の絨毯コレクションはニューヨーク・クリスティーズで競売にかけられた。なかには、内密に処分されたものもあった。絨毯コレクションは 1990 年代の時点で 350 点にのぼり、ツィーグララー氏はそのうちの 2 点を所有している。

以上がツィーグララー氏への聞き取り調査の成果である。

### (3) 小括

3 名の元社員に対するインタビューを整理すると、次の二点に要点を集約できる。

第一に、マイヤー・ミュッラー商会が解散した最大の要因は、4 代目ブレージー氏の直系の後継者の不在を発端に、ガヴァトゥール嬢が経営実権を奪取し、独裁的な経営転換を実行した点である。しかし元社員は、すでに 1980 年代後半から、マイヤー・ミュッラー商会の絨毯の売り上げが減退の一途を辿っていたことを証言している。

元社員のサンバスチャン氏は、近年における絨毯産業の衰退の要因として次の二点を指摘した。一つめに、住居建築の構造の変化である。1980 年代から 1990 年代にかけて、ヨーロッパの住宅で床暖房化や二重窓の完備化が急速に進むことによって、住宅そのものが高い防寒・断熱・遮音の機能を持つことになった。以前のように絨毯に防寒対策としての機能を求めなくなったのである。二つめに、家族構成の変化である。核家族化や単身世帯の増加にともない、メンテナンスに手間と費用がかかる高価な絨毯を購入して、幾世代にわたって相続するという行為自体が減少しているという。

このような住居建築の構造の変化と家族構成の変化を背景に、マイヤー・ミュッラー商会も影響を受けていたと言えるであろう。確かに 1990 年代初頭の時点では、ミュッラー商会は深刻な経営不振の状況にはなかった。だが、ガヴァトゥール嬢の登場は、10 年後、20 年後にいずれ訪れる経営破綻の危機を早めたに過ぎないと分析できよう。



第二に、マイヤー・ミュッラー商会では、国家資格制度に基づいて専門知識を有する社員を養成し、優遇していた点である。例えば、ツィーグラー氏はミュッラー商会に勤務する傍で、スイス国立専門学校で絨毯の専門知識を学び、絨毯専門家としての国家資格を取得した。その後、彼は 20 代半ばでゾロトゥーン支店長に任じられ、自分よりも年長の部下を持つこととなった。ミュッラー商会では、国家資格という明確な判断基準を導入することで、確かな知識と技術を保有する社員には昇進と活躍の場が約束されたのである。

それでは、マイヤー・ミュッラー商会はどのような経営体制のもとで、絨毯交易を展開していたのであろうか。次節では、トルコおよびイランにおけるマイヤー・ミュッラー商会による絨毯の流通経路の変遷を詳しくみていく。

### 第3節 トルコおよびイランにおける絨毯交易

#### (1) 経営体制の特色

【写真 14・30】が示すように、マイヤー・ミュッラー商会は、数千枚にのぼるオリエン  
トの絨毯の在庫を抱える常設の展示場を店舗に完備しており、顧客はスイスにしながら、多  
種多様な高品質の絨毯をその場で自由に手にとって吟味することができた。

また、初心者の方の絨毯収集家に対しては、専門知識をもつ社員が、高品質の絨毯と廉価の模  
造品の識別方法や、住まいにおける絨毯と家具の配置を助言する講座を設けた。例えば、マ  
イヤー・ミュッラー商会による顧客向けの案内書では、住まいにおける絨毯の重要性と具体  
的な使用例を次のように述べている。

「快適な住まいのインテリアを決定する最も重要な要素は絨毯である。どんなに高価な  
家具も絨毯との調和なしには効果を発揮することができず、部屋の配置も不完全である。  
真正のオリエンタの絨毯は、その豪華で色鮮やかな存在が空間に安らぎをもたらす。持ち  
主が丁寧に扱えば、真正の絨毯は我々の日々の生活を存分に楽しませてくれる。(中略)  
書斎の床には重みのあるアフガニスタン産の絨毯を敷き詰め、安楽椅子には柔らかい礼  
拝絨毯を掛け、窓ガラスとドアにはキリムまたは刺繍が施された飾りを下げる。食堂、応  
接間、婦人部屋、寝室は豪華で上品な絨毯が良い。一番目を引くお気に入りの絨毯は玄関  
ホールに敷くことで、住まいに絶えず素晴らしい存在感を放つことだろう。<sup>40)</sup>

このように、マイヤー・ミュッラー商会は、ヨーロッパの住まいの中に絨毯を融合させた  
新しい生活様式（ライフスタイル）を具体的に提案し発信することによって、古参の絨毯愛  
好家だけでなく、新規の顧客を積極的に獲得していったのである。

では、急増する顧客からの注文に対して、マイヤー・ミュッラー商会はどのようにして絨  
毯を確保したのであろうか。ミュッラー商会は、従来のロンドンを中心とするヨーロッパの  
絨毯市場を介さずに、オリエンタから絨毯を直接仕入れていた。また、社員を現地の絨毯取  
引と運搬の過程に同行させることで、絨毯の生産・買付け・流通・販売の全過程を一括して  
自社の管理下に置いた。これにより、スイス国内の店舗で高品質の絨毯を一定数常備できた  
のである。

オリエン特現地では、絨毯を専門に扱う仲買商人と専属契約を結ぶと同時に、絨毯の専門知識を有し、実務経験を積んだ社員を現地へ派遣し、絨毯取引の現場に立ち会わせた。絨毯の仕入れには数か月、時には数年の月日を費やした。さらに、得意先の顧客の要望を基にセミ・オーダーメイドの絨毯を買付け、スイス国内の顧客の自宅まで配送するサービスも行っていたのである。続いて、1900 年代初頭と 1980 年代における絨毯交易の経路を比較しよう。

## (2) 1900 年代初頭における絨毯交易の経路

すでに述べたように、マイヤー・ミュッラー商会の会計書類は、1994 年の会社解散に伴ってその大半が廃棄されて現存しない。しかし、ミュッラー商会の文献資料に、当時の絨毯交易の一部を示す貴重な記録が残されている。

在パリのイラン公使館の記録に基づく【図 2】は、1913 年 5 月 21 日から 1914 年 5 月 20 日における「ペルシア絨毯」の輸出先の一覧である。1 クランは 1 フランに相当する。一覧を見ると、対ロシアの約 2,861 万 7,056 クラン、対トルコ（当時はオスマン帝国）の約 1,529 万 2,132 クランと記されており、ロシアとトルコへの絨毯輸出額が抜きん出ていることがわかる。一方で、スイスへの輸出額は約 4 万 7,756 クランに留まっている。よって、「ペルシア絨毯」はイランからトルコ国内の市場を経由して、ヨーロッパ方面へ流通していた可能性を推測できる。

ここで、マイヤー・ミュッラー商会社員による航海日誌を引用して、絨毯買付けの経路を辿ってみよう。記録に基づく、絨毯買付けの一行は、スイスからイスタンブル（日誌ではコンスタンティノーブルと表記される）、スミルナ（現イズミル）、ピレエフス（ギリシア南部の港湾都市でアテネの外港）、コルフ（ギリシア西部の島ケルキア）、ブリンディシ（イタリア南東部のアドリア海に臨む港でローマ時代の重要な軍港）、トリエステ（イタリア北東部アドリア海に臨む海港都市）を回って、海路でスイスへの帰路についた。この買付け経路を【地図 2】の赤の矢印に示す。

日誌はイスタンブルにおける絨毯買付けの場面から始まる【写真 31～36】。

絨毯の買付けを担当した社員は、日誌の中で「オリエントの人々との交易は全く独特である。目的を達するためには、彼らのことをよく知り、学ばなければならない。商売を成立させるためには慌ててはならない。時には辛抱を要する。」と記しており、真正の絨毯を求め

るために現地の文化と慣習に迎合することの重要性を強調している<sup>41</sup>。

以下、絨毯取引の様子を抜粋してみていく。

「絨毯の仕入れ価格に（両者が）同意すると握手を交わすことで交渉が成立する。絨毯はただちに報酬と引き換えに運送人（Hammals）または荷馬車の従者によって運び出される。その後、我々は大抵絨毯の買付けで骨の折れる仕事を続ける。（絨毯の）梱包作業と積荷を一箇所に集荷することだ。そして、海路でスミルナへ向かい、小アジアの絨毯生産地へ保養を兼ねて移動する。いわゆるスミルナ産絨毯（Smyrna-Teppich）を大量に買い付け、我々はその大部分をオリエントの絨毯（Orient-Teppich）として記載する。<sup>42</sup>」（括弧内および下線部は筆者による補足である。）

航海日誌の下線部の記述に注目すると、ミュッラー商会が実際の絨毯取引の現場で絨毯の産地区分を厳密に行っていたのか甚だ疑問である。ミュッラー商会がオリエント産絨毯を、「トルコ絨毯」（Türkische Teppiche）、「ペルシア絨毯」（Persische Teppiche）、コーカサス産絨毯（Kaukasische Teppiche）、中央アジア産絨毯（Zentralasiatische Teppiche）、インド産絨毯（Indische Teppiche）の5つの区分に分類した事実と矛盾している【図3】。

「コンスタンティノーブルを出港するに先立って、通行証の査察が必須である。税関を通過する際に、周知の時代遅れで厄介なやり方が明らかになった。税関職員は、長らく政府から給与を支払われていないため、いわゆる心付けに頼らざるを得ないのだ。出港の際は、埠頭やバルケと呼ばれるマストのない小舟に乗った警官から再び査証を受けねばならなかった<sup>43</sup>。」

上記の日誌からは、出港の際して度重なる通行証の査証があり、その都度、税関職員や警官に対して手数料と称する賄賂が必要とされる非常に煩雑な手続きがあったことが読み取れる。

続いて、第二の絨毯の買付け地であるスミルナについて次のように記述している。

「スミルナはただ傑出した美しい光景を呈しているだけでなく、トルコという国において最も興味深く、最も重要な交易都市のひとつである。絵画のように美しい生活と（人々

の) 往来が長く幅広い波止場を占めていた。無花果や干し葡萄や絨毯などの輸出品を積んだ隊商の列が内陸から港へと連なる光景が際立っていた。隊商の先頭をロバに乗った案内人が先導し、その後ろに先頭のロバと(紐で)結びつけられた重い積荷を背負った駱駝が続いた。最後尾の駱駝に鈴をつけることで案内人は隊商の列が付いてきていることを確認した。我々の絨毯の買付けでは、さらに複数の隊商の列を成して苦労を重ねたが、素晴らしい成果が得られた。我々は喜びに沸きながら、梱包した絨毯を汽船に積みこみ、スイスへの帰路についた。途中で、ピレエフスの都市を観光するためにアテネに立ち寄った。<sup>44</sup>」(括弧内は筆者による補足である。)

その後、絨毯買付けの一行はコルフ、布林ディシ、トリエステを経由してスイスへの帰路に着いた。

さて、ミュッラー商会は、なぜイスタンブルとスミルナの二箇所の港湾都市を絨毯交易の拠点に定めたのであろうか。両港で取り扱った絨毯に違いがあったのであろうか。

絨毯の流通経済史を研究している坂本勉氏によれば、アメリカのトルコ経済史家のドナルド・カートルトの研究で、オスマン帝国ではすでに 1860 年代から欧米向けの絨毯の商業的な生産が始まり、いわゆるカーペット・ブームが起きていたことがわかっている<sup>45</sup>。

当初、絨毯の産地はスミルナの後背地であるウシャクが中心であったが、1890 年代に入るとそこからイスパルタ、ブルドウル、コンヤ、ニーデ、カッパドキア、シヴァス、カルスといったアナトリアの内陸各地に広がり、さらにイスタンブル近郊のヘレケでも 1890 年以降、ブルサにおける養蚕の復興に合わせて官営工場での絹絨毯の製作が始まっていた。オスマン帝国で織られるこれらのヘレケの絹絨毯を除く「トルコ絨毯」の多くは、「ペルシア絨毯」とは異なってイスタンブルを中継地とせず、エーゲ海に沿った海港都市スミルナからロンドンに向けて輸出されていたのである。

とはいえ、イスタンブルを拠点に絨毯の輸出貿易に従事した商人が全く存在しなかったわけではない。「トルコ絨毯」にとって、イスタンブルは海外に輸出される絨毯の境域市場として重要な位置を占めていたことは間違いない。だが、オスマン帝国領内で織られる絨毯の約 90%はスミルナに集荷され、そこからロンドンをはじめとするヨーロッパ市場に向けて輸出されるのが通常であった。

他方で、イスタンブルは国外のイラン方面からもたらされる中継貿易の境域市場として重要であったが、オスマン帝国で生産される「トルコ絨毯」の集荷・集散地としては大きな

役割を果たすことはなく、「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」がイスタンブルで競合した可能性は低いとみられている。

ここで 20 世紀初頭のスマイルナにおける外国商会の動向に目を向けよう。前出のカータルトの研究によれば、スマイルナにおける絨毯取引を牽引したのはアルメニア系の **Spartali** 家であった<sup>46</sup>。同家はイタリア系の **Aliotti** 家と婚姻関係を結び、アナトリア中央部および西部で数千人の織工を抱える大規模な絨毯商会に成長した。この他に、イタリア系の **De Andria** 家、フランスに起源をもつ英国系の **La Fontaines** 家、英国系の **Bakers** 家などの外国商会が、それぞれ別個の直営の絨毯工場をつくり、ギリシア系、アルメニア系の非ムスリム商人を自らの傘下に入れながら絨毯の生産と流通を行っていた。

しかし、1908 年にオスマン帝国で青年トルコ革命が起きると、いたずらに競争することは利益を損なうとの思惑から複数の外国商会が共同で出資して独占的なオリエンタル・カーペット製造会社(**Oriental Carpet Manufactures Ltd.** 以下、**OCM** と略す) というトラスト会社を立ち上げた。

**OCM** は、英国の法のもとに置かれ、絨毯の原材料となる羊毛の収穫から、紡績、染色、絨毯織りに至る製造過程を幅広く手掛けた。結果、設立してわずか 2 年間のうちに、トルコ内の 27 の町で 10 万人の織り手が 2 万基の織り機を使用して絨毯を製作するようになり、1913 年までアナトリア全体で生産される絨毯の 4 分の 3 を占める存在へと成長を遂げたのである。ニューヨーク・クリスティーズの記録から、マイヤー・ミュッラー商会は、スマイルナに拠点をもつ **OCM** と業務提携を結んだことが分かっている<sup>47</sup>。つまり、ミュッラー商会は、イランで織られた「ペルシア絨毯」をイスタンブル市場で仕入れると同時に、オスマン帝国内で織られた「トルコ絨毯」をスマイルナ港で **OCM** から買付けて、ヨーロッパへの流通経路に乗せていたのである。

1913 年以降のマイヤー・ミュッラー商会の絨毯取引についての詳細な記録は現存しない。だが、業務提携の関係にあった **OCM** の動向からマイヤー・ミュッラー商会の痕跡を追うことは可能である。

**OCM** は第一次世界大戦を境に急激に業績悪化の一途を辿った。戦時中に多くのアルメニア人の織工を失ったため、絨毯生産に大きな支障をきたすこととなったからである。また、戦後の船舶不足によって商品の運送が困難になり、**OCM** は大量の絨毯の在庫を抱えることになった。最大の絨毯輸入国であったドイツ帝国およびオーストリア＝ハンガリー帝国は、敗戦で壊滅状態にあり、絨毯需要も激減した。さらに追い討ちをかけるように、1922 年 9

月に発生したスミルナの大火によって、埠頭にあった OCM の倉庫に収納されていた在庫の絨毯が焼失する結果となった。その後、OCM は再起を図るが、戦火による絨毯の織り手不足、トルコ共和国の新政府が定めた外国商会に対する重い関税の導入、政情の不安定化という外的要因によって、スミルナにおける絨毯交易は衰退したのである。

### (3) 1980 年代における絨毯交易の経路

前掲のマイヤー・ミュッラー商会元社員 3 名の証言に基づくと、1980 年代における絨毯の買付けは、イランを中心とする【図 2】の緑の矢印のルートへ変わったことがわかる。

イランでは個人の織り手と契約を結ぶ一方で、イラン北西部のソルターナーバードに絨毯工場を操業した。この工場は、世界大恐慌の影響を受ける 1920 年まで操業を続けた。

社員は現地の村長と取引価格を取り決めて絨毯をトラックに積載し、テヘランから陸路でチューリヒへ運搬した。現地の代理店を通して売買取引を行い、初めに先方に売値の 15%を支払い、スイスに商品が到着してから残額を支払った。支払い手続きや経理書類、税関書類は現地の会計事務所を通した。買付けの際は、車と運転手と通訳者を同行させており、通訳は英語またはフランス語のできる者で、中には学生の通訳も含まれていた。

絨毯の輸送にはスイスの運送会社プランツァーを利用し、絨毯をテヘランでトラックに集積し、トルコ、ユーゴスラヴィア、イタリアを経由してスイスに運んだ。スイス入国後にアッペンツェルフ地方に位置する絨毯清掃業のクネヒト株式会社で絨毯を洗浄することが義務付けられていた。

絨毯の取引価格については、会社解散の際に意図的に取引記録が廃棄されたため詳細は不明である。だが、当時買い付けの総括責任者であったツィーグラウ氏の証言によれば、絨毯販売の繁忙期は春と秋であり、その間の期間の年 2 回に絨毯の買い付けがあった。1 回の買い付けにつき、5 万フランから 30 万フランを投資しており、毎回 80 枚から 150 枚の絨毯をスイスへ輸入した。過去最高価格の絨毯は 29 万フランであった。1990 年のスイスフランと日本円の換金平均値は 1 フラン 93 円であることに基づいて換算すると、29 万フランは約 2,697 万円である。また、顧客の要望に応じて好みの絨毯を仕入れて販売する方式は創業当時から変わっていない。

#### (4) 「ペルシア絨毯」の複製の試み

マイヤー・ミュッラー商会は、売却用の絨毯とは別に高品質の「アンティーク絨毯」を収集し、マイヤー・ミュッラー・コレクションとして所蔵していた。その一部が 1970 年代から 1990 年代にかけて杉村棟氏によって国立民族学博物館に売却されたことは、前述した通りである。これらの絨毯は、サファヴィー朝イランに代表される 16～17 世紀作の精巧な「ペルシア絨毯」を近代ヨーロッパの技術によって複製するためのサンプル（標本）として保管された【写真 37】。絨毯コレクションは、初代カール・マイヤー・ミュッラー時代に収集が開始され、2 代目でイラン領事を務めたカール・ゲオルク・マイヤー・ピュンターに引き継がれた【写真 38】。

絨毯研究家であったピュンターは、サンプルとして収集した 159 点の絨毯を著書『美術工芸品史と貿易史におけるオリエントの絨毯』（前掲の資料 c）にまとめた。また、複製したペルシア絨毯 12 点を『マイヤー・ピュンターによるアンティークのペルシア絨毯傑作品集』（前掲の資料 d）で発表した。

絨毯の収集に際しては、ベルリン・イスラーム美術館のヴィルヘルム・ボーデ、サウス・ケンジントン博物館館長のカスパー・パードン・クラーク（Caspar Purdon Clark 1846～1911 年）といった美術館の専門家、さらに同業者である英国のヴィンセント・ロビンソン商会（Vincent Robinson Co.）やツィーグラマー商会と交流をもち、標本用の「ペルシア絨毯」の選別や、それを複製するための技術に関する助言を得ていたことがわかった<sup>48</sup>。

従来の研究においては、ことさら外国商会の競合関係が強調される傾向にあった。しかし、マイヤー・ミュッラー商会の事例を見る限りでは、外国商会が状況に応じて提携関係を結び、絨毯織り技術の情報を互いに共有することで、より高品質の絨毯を生み出し、絨毯交易の繁栄を支えていたといえることができる。

#### (5) 小括

本節で明らかになった点は次の二点である。

第一に、マイヤー・ミュッラー商会による絨毯の買付け経路は、19 世紀後半から 20 世紀初頭において、イスタンブル～スミルナ～ピレエフス～コルフ～ブリンディシ～トリエス



テであったが、1980年代に入るとテヘラン～トルコ～旧ユーゴスラヴィア～イタリア～イスと、海路から陸路へと変遷を遂げた点である。

なかでも特記すべき特徴は、1900年代初頭においてイスタンブルとスミルナの二つの海港都市が同社の絨毯交易の重要な拠点に据えられており、「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」の間で流通経路の棲み分けがなされていた点である。「トルコ絨毯」は、ウシャクを中心に一足早く1860年代から欧米向けの絨毯生産が本格化したため、絨毯生産地に近い海港都市スミルナが「トルコ絨毯」の集荷・集散地として確立されていた。これに対して、「ペルシア絨毯」は、イランからイスタンブルを経由する中継貿易の形をとってヨーロッパ方面へ流通したのである。

他方で、当時の絨毯売買に関与した商人たちが「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」を厳密に区別できていたのかという点については疑問が残る。マイヤー・ミュッラー商会は前掲の【図3】の通り絨毯の産地区分表を定めていたが、絨毯買付けの航海日誌では「いわゆるスミルナ産絨毯（Smyrna-Teppich）を大量に買い付け、我々はその大部分をオリエントの絨毯（Orient-Teppich）として記載する」と記述されており、産地区分に矛盾がみられる。

おそらく、「ペルシア絨毯」の場合も同様である。イラン方面からの商品が数多く集積されたイスタンブル市場において、個々の絨毯の産地を厳密に証明する術は皆無に等しいであろう。絨毯の図案や色彩から、ガージャール朝イランで織られた絨毯なのか、小アジアで織られた絨毯なのか、大まかに判断することもできたかもしれない。しかし、ヨーロッパの顧客好みの寸法・図案・色合いに合わせて織られた絨毯の識別は困難を極める。

むしろ、商人たちは「ペルシア絨毯」に表象された漠然としたオリエント像が絨毯に高い商品価値を付与することを重要視したと考えられる。絨毯の製作は寸法にもよるが、1年から数年を要する。厳密に真正の「ペルシア絨毯」を捜し求めるならば、欧米の顧客からの需要に供給が追いつかないことは自明である。1873年のウィーン万国博覧会以来のヨーロッパにおける絨毯需要を支えたのは、少数のイラン産絨毯と、多数の小アジア産絨毯であったといえるであろう。したがって、絨毯商人たちにとって「ペルシア絨毯」は、オリエント像を端的に表現したモノであり、顧客の購買意欲を惹きつける一種の広告塔の機能を果たす存在であったと考えられる。

第二に、「ペルシア絨毯」の複製にあたって、マイヤー・ミュッラー商会が英国のサウス・ケンジントン博物館とドイツのベルリン・イスラーム美術館の専門家、さらに同業の絨毯商会であるヴィンセント・ロビンソン商会とツィーグラール商会から絨毯の織り技術の助言を

受けていた点である。

マイヤー・ミュッラー商会とヴィンセント・ロビンソン商会、ツィーグラール商会の關係に着目すると、彼らは同業者間で絨毯に関する技術と情報を共有していたという新たな側面が明らかになった。また、マイヤー・ミュッラー商会と美術館（博物館）は、高品質の絨毯（商品）を作り出すという共通の目的に向かって提携を結び、「ペルシア絨毯」の複製を試みた。一見すると、両者はそれぞれ「絨毯を売買する商人（商業的領域）」と「絨毯を研究する研究機関（学術的領域）」の異なる立場と活動領域に属しているようにみられる。だが、ゲオルク・マイヤー・ピュンターという研究家と商人を兼ね備えた人物の登場によって、マイヤー・ミュッラー商会は美術館（博物館）の司る学術的領域への進出を果たした。

マイヤー・ミュッラー商会にとってみれば、「ペルシア絨毯」の複製化は高品質の絨毯を「商品開発」して販路を拡大するという商業的な動機が大きかったと言えるが、彼らの試みに英独を代表する研究機関のサウス・ケンジントン博物館とベルリン・イスラーム美術館がビジネス・パートナーとして応えた点は非常に興味深い。現代における企業と研究機関の「産学協同」の關係がすでに 20 世紀初頭にあったといえるであろう。この事實は、「ペルシア絨毯」が商業的価値と学術的価値を併せもつ特異な存在として人々を魅了してやまないことを証明している。

それでは、「ペルシア絨毯」はどのような歴史的過程を経て、その学術的価値を高く評価されるように至ったのであろうか。次章では、ベルリン・イスラーム美術館を中心に絨毯研究の発展の過程を詳しく追っていくことにする。

### 第3章 絨毯研究家がとらえたオリент像—ベルリン美術館を中心に

#### 第1節 ヴィルヘルム・ボーデの絨毯コレクション

ヴィルヘルム・ボーデ【写真 39】は、ドイツのベルリン美術館のキュレーター、そして独立したひとつの美術館としてヨーロッパで最初にイスラーム美術館を創設した人物である。彼は、当時のドイツにおいて、先見の明をもってオリент産や東アジア産の美術品を数多く収集していた。とりわけ、オリентの絨毯の収集に対する情熱は高く、1904年のベルリン・イスラーム美術館の創設に際して、ボーデ自身の「ペルシア絨毯」コレクションを寄贈しており、近代ドイツのイスラーム美術史研究における功労者として高く評価されている。

現在まで、ボーデの著した主要論文や書籍は、ドイツ語に限らず複数の言語に翻訳されており、また1995年のボーデ生誕150周年の節目には記念論文集<sup>49</sup>が出版され、様々な切り口からボーデ研究が取り組まれていることがうかがえる。2009年には、東アジア美術部門(1907年)の設立をめぐり、ボーデと東洋学者オットー・キューメル(Otto Kummel 1874～1952年)との間で交わされた往復書簡が一般公開され、書籍が出版された<sup>50</sup>。一方で、日本では、ボーデの絨毯コレクションを近代ドイツのイスラーム美術史研究あるいはオリент学研究の枠組みに位置付けて論じた先行研究は確認できない<sup>51</sup>。

ボーデは自らの手記や著書において、イスラーム美術やオリентに対する独自の見解をたびたび綴っていた。ボーデは生涯を通じて、同業の美術館関係者から研究者、貴族階級から新興のブルジョワジーまで含む個人収集家、古美術商、外国商会、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世に至るまで幅広い人脈を構築しており、彼らとの交流がボーデの思想に多大な影響を及ぼしていた可能性を推察できる。ボーデを絨毯の収集に惹きつけた要素は何であったのか。絨毯を媒介として、ボーデはどのようなオリент像を思い描いたのであろうか。

第3章では、ボーデを中心に、18世紀後半から19世紀前半のベルリンにおける新しい研究分野の絨毯研究の歩みを整理する。まず、はじめにボーデの絨毯コレクションを基底とするベルリン・イスラーム美術館の設立の過程を明らかにする。次に、ボーデの手記と所蔵目録を照合して、ボーデと個人収集家の関係が同美術館の絨毯コレクションの構成にどのように反映されたのか分析を試みる。

## (1) ボーデとオリエントの絨毯

ヴィルヘルム・ボーデは、1845年12月10日、現在のドイツ・ブラウンシュヴァイク州の官吏一族のもとに生まれた。彼は幼少期から病弱であり、特に片頭痛や消化器系の病には生涯にわたって苦しめられたといわれている。ゲッティンゲン大学とベルリン大学で法学を修めたボーデは、1867年にブラウンシュヴァイク州の監査役に職を得た。しかし2年後、長年にわたり秘かに温めていた美術史研究の夢を叶えるために監査役を辞職し、ベルリンの美術史家のマックス・リーベルマン（Max Liebermann 1849～1935年）のもとで研鑽を積んだ。ボーデは、美術品を模写し、独自のアレンジを加えた目録の編纂作業に没頭した。この目録作りこそが、のちに有力な個人収集家と親密な関係を築くために最大限に生かされることになる。

1871年、ボーデはライプツィヒ大学でルネサンス美術史の博士号を取得した。博士論文の題目は、「フランツ・ハルスとその学派」であった。彼は、専門とするイタリアのルネサンス美術史はもちろんのこと、美術史全般にわたる豊富な知識と、かつて法学分野で培った優れた実務経験を見込まれて、1872年に王立工芸美術館（Kunstgewerbemuseum）彫刻部門に助手として配属された。法学部出身という異彩を放ちながらも、彼は斬新な展示方法の提案や、当時はまだ珍しかった学術専門誌の発行、学芸員養成過程の整備と、多岐にわたる改革を手がけて実績を積んだ。

その後、彫刻部門長（1883年）、絵画部門長（1890年）、カイザー・フリードリヒ博物館館長（1896～1904年）と華々しいキャリアを歴任したのちに、1907年にベルリン美術館全体を束ねる総館長（Generaldirektor）に就任した<sup>52</sup>。1914年、ボーデはベルリン美術館における功績を讃えられ、皇帝ヴィルヘルム2世から、‘von’の称号を授けられた<sup>53</sup>。1920年に仕事を引退した後も、ボーデは名誉理事として美術コレクションの拡充や展覧会の企画、美術館改修計画に助言を与え続け、1929年3月1日に84歳でその生涯を閉じたのである。

さて、ボーデとオリエントの絨毯の出会いには1871年の春に遡る。古美術品を買い付けにイタリアのヴェネツィアを訪れたボーデは、地元の教会で無造作に置き去りにされていた珍しい文様の絨毯を目にした【写真 40】。彼はこの時の様子を次のように書き記している。

「この最初のイタリアへの旅の合間に、私は地元の教会や画家のアトリエで数枚のオリエン트의絨毯を見かけた。絨毯はその上に掛かっていた絵画とよく調和しており、私の目を惹きつけた。私は商人と交渉し、私個人のものと、工芸美術館用に良いものを2、3枚買い取ることに成功した。大きな絨毯でもわずか100から150リラに過ぎない価格であったのだ<sup>54</sup>。」

この記述のなかで興味深い点は、ボーデが絨毯の美しさを、絨毯の上に掛けられた絵画とのバランスを引き合いに出して表現している点である。ボーデの視点は、ただ絨毯の美しさに終始していたわけではなかった。彼は、オリエン트의絨毯と西洋絵画という異なる文化圏の美術品が、同じ空間に陳列されていながらも、互いの存在感を打ち消すことなく、不思議な調和を醸し出している点に着目したのである。ボーデは、この時に受けた印象を工芸美術館の展示方法に応用している。

【写真 41】にみられるように、ボーデは無機質な彫刻が陳列された展示室の壁に壮麗なオリエン트의絨毯を掛けることで、空間に深い奥行きを与えようと試みた。ボーデの意図は、陳列室をひとつの総合芸術作品として演出し、美術品が制作された時代に相応しい調度品や室内装飾と組み合わせることによって、鑑賞者がその時代を追体験できる点にあったのである。

また、絨毯の価値に着目すると、ボーデが同時期に美術館の展示用に絵画を2万7000リラで購入したと述べていた点から、古絨毯の価格が西洋絵画のわずか200分の1であったことが分かる<sup>55</sup>。ボーデはこの後にも、頻繁にイタリアで古絨毯を収集していたことを詳細に記録している。

「年月が経つにつれて、私は工芸美術館に所蔵するための美術品のほかに、私自身の住まいを装飾するために、オリエントやペルシアの古絨毯を収集するようになった（中略）その大部分はイタリアで入手したものである。絨毯を何百年も保管していた教会は、商人との間で、古絨毯と耐久性のあるブリュッセル製の絨毯を交換していた。というのも、ブリュッセル製の絨毯の方が、教会にとってはより美しく色あせないように見えたからである。骨董商から古絨毯を買い取るのはせいぜい画家くらいで、しかも非常に安価で取引されたのであった<sup>56</sup>。」

上記の記録から、ボーデがイタリアを訪れた 1870～1880 年代においては、オリエント産の古絨毯の市場価値が極めて低く見積もられていたことがうかがえる。また、骨董商からの絨毯の主な買い手が画家であった点は、17 世紀頃よりイラン産絨毯がフランドル絵画を中心に画家達の間で好んで描き続かれたことに由来するであろう。よって、この時期のオリエントの絨毯は、ボーデなどのごく一部の愛好家を例外として、オリエントを表象する異国情緒帯びた小道具でありながらも、陶磁器や絵画に並ぶ美術鑑賞品としてまだ高く評価されていなかったと考察できよう。

## (2) 「アンティーク絨毯」の再評価の動き

ボーデがイタリアで古絨毯を見出した頃、同時代のオリエントで織られた絨毯がヨーロッパを席卷しはじめていた。ところが、ヨーロッパにおける絨毯需要は思わぬ弊害をもたらすことになった。「ペルシア絨毯」の生産地イランでは、顧客であるヨーロッパ側からの要望にこたえるべく、化学染料（アニリン）を使用し、より鮮やかな色調の絨毯を製作し、輸出するようになった。また、絨毯の図案も、従来の古典文様からヨーロッパ人好みのモダンなデザインが採用するようになった。その結果、古くからオリエントで受け継がれてきた天然染料による染色方法や、伝統的な図案文様は次第に廃れていくこととなった。さらに、産業革命以後の機械織り機の導入によって、廉価なヨーロッパ産絨毯が大量生産されるようになり、オリエントの手織り絨毯は価格競争の波にのまれていったのである。

このような状況下で、ボーデと王立工芸美術館館長で絨毯収集家のユリウス・レッシング（Julius Lessing 1843～1908 年）の 2 人は、18 世紀以前に織られた古絨毯に歴史的な価値を見直そうと動き出した。当時は彼らのほかに古絨毯に注目した者はまだ僅かであったため、彼らは教会や廃屋でガラクタ同然に扱われていた古絨毯を手ごろな価格で入手できたのである<sup>57</sup>。

ここで同時代の英国に目を転じてみると、ボーデがイタリアで初めて「ペルシア絨毯」に出会った 1877 年に、英国人の美術家でのちにアーツ・アンド・クラフツ運動の旗手となったウィリアム・モリス（1834～1896 年）【写真 42】もまた古いペルシア産の絨毯に魅了された。モリスは 1878 年にハマスミスに工房を構え、本格的に手織り絨毯の製作に着手した。彼は 6 人の女性職工たちを雇い、3.57 メートル幅のフレーム織り機で一日 5 センチメートルずつ絨毯を織り上げたのである<sup>58</sup>【写真 43】。手織り絨毯の魅力に開眼したモリスは、

近代における工芸品の商業的な大量生産を批判し、効率や利益よりも「質」を追究する姿勢を訴え続けた。モリスの運動は次第にヨーロッパ各地に波及し、1890年以降、一般大衆の間においても「本物」の手織り絨毯を求める気運が高まり、注目を集めるようになった。とりわけ、1892年の「アルダビール絨毯」の事件が与えた影響は大きかったといえる。

「アルダビール絨毯」は、16世紀サファヴィー朝イランの第2代タフマースプ1世（Tahmāsb ibn Ismaʿil Safavi 在位1524～1576年）の命によって製作され、アルダビールモスクに奉納された。1880年代にモスクが改修工事をするにあたり、その費用を賄うために、絨毯は英国のツィーグラマー商会を介してロンドンのヴィンセント・ロビンソン商会に売却された。もともと、アルダビール絨毯は全く同じ図案のものが二枚一組で存在したが、ロビンソン商会は密かにその片方を犠牲にして4年の歳月をかけて絨毯を修復した後に、1892年にロンドンの展示競売会で売り出した。競売の結果、サウス・ケンジントン博物館（現在のビクトリア・アンド・アルバート美術館）が2,500ポンドという、当時としては破格の価格で落札したのである。絨毯を購入するに際して、ウィリアム・モリスが基金を立ち上げ、寄付を呼びかけたと記録に残されている<sup>59</sup>。

このような「ペルシア絨毯」をめぐる数々の出来事を契機に、美術蒐集家もオリエントの古絨毯を「アンティーク絨毯」と呼び、一流の絵画や骨董品と同類の美術品として収集し、鑑賞するようになった。しかしながら、消耗品である絨毯は、16世紀以前に織られたもので完全な形を留めているものは少なく、数も限られていた。したがって、古い絨毯の市場価値は高騰の一途をたどったのである。

### (3) 研究分野「絨毯研究」の創始

「アンティーク絨毯」に対する一般大衆の関心と需要が高まるのに連動して、ドイツ語文化圏では、絨毯の織り技術・図案文様・製作年代などを歴史学的に研究しようとする新しい研究分野の「絨毯研究」が創始され、大きく発展した。ウィーンでは、英国のサウス・ケンジントン博物館をモデルに、大学や博物館などの研究施設が整備されていった。これとほぼ同時期に、イスラーム美術史を専門とした学術雑誌が美術館のキュレーターらの手によって発行されている。研究の中心は絨毯と陶器が占め、最盛期にあたる1865～90年代には、60冊以上の専門書が発表されたのである<sup>60</sup>。

ボーデが研究論文を発表する以前の初期の絨毯研究者としては、先に触れたユリウス・レ

ッシング、ならびにウィーン王立図書館員で東洋学者のヨーゼフ・カラバチェク（Josef Karabaček 1845～1918 年）が挙げられる。レッシングが著した『15～16 世紀の絵画およびオリジナルに基づくオリエントの古絨毯文様』（*Altorientalische Teppichmuster nach Bildern und Originalen des 15-16 Jahrhunderts*. 1877）は、絨毯のデザイナー向けに、西洋絵画や実物の絨毯を基に図案を復元することを試みた。本書は、近代的な絨毯文様がヨーロッパで好まれるなかで、あえて伝統的なオリエントの絨毯の図案を復活させることを目的にした実用的な図案集である。

次に、カラバチェクの『ペルシア刺繍文様スーサンジルド』（*Die Persische Nadelmalerei Susandschird*. 1882）は、スーサンジルドという伝統的な技術で織られた絨毯に関する、アラブおよびペルシアの様々な文献を渉猟した文献学的研究である。この研究書は、初めてオリエントにおける現地言語の資料が用いられている点で画期的であったといえる。しかしながら、1890 年以前の絨毯研究は、オリエントの絨毯の市場価格を急騰させないようにとの配慮から、研究活動は大々的に進められなかった。したがって、研究論文も上記の二篇のみで、研究の本格化は 1891 年の東洋絨毯博覧会の開催を待たねばならなかった。

絨毯研究は、1891、92 年に大きな転機を迎えた。まず、1891 年にウィーンで最初に東洋絨毯博覧会（*Ausstellung orientalischer Teppiche*）が開催され、大変な好評を博した。博覧会の立役者でウィーンの王立工芸博物館キュレーターのアロイス・リーグル（Alois Riegl 1858～1905 年）は、同年に『オリエントの古絨毯』（*Altorientalische Teppich*. 1891）を出版した。

【写真 44】は、リーグルが企画に加わった東洋絨毯博覧会の様子を写した 1 枚である。ボードは手記のなかで、この博覧会における絨毯の陳列方法について批評を加えながらも、ウィーンにおける絨毯博覧会が絨毯研究の進展に大きな役割を果たしたと確信していた。

「展示は非常に雑多で、悪趣味に陳列されていた。最近織られた安物の絨毯が、格調高い古絨毯の隣に乱雑に陳列されており、まるでトルコの下品な市場のようであった。しかし、稀少価値の高い素晴らしい古絨毯の数々を通して、その後まもなく発表された研究論文が、後世のイスラーム美術展を活気づけたことは確かである<sup>61</sup>。」

この博覧会にみられる雑然とした市場の雰囲気は、リーグルを含めて当時の一般大衆の間に根付いていたオリエント像を体現していたといえるであろう。また、ボードの文中で挙



げられた「その後まもなく発表された研究論文」とは、おそらくボーデ自身が 1892 年に発表した論文「ベルリン王立博物館所蔵のペルシア古絨毯」を示しているのであろう。

この論文において、ボーデはふたつの自説を展開している。一つめに、絨毯の製作年代を推測する資料として、西洋絵画のなかの絨毯描写が有効であると主張した。例えば、ハンス・ホルバイン作の「大使たち」に描かれた絨毯（通称ホルバイン絨毯）からは、同時代のヨーロッパでホルバイン絨毯の模様が約 50 種のバリエーションで広く流通していたことが分かっており、同時代の様々な絵画でも描写を確認することができる<sup>62</sup>。ボーデが提唱した絨毯の製作年代の推測法は、レッシングの学説を踏襲するものであるが、新たにボーデは 15 世紀のヴェネツィアとネーデルラントで描かれた絵画から、新たに製作年代を推定できる絨毯文様を確認した。現代の専門家が、最新の鑑定方法とボーデの推測結果を照合したところ、両者の誤差はわずか 50 年であった。ボーデの年代推定法は、今なお有効とされている。

二つめに、ボーデは絨毯を製作された地域ごとに区分し、さらに「トルコ絨毯」を図案別に分類した<sup>63</sup>。ただし、分類別にみると、「ペルシア絨毯」・「トルコ絨毯」・スペイン産絨毯は区別されているが、インド産絨毯は「ペルシア絨毯」のなかに含まれるなどの問題点もみられる。ボーデの論文は、1914 年にベルリン・イスラーム美術館のキュレーターのエルンスト・キューネル（Ernst Kühnel 1882-1964）によって増補され、『近東の古絨毯』（*Vorderasiatische Knüpftteppiche aus älterer Zeit*, 1914）として出版された。後にはフランス語と英語に翻訳されている。

以上のように、レッシングとカラバチェックに始まった絨毯研究は、1891 年の東洋絨毯博覧会をはさんで、リーグルとボーデによって発展期を迎えた。二人が残した研究書は学会に大きな一石を投じた。なかでも、ボーデの提唱した研究手法は、現代ではごく当たり前の、絨毯を製作地域・製作年代順に分類する際の新たな基準を定義し、展覧会の陳列様式を一新した点から、特に大きな意義をもったといえよう。

## 第2節 美術館のなかの絨毯コレクション

### (1) ベルリン・イスラーム美術館の設立への道のり

当初、ボーデはイスラーム美術館を設置することを目指し、すでに他の美術館に所蔵されていたイスラーム美術コレクションを移動し始めていた。これに対して、ボーデの上司のリチャード・ショーン(Richard von Schöne 1840～1922 年)とレッシングを筆頭に美術館関係者は猛反発した。当時は、古代エジプト博物館(Ägyptisches Museum)と古代近東博物館(Vorderasiatisches Museum)に広い陳列室があてがわれる一方で、イスラーム期以降のオリエント産の美術品に対して独立した陳列室が配備されることは非常に稀であった。例えば、ベルリン民族学博物館では、イスラーム美術品が日本のシーボルト・コレクションと並んで展示されていたのである<sup>64</sup>。また、古代近東博物館では、ドイツ・オリエント協会(詳細は第4章で述べる)が長期にわたって発掘してきた古代メソポタミア遺跡の出土品が主要を占めており、イスラーム期の美術品を新たに収蔵できる余裕はなかった。

逆風に立たされたボーデだが、1902年に考古学者のヨーゼフ・ストルジゴヴスキー(Josef Strzygowski 1862～1941 年)の率いるドイツの考古学隊によって、ヨルダンの首都アンマンから南へ30キロ離れた地点でムシャッタ宮殿の城壁が発掘されると状況は好転した。この遺跡は、ウマイヤ朝第11代目カリフのワリード2世(Al-Walid II 在位743～744年)の時代の建築物で、ローマ時代の要塞を模しており、全長33メートル、高さ5メートルである。城壁の発掘の朗報を聞くや否や、ボーデは皇帝ヴィルヘルム2世に城壁をイスラーム美術館のコレクションとして確保するように請願を申し立てた。ボーデは、城壁の発掘からベルリンへの運搬の一部始終を手記に次のように綴っている(以下、括弧内は筆者による補足である)。

「ストルジゴヴスキー教授が私に打ち明けた話によると、この砂漠の宮殿の石の城壁は死海から東へ二旅程ほど離れたところで発見された。城壁は、メッカ鉄道の路盤工事のための資材として使用されていた。彼らは直ちにスルタンと交渉にあたり、遺跡を救いだすことに成功したという・・・(中略) 私が想像するに、皇帝ヴィルヘルムは、スルタンに(城壁を譲渡するよう)電報を打ったものの、当時の情勢から、その美しい城壁のわずか幅40メートル、高さ5メートルの部分的な寄贈という返答を得るだけで

精一杯であったのだろう<sup>65</sup>。」

さらに、城壁を現地からドイツへ移送する際には、

「考古学者で枢密顧問官のヴィーガンツ氏とバックスタイン教授からの寄付により、  
パルミラからの帰途、カメルンからジャッファまでの運送費を融通することができた<sup>66</sup>。」

と記している。ボーデが示した「メッカ鉄道」とは、すなわちヒジャーズ鉄道（巡礼鉄道）<sup>67</sup>であり、「スルタン」とはオスマン帝国のアブデュルハミト 2 世のことを指す。

ベルリン美術館は、1871 年にペルガモン大祭壇の大理石が発掘されて以降、ギリシア、小アジア、メソポタミア、エジプトで大々的な発掘調査を行い、相当量の収集品を獲得してきた。続々と考古学的業績を挙げるなかで、ムシャッタ宮殿の城壁も発見されたのである。

また、皇帝ヴィルヘルム 2 世は、1898 年にオスマン帝国下のエルサレムにあるカトリック教会の表敬訪問を機にオリエント考古学に強い関心を抱きはじめ、ドイツ・オリエント協会の名誉総裁としてオリエントにおける発掘調査に国庫から膨大な資金を投じていた。ムシャッタ宮殿の城壁は、まさにドイツ帝国が国家をあげて注力した文化政策の成果を体現する記念碑的（モニュメント）であった。ボーデから城壁の獲得を請願されたヴィルヘルム 2 世は自らの威信をかけてオスマン帝国のアブドゥルハミト 2 世に外交交渉し、「譲渡」という名目で城壁をベルリンへ迎え入れることに成功したのである。

その後の経過について、ボーデは次のように伝えている（以下、括弧内は筆者による補足である）。

「イスラーム美術館は、カイザー・フリードリヒ美術館の開館に合わせて創設され、私の絨毯コレクションの寄贈と、ザッレ教授が所有する古代イスラーム美術コレクションからの借用品で構成された。ザッレ教授は同時にイスラーム美術館の館長も引き受けた<sup>68</sup>。」

「イスラーム美術館は東アジア美術館に決して引けをとらない。イスラーム美術館には、歴史上、非常に重要な遺跡であるムシャッタ宮殿の城壁を所蔵しているからである。この城壁は、カイザー・フリードリヒ博物館の開館直前に（美術館に）寄贈されたため、

そこで一時的に保管せざるをえなかった<sup>69)</sup>。」

イスラーム美術館の開設にあたっては、十分な展示室のスペースと、観客を呼ぶインパクトが不可欠である。すでにベルリン美術館には古代エジプト博物館と古代メソポタミア博物館が設置されており、この両者に劣らず観客を惹きつける展示品の追加なしに新たな部門を開設することは困難な状況にあった。よって、8世紀ウマイヤ朝に建てられたムシャッタ宮殿の城壁の獲得は、ベルリン・イスラーム美術館の創設を大きく決定づける出来事であった。この城壁は分割された後にベルリンまで運搬され、カイザー・フリードリヒ博物館内に実寸大（全長 33 メートル、高さ 5 メートル）で復元されたのである。

以上の経過を経て、1904 年にカイザー・フリードリヒ博物館内の一角にイスラーム美術館が開館した【写真 45・46・47】。同館の開館当初の所蔵コレクションは、ボーデから寄贈されたペルシア絨毯 21 枚と、初代イスラーム美術館館長のフリードリヒ・ザッレ(Friedrich Sarre 1865～1945 年)【写真 48・49】から借用した 600 点を超えるアラブおよびペルシアの工芸コレクションを基底とした。のちに、ザッレは 1921 年にこのコレクションをすべてイスラーム美術館に寄贈した。1932 年にペルガモン博物館が新たに建設されると、イスラーム美術館はその敷地内へ移されることになった。

ボーデは絨毯コレクションを寄贈することによって、美術館理事会の一員として、美術館と密接な関係を保持し続けた。だが、新たな美術館を設立し、運営していくには経済的な後ろ盾が不可欠である。ボーデはどのような方法で、イスラーム美術館の運営を軌道に乗せることができたのか。次に、ボーデと後援者（パトロン）の関係を考察したい。

## (2) ボーデと個人収集家の相互扶助関係

ボーデにとって、最大の後援者はドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世であった。個人的に皇帝と親交の深かったボーデは、資金面における強力な後ろ盾を得ていた。1873 年には、政府から美術館への補助金を従来の 2 万ターレルから、約 5 倍の 10 万 6000 ターレルへ増額するように取り付けている<sup>70)</sup>。また、1894 年に富裕層の美術愛好家を対象にカイザー・フリードリヒ美術館協会を創設した際には、ヴィルヘルム 2 世自らが会長となり、美術館と個人収集家との結束に寄与している。皇帝から経済的後ろ盾を得て、ボーデはベルリン美術館を、フランスのルーヴル美術館や英国のサウス・ケンジントン美術館（現在のビクトリア・アンド・アルバート美術館）に匹敵する美術館にすることを目指し、コレクションの拡充に

尽力したのである。

しかし、政府からの補助金は潤沢であったものの、唯一の欠点はその煩雑な申請手続きにあった。美術品を購入する都度に事前に申請しなければならず、頻繁に競売会場を出入りするボーデにとっては、貴重な美術品を競り落とす千載一遇の機会を逸する一因ともなった。

そこで、ボーデは政府からの資金援助のほかに、独自に富裕層の個人収集家との人脈を開拓した【表 6】。以下に抜粋するのは、ボーデが寄贈を受けた収集家について記録した箇所である（括弧内は筆者による補足である）。

「私が自身のコレクションを（美術館へ）寄贈しようと思いついたとき—私はイスラーム美術館の設立と引き換えに寄贈することにしていたので、コレクションの受け入れに時間がかかったのだが—幾人もの知人、友人らが、彼らのコレクションの中から珍しい絨毯を寄贈品として提供してくれた。（彼らの名は）ハインリヒ・トゥッカー男爵、イェームズ・ジーモン、ハンス・ヴィルチェック伯爵、リヒテンシュタイン侯爵のヨハネス氏、ディルクセン博士である<sup>71</sup>。」

「我が家のキャビネットは、美術館の後援者から贈られた数多くの高価な美術品で埋め尽くされていた。その多くが国外の美術品である。（中略）リヒテンシュタイン侯爵のヨハネス氏、ハンス・ヴィルチェック伯爵、バイエルン公使のハインリヒ・トゥッカー男爵、そしてエドワード・ジーモン博士は、貴重な絨毯を私のペルシア産と小アジア産で構成されるアンティーク絨毯のコレクションに寄贈してくれた。私はそれらの絨毯をイスラーム美術館に譲渡した<sup>72</sup>。」

ボーデは富裕層の個人収集家に対して、何を購入すべきかを巧みに助言を与え、彼らの美術品の鑑定書や目録を無償で作成し贈呈した。ボーデがマックス・リーベルマンの研究生だった時分に修得した目録制作の技術がここで役立ったのである。ボーデへの感謝の気持ちとして、個人収集家たちは自身の美術品を美術館へ寄贈していた。ボーデと個人収集家の関係は、【図 5】に表される。

筆者がベルリン・イスラーム美術館所蔵の絨毯目録<sup>73</sup>を基に統計を取った結果、1867～1929 年（絨毯収集が開始された年からボーデの死去した年までの期間）の間に収集された美術品全 110 点のうち、購入が 96 点（87.3%）、寄贈が 14 点（12.7%）であることが分か

った（第二次大戦によって焼失した分を除く）【グラフ 1】。寄贈者は、貴族、学者、美術館関係者、ブルジョワジー収集家が主要を占めており、この点はボーデの記録と一致する。また、目録によると、匿名者からの寄贈や、所有者の死後に遺族によって美術館に譲渡された事例もみられる。以上の点から、すでに当時から絨毯などの美術品を公的機関に寄贈する行為が社会的貢献として浸透していたことが分かる。

美術館関係者の間では、ボーデと個人収集家の親密な結びつきを「ボーデ・システム」とすると非難する声も上がっていた。しかし、ボーデは寄贈された美術品以外の金品の受け取りを拒んだ。というのも、上流階級の家柄に生まれ、潤沢な資産を相続したボーデがなにより重要視したのは、個人的な報酬よりも、むしろ個人収集家と信頼関係を築くことであったからである。また、美術館のキュレーターとしての専門知識と手腕を生かし、美術館の発展に貢献することに誇りをもっていたと考えられる。ブルジョワジーを多く含む個人収集家は、美術品の寄贈を通じて、社会的名声を獲得することに成功した。このような、ボーデと個人収集家のいわば相互扶助の関係は、イスラーム美術館の発展に不可欠であったと評価できるであろう。

### (3) 小括

第3章では、ヴィルヘルム・ボーデによる絨毯収集活動を軸に、ドイツにおける絨毯研究の発展およびベルリン・イスラーム美術館の創設の過程をみてきた。

ボーデが、ベルリン・イスラーム美術館の創設をはじめとする数々の改革を達成できた理由のひとつとして、ブルジョワジーの収集家との特別な関係を指摘できる。実務経験豊かなボーデは、従来の政府からの補助金とは別に、ブルジョワジーの収集家との親交を深めることで新たな後援者を開拓した。ボーデが収集家に対して美術品の鑑定書や目録などを無償で与える一方で、収集家はボーデが館長を務めるベルリン美術館に絨毯を含む美術品を寄贈するという相互扶助（ギブ・アンド・テイク）の関係を結んでいた。

経済的な成功を収めたブルジョワジーの収集家たちにとっては、美術館への寄贈行為そのものが篤志家としての社会的な地位を格上げする重要な意味合いを持っていたといえよう。ボーデは、彼らの社会的な地位に対する渴望を見通し、うまく寄贈行為に繋げたのである。両者の親密な関係に対して、他の美術館関係者から非難の声が浴びせられることもあったが、むしろ、両者の関係なくしてベルリン美術館全体の発展も達成できなかったであろう。

それでは、ボーデはオリエントをどのようにとらえていたのだろうか。筆者は、ボーデが西洋絵画を通してオリエントをみていたと考える。確かにボーデはオリエント産絨毯に関する数多くの研究書を残したが、しかし彼自身はオリエント現地へ赴いたことがなかった。

ボーデとオリエントを結ぶ接点は、西洋絵画に描写された絨毯に始まったとみられる。ボーデが博士論文のテーマに選んだフランス・ハルス (Frans Hals 1582～1666 年) は、17 世紀のオランダ絵画の全盛期に活躍した画家である。すでに触れたように、同時代にはイラン産や小アジア産の絨毯が貿易新興国のオランダやフランドルの画家達の作品に頻繁に描かれていた。ボーデがハンス・ホルバインやヨハネス・フェルメールの絵画に描かれた絨毯を目にした可能性はきわめて高い。

また、ボーデが導入した西洋絵画の描写に基づいてオリエント産絨毯の製作年代を推測する手法や、オリエント産絨毯と同年代に製作された西洋美術品（絵画、彫刻）を同じ空間に陳列する手法は、ボーデの視点が常に西洋美術の時間軸に置かれていたことを如才に物語っている。絨毯は、西洋絵画を基に西洋美術史の時代区分の枠に当てはめられ、同年代の西洋美術との比較関係の中で論じられてきたのだ。

16～17 世紀のオランダやフランドルの絵画に描かれた絨毯は、同時代のサファヴィー朝イランあるいはオスマン帝国のもとで織られた絨毯であり、年代区分からみてイスラーム美術に該当する。絨毯の消耗しやすい材質上、ボーデの時代に 15 世紀以前の絨毯は存在しない。古代に起源を遡るオリエントの絨毯が古代近東博物館ではなく、イスラーム美術館に所蔵された理由はここにある。

また、ボーデが活躍した 19 世紀後半から 20 世紀半ばのドイツは、バグダード鉄道建設計画に代表されるように、皇帝ヴィルヘルム 2 世の積極的なオリエント進出政策を背景に、ドイツ国民の関心が急速にオリエントへ向かい始めた時代と重なり合う。このようなドイツを取り巻く世情が、ベルリン・イスラーム美術館設立構想を実現する追い風となったのである。

## 第4章 絨毯収集家がとらえたオリент像

### —イェームズ・ジーモンとその一族の動向を事例に

#### 第1節 東方系ユダヤ人ジーモン家の台頭

第4章では、1880～1910年代ベルリンにおける絨毯を含むオリент産の美術コレクションの拡充に重要な役割を担った東方系ユダヤ人収集家を事例に取り上げ、その経済的・社会的な動向が、近代ドイツにおけるオリент学研究的進展に与えた影響を考察する。

本論文で取り扱う東方系ユダヤ人（Ostjuden）は、ポーランド・ユダヤ人の同義語として使用する。かつてドイツを中心に暮らしていた「アシュケナジ」と呼ばれるユダヤ人は、14世紀の黒死病（ペスト）流行の際のユダヤ人大虐殺を機に、安住の地を求めてポーランドなどの東欧へ移住して繁栄した。もとをただせばドイツからの移住者でありながら、ドイツの人々からみれば、東方系ユダヤ人は中世以降にドイツのユダヤ人とは異なる歴史を歩んできた点で、オリентと同じくらいに異質な存在として捉えられていたのである<sup>74</sup>。

筆者は第3章において、ベルリン美術館総館長であったヴィルヘルム・ボーデが、個人的に親交の深い収集家の美術品を鑑定することと引き換えに、美術館への美術品の寄贈と多額の資金提供を受けることによって、イスラーム美術館の拡充に大きく貢献した点を明らかにした。その後、さらにボーデの手記を基に研究を重ねた結果、ベルリン美術館の寄贈者名簿において、東方系ユダヤ人ブルジョワジーで絨毯収集家のイェームズ・ジーモン（James Simon 1851～1932年）【写真50】の名前を確認することができた<sup>75</sup>。

イェームズ・ジーモンは、オリент産の美術品に限らず、ルネサンス期の絵画・彫刻から、日本・中国・韓国を中心とする東アジア美術まで幅広く収集し、一大美術コレクションを形成した。また、1888年にはヴィルヘルム・ボーデらと共にオリент委員会（のちにドイツ・オリент協会に変更）を創設しており、古代エジプト遺跡や古代メソポタミア遺跡の発掘調査に多額の投資をおこなった点から、19世紀末から20世紀初頭におけるドイツのオリент学研究史を語るうえで欠かすことができない最重要人物の一人といえる。

従来の研究において、Merchand[2009]が述べているように、オリент学研究的意義は、19世紀後半以降の列強による植民地争奪を背景に、国家的な文化政策の枠組みの中で論じられる傾向にあった。一方で、ユダヤ人ブルジョワジー収集家の間で享受されたオリент



観に着目した研究もみられる。例を挙げれば、Hauser[2004]が、同時代のドイツ系ユダヤ人でオリент考古学やイラン語研究の先駆者といわれたエルンスト・ヘルツフェルド（Ernst Herzfeld 1879～1948 年）に関する研究を発表している<sup>76</sup>。

しかし、ジーモン家に関する記録は、近年まで所在が不明であり、十分に研究がなされてこなかった。大きな要因として、第一次世界大戦後の政治的混乱とユダヤ人排斥運動による影響が指摘できる。ジーモン家は、ドイツ国内で経済的に大きな成功を収めたユダヤ人上流階層で皇帝ヴィルヘルム 2 世に強い影響力を及ぼした「カイザー・ユーデン」グループの一員であった<sup>77</sup>（皇帝の親衛隊については第 3 節で詳しく論じる）。だが、第一次世界大戦後のヴィルヘルム 2 世（在位 1888～1918 年）の国外亡命、さらにニュルンベルク法の制定（1935 年）や水晶の夜事件（1938 年）によって反ユダヤ主義運動が激化する中で、ジーモン家は 1942 年 2 月末にベルリンからの離散を余儀なくされた。ジーモン家に関する記録資料はベルリンから途絶え、近年まで研究的価値が十分に検討されていなかった。

2005 年 8 月、ベルリン美術館古代エジプト博物館で「ネフェルティティ王妃の胸像（紀元前 1340 年頃の作品）が長期間にわたる修復を終えて再展示されたことを契機に、発掘調査の実質的な後援者であったイエームズ・ジーモンの功績を再評価する動きが顕著にあらわれ始めた【写真 51】。ジーモン家に関連するドイツ語の記録資料の刊行化と一般公開が進められ、ベルリン美術館や Schultz[2007]によって研究書が続々と発表された。

しかしながら、両氏の先行研究では、イエームズ・ジーモンをベルリン美術館や劇場、社会福祉施設の運営等を手広く手がけた一篇志家として再評価するに留まり、ドイツ・オリент協会をはじめとするオリент学研究における詳細な動向が十分に論じられていない点が問題である。

そこで筆者は、2011 年 10 月に、ベルリン・イスラーム美術館の研究棟および附属図書館で文献調査をおこない、絨毯コレクション史専門家で名誉教授のイェンス・クレーガー（Jens Kröger）氏の指導のもとで、ジーモン家に関連する資料およびベルリン美術館の古代エジプト博物館と古代近東博物館における寄贈目録、ドイツ・オリент協会の財政記録を閲読・収集することができた。

本章では、第 1 節で、現存するジーモン家の関連資料に基づいて一族の家系図を復元し、一族の出自とベルリン社会に台頭した経済的・社会的な成長過程について論じる。続く第 2 節で、近代ドイツにおけるオリент認識の変化について時代背景を踏まえて論じたうえで、イエームズ・ジーモンがドイツ・オリент協会の設立にどのように関与したのか、詳

細な動向を明らかにする。最後に第3節で、ドイツ・オリエン特協会の財政記録に基づいてイエームズ・ジーモンの資金提供額の統計を分析することで、ジーモン家が近代ドイツのオリエント学研究に与えた影響を考察する。

### (1) ポーランドの行商人からベルリンの大ブルジョワジーへ

本章では、【図6】のジーモン家の家系図を参照しながら、一族の詳細を述べていく。イエームズ・ジーモンの祖父にあたるヴォルフ・マルクス・ジーモン(Wolf Marcus Simon 1782～没年不明)は、現在のポーランド北西部に位置するポメラニア出身で、亜麻布やメリヤス織物を扱う行商人であった。ポメラニアは、北にバルト海、東西をオーデル川とヴィスワ川にはさまれた地域で、海岸から特産物の琥珀が豊富に産出された。19世紀初頭のキール条約とウィーン会議によってプロイセン王国に譲渡されたが、第一次世界大戦と第二次世界大戦の影響で国境と人口は激しく変動した。

ヴォルフ・マルクス・ジーモンは、1814年にポメラニアの小さな町・ピュリッツ(ポーランド語名 Pyrzyce)に定住し、小規模ながら繁盛する織物商店を営んだ。1816年に長男でイエームズの父親にあたるイザーク(Isaak Simon 1816～1890年)、12年後にはイエームズの叔父にあたる次男のルイス(Louis Simon 1828～1903年)が誕生した。

その後、イザークは仕立屋の見習いを経た後に、ポーランド中西部の商業都市ポーゼン(ポーランド語名 Poznań)で独立し、ラビ(ユダヤ教指導者)の娘のアドルフィン・ハイルボーン(Adolphine Heilborn 1820～1902年)と結婚した。同地で経済的基盤を築いたイザークとアドルフィン夫妻であったが、1838年に店を畳み、すでに商人見習いの経験を積んでいた弟のルイスと共に、ベルリンで紳士服を取り扱う商店を起業した<sup>78</sup>。

19世紀前半のドイツでは、鉄道建設を起点に産業革命が進み、関連する鉄工業と機械産業も発展し、ルール工業地帯が形成されるなどの目覚ましい成長を遂げていた。そのなかでも、機械織り機を導入した織物産業は、当時のベルリンにおける商業分野の拡大と発展を図る上で重要な位置を占めていたのである<sup>79</sup>。このような社会的変化から機械織りの綿製品の需要をいち早く察知したイザークらは、1857年に織物仲買業会社のジーモン兄弟社(Gebrüder Simon)を設立し、短期間のうちにドイツ市場を占有するまでに急成長を遂げた。さらに、同時代のアメリカ南北戦争(1861～1865年)に先駆けて綿製品を買い占め、戦争の勃発後に他社よりも安価で取引することで事業は大成功を収めた【写真52】。

ジーモン兄弟社は、19 世紀後半から、1929 年に世界恐慌の余波を受けて倒産に追い込まれるまでの半世紀以上にわたって、ドイツ経済界における「織物産業の銀行家」(Bankieres der Textilwirtschaft) として君臨し続けたのである<sup>80</sup>。このようなイザークらによる事業の展開は、産業革命期に地方から首都・ベルリンへ移住してきたユダヤ人家族の第一世代にみられる典型的な立身出世の実例であった<sup>81</sup>。

## (2) ジーモン兄弟社の伸張

イエームズ・ジーモンが 1851 年に誕生した時、父・イザークの事業はすでに経済的に安定期を迎えており、ジーモン家はドイツ国内でも屈指の富裕層に仲間入りを果たしていた。

イエームズと四人の姉妹ヘレネ (Helene)、ベルサ (Bertha)、エリーゼ (Elise)、マルサ (Martha) は、ベルリン市内の高級住宅地にあたるティアーガルテン通り (Tiergarten Straß) の邸宅で恵まれた幼少期を過ごした【写真 53】。

イエームズは、1861～69 年の間に、ビスマルクも卒業生として名を連ねるエリート官僚を養成する中等教育学校 (Gymnasium zum Grauen Kloster) に在籍した<sup>82</sup>。当然ながら、イエームズは大学進学を望んでいたが、父イザーク達での願いで、最年少で卒業試験を受けた後に、父と叔父が共同経営する家業を継ぐことになった。おそらく、この時期に育まれた旧約聖書世界への憧憬と強い好奇心、そして学業を断念せざるを得なかった惜念の想いが、後年のオリエントにおける発掘調査へのあくなき挑戦に結びついたと推測できる。

家業のジーモン兄弟社に見習いとして入社したイエームズは、ドイツ国内および英国の織物工業の中心地であったブラットフォードで経営学を一から学んだ。そして、1876 年、イエームズ 25 歳の時に、晴れて父から経営者の座を継承したのである。当初、イエームズは叔父ルイスとの折り合いが悪く、経営面での衝突が憂慮されたが、1902 年にルイスの息子でイエームズの従兄弟にあたるエドゥアルト (Eduard Simon 1864～1929 年) が後任に就くことで事態は安泰した。ジーモン兄弟社の収益は、1876 年の 2,400 万マルクから、1902 年の 4000 万マルクへと伸張した<sup>83</sup>。また、イエームズ個人の総資産額を見てみると、1911 年の時点で 3,500 万マルクに達し、同年のベルリンにおける長者番付で第 6 位の座を獲得している<sup>84</sup>【図 7】。ジーモン家の事業は、のちにイエームズの長男のハインリヒ (Heinrich Simon 1885～1946 年) が継承することになった。

以上、ジーモン家の出自とベルリンに台頭した背景を明らかにした。ここで、ジーモン

家にみられる特徴を整理する。

一つめに、一族による事業経営が挙げられる。ジーモン家は、イエームズの祖父で行商のヴォルフの代からイエームズの息子のハインリヒまでに至る 4 世代にわたって、経営の形式と規模に変化がみられるものの、一貫して織物製品を軸に事業を展開した。また、イザークとルイスの代からイエームズとエードゥアルトの代へと、事業の共同経営権が継承されていたことが指摘できる。

二つめに、ジーモン家の婚姻関係である。イエームズの妻アグネスの実家であるライヒェンハイム家は、マイヤー家 (Meyer) ・リーベルマン家 (Liebermann) ・ヴァイゲルト家 (Weigert) と並んで、19 世紀前半における有力なユダヤ系織物会社のひとつであった。アグネスの父親のレオノール・ライヒェンハイム (Leonor Reichenheim 1814~1868 年) は地方議会議員を兼務しており、政財界における名士として知られていた。さらに、ジーモンの娘のヘレネ (Helene) の婿であるエルンスト・ウェストファル (Ernst Westphal) の実家は、ユダヤ啓蒙主義の創始者のモーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn 1729~1786 年) や著名なユダヤ人銀行家のアレクザンダー・メンデルスゾーン (Alexander Mendelssohn 1798~1871 年) らを輩出した名家であることが明らかになった。

これらの特色を踏まえて考察するに、ジーモン家は、故郷ポーランドで代々生業としてきた織物製品を取り扱う卸業で培った商法と経験を、産業革命期のベルリン市場の需要と合致させることで、一大ブルジョワジーに急成長することができたといえる。もちろん、イザークらによるアメリカ南北戦争を見越した先見の明と早急な投資力があつたからであろう。そして、同じユダヤ人の同業者や銀行家、政界関係者と親族関係を結ぶことで、イザークとルイスが一代で築き上げた経済的基盤をより強固なものにし、さらにベルリン市民としての社会的名声の獲得を目指したと考えられる。事業の経営権を従兄弟同士で継承した背景には、一族経営を安定化させ、織物市場を引き続き独占する狙いがあつたのだろう。

ベルリン社会で経済面と社会面の双方で不動の地盤を固めたジーモン家の人々は、富裕層のユダヤ人家族の慣わしに則り、公共事業や社会慈善活動に対して多額の資金を投じ続けた。ヴィルヘルム 2 世時代、とりわけ政治に敏感なユダヤ人ブルジョワジーの間では、社会慈善財団を設立することが一種の流行となっており、これはベルリンに限らずドイツ各地の大都市でよく見られた現象であつた<sup>85</sup>。

【表 7】はイエームズ・ジーモンが支援した社会慈善活動の代表的な事例である。イエームズの関心の対象は、ベルリンの恵まれない境遇の児童の救済に向けられ続けていたこと

が読み取れる。慈善団体の共同出資者には、同じユダヤ人富裕層であるフランツ・メンデルスゾーン（**Franz von Mendelssohn 1858～1917 年**）やエドアルト・アーノルド（**Eduard Arnhold 1849～1925 年**）が含まれていた。イエームズと彼らは、共に「カイザー・ユードン」の構成員であった。

イエームズはドイツ国内で社会慈善活動に勤しむ一方で、長年にわたり興味を抱き続けたオリエントにおける発掘調査に本格的に参入していった。1887 年には、ドイツで最初の考古学専門組織であるオリエント委員会（のちにドイツ・オリエント協会に改編される）の設立に尽力しており、イエームズは名実ともにドイツのオリエント学研究の最前線を支えたキーパーソンだったのである。

## 第2節 ドイツ・オリエント協会の設立

### (1) ヴィルヘルム 2 世皇帝夫妻のオリエント旅行がもたらしたオリエント像の変化

ドイツ・オリエント協会の設立の過程について論じる前に、同時期のドイツ語文化圏の人々が抱いたオリエントに対する認識の移り変わりを、時代背景とともに整理しておこう。

1870 年以前のドイツ人のオリエントの認識は、いわば旧約聖書に描かれた人類揺籃の地、もしくはエルサレムに代表される聖地であり、現実世界とは遠く隔たった未知なる神話世界のイメージであった。しかし、1873 年のウィーン万国博覧会でガージャール朝イラン政府によって壮麗な「ペルシア絨毯」が出品されると、一般大衆ははじめて接するオリエント世界の実物に大きな衝撃を受けた。続く 1878 年のドイツ考古学隊による小アジアのアクロポリスにおける大祭壇の発掘によって、人々の間にオリエントの古代遺跡や、「ペルシア絨毯」に代表されるオリエント産の美術品に対する強い関心と憧憬を植え付けたのである。この時点において、ドイツ人にとってのオリエントは、古代ペルシアの栄光や、アーリア人の起源を想起させるものであり、ヨーロッパ社会からみて地理的にも心理的にも距離を感じさせる存在であったといえよう。

しかし、ドイツの宰相ビスマルク（Otto E. von Bismarck 在位 1871～1890 年）は、露土戦争（1877～1878 年）を機に、オスマン帝国をはじめとするオリエント地域に軍事的な関心を抱き始めた。露土戦争はロシアの圧倒的な勝利に終わり、ロシアにとって極めて有利な内容のサン・ステファノ条約（1878 年）が締結された。ロシアのバルカンへの勢力の拡大に危機感を抱いた英国とオーストリアがこれに抗議したため、ビスマルクの仲介で列強の利害を調整するためのベルリン会議が開催された。会議の結果、サン・ステファノ条約が破棄されて、新たにベルリン条約が結ばれることで、ロシアの南下政策は阻止された。

一方で、英国とフランスはキリスト教徒の保護を理由にオスマン帝国の内政に干渉し、オリエントにおける勢力範囲を拡大していった。当時、対外的に英国・フランス・ロシアと凌ぎを削っていたドイツにとって、国際社会で自国の権威を誇示するうえでも、オリエントでの植民地化を進めることは急務の課題であった。

1888 年にヴィルヘルム 2 世が外交方針をより積極的な「世界政策」へと転換すると、ドイツ人の抱くオリエント観は、次第に政治的・経済的な色合いを帯びてくるようになる。ヴィルヘルム 2 世は、パン＝ゲルマン主義を掲げて、極東・アフリカにおける熾烈な植民地獲

得競争へ本格的に参入した。

1896 年までに、ドイツはオスマン帝国下のイスタンブルのアジア側対岸から小アジアの都市を結ぶアナトリア鉄道を完成させていた。ドイツはアナトリア鉄道の運営権、沿線の鉱山採掘権、森林伐採権を得るとともに、最低年収をオスマン帝国政府から保証されていた。万が一、営業収入だけで最低年収額に達しなかった場合には不足分をオスマン帝国政府が支払うことになっており、ドイツによる鉄道事業は、あきらかに植民地収奪的性格を帯びていたのである。

他方で、露土戦争に大敗を喫し、未曾有の政治的危機に直面していたオスマン帝国のアブデュルハミト 2 世は、ドイツに接近することで、列強の勢力均衡を図る政策を打ち出した。オスマン帝国政府は、アナトリア鉄道をさらに延長する、いわゆるバグダード鉄道の建設を望み、ヨーロッパ各国が鉄道敷設の受注を争った。

その最中であった 1898 年 10 月のヴィルヘルム 2 世皇帝夫妻のオリエント旅行は、ドイツのオリエントに対する関心と進出を国内外に誇示するうえで、大きな役目を果たした。このオリエント旅行の表向きの目的は、聖地エルサレムにおけるプロテスタント教会の落成式に出席するためにオスマン帝国を訪問することであったが、実際には、ドイツ資本によるバグダード鉄道の敷設権をめぐる、ヴィルヘルム 2 世とアブデュルハミト 2 世が密約を交わすことにあった。

ヴィルヘルム 2 世は、バグダード鉄道建設の意義を、「産業革命で主要部門として発展を遂げたドイツの鉄道建設の工業技術をもって、かつての人類揺籃の地であるオリエントを再開発すること」と表明した<sup>86</sup>。対するアブデュルハミト 2 世側には、バグダード鉄道の敷設によって、食糧や兵器、人員（主に兵士）の大量輸送を可能にすることで、オスマン帝国内の中央集権化支配を強化する狙いがあった。とりわけ、アブデュルハミト 2 世が、ドイツのクルップ商会（筆頭株主はヴィルヘルム 2 世）を通じて大量の兵器を注文するなど、両国の関係は非常に親密化していったのである<sup>87</sup>。

このような時代背景のもとで、ドイツの知識人の間では、当然のことながら、それまでの単なる古代文明への憧れだけでなく、より現実的な政治的・経済的な問題意識から、オリエント学研究が論じられるようになった。また、知識人によるオリエント学研究成果や、外交官や旅行者、あるいは現地に駐在する外国商会の社員が記録した史資料によって、オリエントに関する基礎知識の情報量は以前と比べて格段に増加したのである。

ここで同時期の一般大衆の視点に目を転じると、1879 年より、カール・マイ著作のオ

リエント地域を舞台にした冒険物語が地方の週刊誌に連載され、大変な人気を博した<sup>88</sup>。カール・マイに代表されるオリエントをテーマにした冒険物語は、従来の聖書を根源とする古色蒼然としたオリエントに具体的なイメージを見出し、人々のオリエントへの夢をより一層掻き立てたのである。

以上に述べたオリエント認識の変遷から考察するに、19世紀末におけるドイツ人のオリエントに対する心理的な距離感は大幅に短縮され、彼らにとってオリエントはもはや未知なる「神話世界」ではなく、手を伸ばせば届く範囲の「異国」として認識され始めていたといえるであろう。そして、彼らのオリエント認識の変化は、19世紀末以降、富裕層の収集家達が、美術品の収集や古代遺跡の発掘調査を目的に、たびたびオリエントへ出向いて行ったことからもうかがうことができる。こうした収集家達は、共同出資による潤沢な資金を基盤に、ドイツ・オリエント協会に代表される研究機関を立ち上げることで、より大規模な発掘調査を成し遂げたのである。

## (2) オリエント委員会からドイツ・オリエント協会へ

19世紀前半において、英仏の両国は、すでに古代メソポタミア遺跡の発掘に着手しており、その後、新興国のアメリカも発掘調査に参入していた。各々の考古学調査団によって発掘された膨大な数にのぼる出土品は、パリ、ロンドンを中心とするヨーロッパ各国の美術館に収蔵された。一方で、ドイツは、19世紀後半まで、古代メソポタミア遺跡を含む古代オリエントの美術コレクションを保有しておらず、また考古学調査のための専門的な研究機関も完備していない状況にあった。

ベルリン美術館古代エジプト博物館長のアードルフ・エルマン (Adolf Erman 1854～1937 年) は、英仏米による発掘調査が大規模化していく状況に危機感を抱き、ドイツ人考古学者のエドアルト・マイヤー (Eduard Meyer 1854～1930 年) とともに、1887 年にドイツの文学評論雑誌『ドイツの展望』(*Die Deutsche Rundschau*) の紙上で、古代メソポタミア遺跡における発掘調査の重要性をドイツ国民に訴えた<sup>89</sup>。時を同じくして、プロイセン文部省もまた、フランスの考古学調査団による度重なる発掘品の略奪のために、オリエントにおけるドイツの学問的權威が貶められている旨を、ビスマルク宰相に上申していた。

もともと、エルマンは、個人資金を基に 1886 年から 87 年にかけて古代メソポタミア遺跡における発掘調査をおこなっており、イエームズ・ジーモンの叔父ルイスからも 3000 マ



ルクの資金提供を受けていた<sup>90</sup>。しかしながら、フランスの調査団と発掘品をめぐる小競り合いを繰り返していたことから、政府公認の権威ある研究機関の創設を誰よりも強く待ち望んでいたのである。結果として、政府から考古学調査団に対する予算が正式に認可されたのは、1890年代に入ってからである。したがって、それまでの期間の発掘事業の企画と運営は、資産家の有志の手に委ねられたのであった。

1887年、エルマンの指揮のもとで、ヴィルヘルム・ボーデ、イエームズ・ジーモン、さらに経済学者で美術収集家のリチャード・カウフマン (Richard von Kaufmann 1850～1908年) を中核に、ドイツで最初となる考古学調査の専門組織であるオリエント委員会 (Orient-Komitee) が創設された。オリエント委員会による同年12月1日付の記録によれば、イエームズ・ジーモンは、委員会設立のための資本金として、5000マルクを寄付したことが明らかにしている<sup>91</sup>。他の理事会員の出資金額が平均2000～3000マルクであった点と比較して、ジーモン家の財政面での支援がひときわ大きかったことがうかがえる。

オリエント委員会の規約では、すべての発掘品の所有権を、その発掘調査の出資者に帰するように定めた。また、長期にわたり政府から継続的な助成金を得ることができなかったため、委員会は出資者の許可を得たうえで、発掘品をベルリン美術館に売却することによって、発掘調査の運営費用を賄っていた<sup>92</sup>。事例を挙げれば、1878年にオリエント委員会からの資金を基盤に、考古学者カール・ヒューマン (Karl Humann 1839～1896年) が小アジアのアクロポリスで発掘した「ペルガモン大祭壇」は、ベルリン美術館に寄贈されて、現在はペルガモン博物館の一階の間で公開されている。また、オリエント委員会が美術館から、オリエント産の美術品を収集するための発掘事業を委託されることも多々あった。

1890年から1891年にかけて、オリエント委員会は、トルコ南部で古代ヒッタイト王国の遺跡発掘調査をおこなった。ところが、ベルリン美術館からの発掘調査団に対する支援金の支払いが遅延したため、発掘作業は中断に追い込まれることとなった。美術館からオリエント委員会への滞納金は、1891年の時点で20万マルク以上、1894年においてもなお8万1000マルクが不払いのままであったと記録に残されている<sup>93</sup>。その後、断続的に4回にのぼる発掘調査がおこなわれたが、オリエント委員会の運営資金が底を尽いたため、会員達は組織の抜本的な改革の必要性に直面したのである。

こうした事態を受けて、イエームズ・ジーモンをはじめとするオリエント委員会の理事達は、1897年にオリエント委員会の解散と新たな研究機関の設立を表明した。オリエント委員会の失敗を省みて、新しい機関の方針には、年会費を義務付けた会員制度の採用、活動内

容の拡充、広報活動（研究調査の立案と助成、研究文献の出版、講演会の開催）が盛り込まれた。さらに、イエームズ・ジーモンの提案により、ベルリン美術館・文部省・王立科学アカデミー（*Preußische Akademie der Wissenschaften*）と公式に連携体制を組むことで、財政基盤の確保が図られた<sup>94</sup>。こうして、1898年1月24日に新たにドイツ・オリエント協会（*Die Deutschen Orient-Gesellschaft* 以下、DOG と記す）が設立された。

DOG 設立に際した調印式には、イエームズら発起人に加えて、ドイツ銀行頭取でバグダード鉄道の代表であったゲオルク・ジーメンス（*Georg von Siemens*）、外務省次官で植民地局長であったフリードリヒ・リヒトホーフエン（*Friedrich von Richthofen*）などの文部省・外務省を代表する官僚、貴族、政財界の有力者、教会関係者を合わせた総勢 110 名が出席したと記録されており、前身であるオリエント委員会とは比較にならない大規模な組織であったことが分かる<sup>95</sup>。これらの参加者の顔ぶれから明らかなように、DOG はヴィルヘルム

2 世によって開始された積極的なオリエント進出政策と非常に密接な関わりをもっていただ。列強が競う合うようにしてオリエントへと進出するようになり、国家主導による大規模な発掘活動が行われるようになると、考古学研究そのものが、国家からの資金補助なしには立ちゆかない分野に変容したのである。

ここで、DOG の設立後のイエームズの動向を整理しておこう。ジーモンは遅くとも 1896 年頃から、皇帝ヴィルヘルム 2 世の側近である海軍長官フリードリヒ・ホルマン（*Friedrich von Hollmann* 在期 1890～1897 年）に接近することで、皇帝ヴィルヘルム 2 世から財政的支援を受領するための太いパイプを構築しようと工面した。前述したように、ヴィルヘルム 2 世は 1898 年のオリエント旅行を前後して、オリエント進出に大きな関心を寄せていた。いわゆる 3B 政策のもとで、バグダード鉄道の完成を目指すドイツ政府にとって、DOG の発掘調査地のバグダードは、オリエント進出のための重要な拠点であったからである。

また、文化政策の観点から、ベルリン美術館が所蔵するオリエント美術コレクションの拡充によって、同時代に高い水準を誇っていた大英博物館やルーヴル美術館に競合することを目指していた。そこで、DOG はベルリン美術館に発掘品の獲得権を譲渡する代わりに、政府から毎年の予算認可を受けることに成功したのである。DOG の総会員数は、1898 年 5 月の時点で 500 名を数えた<sup>96</sup>。

以上に述べたイエームズの動向から、彼は、DOG の設立当時の出資者であっただけでなく、DOG の長年の懸案事項であった運営資金の問題解決に向けて、中心的な働きを担って

いたと推察できる。それでは、実際の発掘調査において、ジーモン家はどのような影響を及ぼしたのであろうか。次節では、DOGの財政記録と、古代エジプト博物館および古代近東博物館の寄贈者リストを基に、ジーモン家がオリエント学研究史に及ぼした影響を分析する。

### 第3節 オリエント学研究史におけるイエームズ・ジーモンの動向

#### (1) ドイツ・オリエント協会における影響力

まず、筆者はドイツ・オリエント協会（DOG）の財政記録を基に、1897年から1914年までの期間におけるイエームズならびに皇帝ヴィルヘルム2世（個人出資金）の資金提供金額の統計をとり、【表8】【グラフ2】にまとめた。統計より、イエームズのDOGに対する投資額は、総計47万1800マルク余り、一方のヴィルヘルム2世は、41万5000マルクであった。なお、イエームズによる1899年、1900年、1910年の1000マルクの出資は、DOGで定められた年会費である。また、1903年には、国庫からDOGへ8万8600マルクが支出されたが、同年にイエームズは6万マルクをDOGに投じており、彼の投資金額が政府のそれに及ぶ規模であったことは明らかである<sup>97</sup>。換言すれば、DOGの運営は、1900年初頭においてもなお、イエームズ・ジーモンをはじめとする個人投資家からの大口の出資によって支えられていたことが指摘できる。

続いて、DOGの運営費用とは別に、イエームズが直接的に関与した発掘調査の詳細をみてみよう。【表9】をみると、イエームズは、DOG設立前後の1897年から1914年にかけての20年余りの間に、エジプト、イラク、パレスチナ等の十数カ所に及ぶ発掘調査を、個人あるいは連名で支援したことがわかる。そのうち、DOGが主催した発掘調査は、現在のイラクを中心とする古代メソポタミア遺跡やエジプト中部のテル・エル・アマルナ遺跡（Tell el-Amarna）を含む合計7カ所である。発掘調査は数カ月単位で断続的におこなわれ、テル・エル・アマルナ遺跡では合計7年間に及んだ。また、同時期に3ヶ所以上で発掘調査が並行しておこなわれることもあった。

数多くの発掘調査のなかでも、1907年から1914年にかけて発掘調査が行われたエジプトのテル・エル・アマルナ遺跡は、1912年12月6日に「ネフェルティティ王妃の胸像」を発掘したことで、ドイツの古代エジプト学研究の進展に大きく貢献した【写真54】。テル・エル・アマルナにおける発掘事業は、イエームズ・ジーモン単独の出資によって賄われたため、「ネフェルティティ王妃の胸像」を含むすべての出土品がジーモン家の所有するところとなった。だが、翌1913年には、1036点がベルリン美術館の古代エジプト博物館に寄贈されたのである。なお、「ネフェルティティ王妃の胸像」は、1920年に古代エジプト博物館

に寄贈された。

【表 10】より、イエームズからベルリン美術館に対する寄贈数は、古代近東博物館と古代エジプト博物館を合わせて 2,000 点以上にのぼることが分かる。ただし、ベルリン美術館の所蔵品は第二次世界大戦後に旧ソ連に流出し、現在もその大部分が返還されていない事情から、当時の寄贈数を正確に把握することは困難である。また、古代近東博物館が設立された 1888 年以前に寄贈された美術品に関しては、古代エジプト博物館あるいは民族学博物館など、本来とは異なる部署に収蔵された可能性がきわめて高い。したがって、統計にまとめた寄贈数は全体の一端に過ぎないが、イエームズが DOG の発掘事業を通じて古代オリエント学研究の発展に果たした功績は十分に読み取れるであろう。

以上にあげた【表 8・9・10】より、イエームズによる DOG への投資金額および寄贈数の規模は、明らかに個人の収集家としての域を越えており、その影響力は皇帝ヴィルヘルム 2 世に匹敵するものであったととらえることができる。それでは、イエームズ・ジーモンとヴィルヘルム 2 世はどのような関係を構築したのであろうか。

## (2) イエームズと皇帝ヴィルヘルム 2 世の関係

### —「カイザー・ユーデン」の一員として

イエームズは、1901 年 7 月 24 日にドイツ北部の都市キールでドイツ・オリエント協会 (DOG) 主催のボートレースの会場でヴィルヘルム 2 世とはじめて面会の機会をもったと記録に残されている<sup>98</sup>。オリエント旅行 (1898 年) 以来、古代オリエント世界に対する興味を深めていたヴィルヘルム 2 世は、オリエントに対するイエームズの高い教養と情熱に深い感銘を受けた。以後、イエームズの私邸に設けられた陳列室を度々訪れては収集品を鑑賞する間柄になった。

ボートレースの席上で両者が交わした会話内容は記録に残されていないが、ヴィルヘルム 2 世から DOG に対する資金提供額が、1901 年の 1 万 5000 マルクから翌年の 4 万マルクへと倍以上に増額されている点 (前掲の表 8 参照)、またイエームズが同時期に古代エジプト遺跡 (Abusir er Rirah) ならびに古代メソポタミア遺跡 (Fara) における発掘調査に関与していた点 (前掲の表 9 参照) を考慮すると、イエームズが皇帝に DOG への財政的な支援を打診した可能性が考えられるであろう。

さらに、1903 年にヴィルヘルム 2 世は、DOG の設立と発展に貢献したイエームズ宛て

に表彰状を贈呈している【写真 55】。当時、このような、ドイツ皇帝の肖像の添えられた文書が個人に贈られることは非常に稀であり、イエームズに対する勲章であったとみなすことができる。イエームズはヴィルヘルム 2 世の側近を務めたユダヤ人メンバー「カイザー・ユーデン」に仲間入りを果たした。それでは、「カイザー・ユーデン」はどのような人物から構成されていたのであろうか。

【表 11】から読み取れるように、「カイザー・ユーデン」のメンバーは、原則的にユダヤ人の家系をもち、ドイツ国内でも屈指の富裕層に属する者で構成された。なかでも、最も皇帝と親交の深い第一グループには、イエームズ・ジーモンを含め、シュレージエン地方の石炭王で美術収集家として博学のエドヴァルト・アルンホルト (Edward Arnhold)、ハンブルグ・アメリカ郵船株式会社 (HAPAG) 総裁で経済問題担当顧問として皇帝に仕えたアルベルト・バリン (Albert Ballin 1857～1918 年)、大手銀行家カール・フーステンベルク (Carl Fürstenberg 1850～1933 年) など経済界における重鎮が名を連ねた。また、ユダヤ人以外にも、ヴィルヘルム・ボーデなどに代表される有力な美術館関係者もヴィルヘルム 2 世と密接な親交を築いた。皇帝を取り巻くメンバーは、ヴィルヘルム 2 世の多分野にまたがる豊富な人脈を象徴する存在であったといえる。メンバーは、皇帝との会談を通じて助言を与えるなど陰ながら強い影響力をもっていたといわれている<sup>99</sup>。

例えば、1911 年にカイザー・ヴィルヘルム学術振興協会 (Kaiser-Wilhelm-Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaften) が設立された際には、「カイザー・ユーデン」のメンバーを中心とする 60 名の寄贈者によって、総計 630 万マルクが出資されており、財政面における皇帝の強力な後ろ盾でもあったことは明白である【図 8】。同様に、「カイザー・ユーデン」のメンバーが DOG の理事や支援者と重複することが多かった。彼らの存在は、個人投資家に依存せざるを得なかった DOG の研究活動を支える重要な基盤であったと推察できるであろう。

「カイザー・ユーデン」の一員として確固たる地位を占めたイエームズであるが、政治の表舞台からは意図的に距離を置く姿勢を貫いた。1904 年 10 月、イエームズは自身のルネサンス美術コレクション 492 点を、カイザー・フリードリヒ美術館の新設にあわせて寄贈した。これは、考古学者のハインリヒ・シュリーマンの寄贈に次ぐ大規模なコレクションであった<sup>100</sup>。ヴィルヘルム 2 世は寄贈に対する返礼として、イエームズにプロイセンの上院議員への推薦を打診したが、イエームズはこれを固辞した。理由は、シオニストとしてのイエームズの社会活動のなかに見出すことができる。

イエームズは、父イザークの影響で青年期から自由主義者の立場を取っており、1901年には帝政ロシアからアメリカ（一部はパレスチナ）へのユダヤ人移民を支援する協会（Der Hilfsverein der Deutschen Juden）を設立した。この協会は、1901年から1918年の間に累計4,700万マルクの寄付金を集めており、当時の慈善組織団体としては最大規模を誇った。イエームズは、東欧からのユダヤ人移民の保護と支援、パレスチナ（ハイファ）における科学技術のための研究教育機関（テクニオン）の設立等の活動に深く関与した【写真56】。

とりわけ、第一次世界大戦中には、帝政ロシアからアメリカ（一部はパレスチナ）へのユダヤ人移民を大規模に支援しており、その数は1914年の時点で20万人にのぼったとされる<sup>101</sup>。ユダヤ人移民への支援資金を工面するために、イエームズは、自身の邸宅と手元に残っていた絵画コレクションを売却した<sup>102</sup>。このようなイエームズ個人による一連の支援活動は時として、反ユダヤ主義からの反発や妨害を招きかねない。政治的な対立や混乱を忌避するため、彼は意図的に政界へ進出しない道を選択したと考察できる。

イエームズとヴィルヘルム2世の親交は、公式には非政治的な立場を取りながらも、ヴィルヘルム2世が国外へ亡命した1918年以降も継続された。しかし、1929年の大恐慌によってジーモン兄弟社の経営は悪化し、ドイツ経済界におけるジーモン家の影響力は次第に影を潜めていった<sup>103</sup>。近代ドイツの文化の栄光に貢献した多くのユダヤ人ブルジョワジーと同様に、イエームズ・ジーモンもまた、近年までドイツ史の表舞台から意図的に忘れ去られる運命を辿ったのである。

### (3) 小括

第5章では、ヴィルヘルム2世時代のベルリンにおける絨毯収集家のイエームズ・ジーモンとその一族に着目し、近代オリエント学研究の発展、とりわけドイツ・オリエント協会（DOG）の研究活動における東方系ユダヤ人の動向とその影響について考察した。

産業革命を背景に、綿製品の仲買業を急成長させてベルリン社会に台頭したジーモン家は、ルイス・ジーモンの代より、オリエントにおける発掘調査に継続的な投資をおこなってきた。続くイエームズ・ジーモンは、DOGの創設に資金提供するだけでなく、より継続的な財政基盤の確保のため、皇帝ヴィルヘルム2世をはじめとする有力な出資者の確保に奔走した。DOGの財政記録に基づく統計から、個人収集家のイエームズが皇帝ヴィルヘルム2世に比肩する影響力をもち、DOGの運営において中心的な役割を果たした人物であるこ

とが明らかになった。

では、イエームズ・ジーモンはなぜ絨毯を含むオリエントの美術品の収集に莫大な私財を投じたのであろうか。その答えは、彼らのルーツ（出自）に依拠するところが多い。

ポーランドにルーツをもつジーモン家は、移民先のベルリンの文化や慣習に順応しながら、立身出世に成功した。しかしながら、多くのユダヤ人と同様に、彼らにとってベルリンは成功の地であっても、先祖代々から受け継いだ祖国ではなかった。祖国をもたない彼らは、心の拠り所とした教典の旧約聖書の中に故郷の姿を求めたのである。

旧約聖書の構成には、古代エジプトと古代メソポタミアの影響が色濃くみられる。例えば、モーセが登場する「出エジプト記」では、エジプトに移住したユダヤ人の子孫がエジプト王（ファラオ）のもとで迫害に遭う姿が描かれている。したがって、イエームズ・ジーモンたちのオリエントに対する強い憧憬が、古代エジプトと古代メソポタミアに対する知的探究心と結びつくことは当然の結果であった。彼ら東方系ユダヤ人の中には、古代遺跡から発掘された楔形文字を手がかりに旧約聖書研究に取り組む者もいた。彼らにとって、古代遺跡を発掘し、オリエント伝来の遺物を収集し、それを研究するという一連の行為は、自らの祖先を識り、自らの存在意義（アイデンティティ）を表明する重要な手段であったといえる。

折しも、ドイツでは 1898 年にヴィルヘルム 2 世皇帝夫妻のオリエント旅行を通じて、オリエントの実像に人々の関心が集まった時期にあった。イエームズは、東方系ユダヤ人移民という社会的にマイノリティーな存在でありながら、当時の国家的な事業であった発掘調査を莫大な資金で支援することで、皇帝ヴィルヘルム 2 世からの政治的な庇護を得ることができた。ブルジョワジー収集家が中心的な役割を担っていた近代オリエント学研究において、イエームズの動向は重要な要素のひとつを占めていたといえるであろう。



## 結論

本論文の冒頭で、筆者は 19 世紀半ばから 20 世紀初頭において、オリエントで織られた絨毯の売買・収集・研究に携わっていたヨーロッパの人々が、「ペルシア絨毯」を厳密に識別することができていたのか、という問題を提起した。本研究で取り扱った「オリエント」とは、広義の中東と同義であり、言語による定義に基づいてアラビア語・ペルシア語・トルコ語・テュルク諸語および少数民族語が話された地域を指す。

既存の研究においては、絨毯の名称と実際に絨毯が織られた産地は一致することを前提に論じられており、両者の間にみられる多少の誤差は問題なく看過されてきた。しかし、筆者は、曖昧な「ペルシア絨毯」の定義と、実際に収集された絨毯の製作地の相違に着目し、この相違にこそ当時のヨーロッパの人々が抱いたオリエント像を分析する重要な鍵が隠されていると新たに仮説を立てた。筆者は、オリエントで織られた絨毯の流通（絨毯商人）・研究（美術館）・収集（収集家）の各分野に携わったドイツ人の多様な動向を総合的に俯瞰することによって、「ペルシア絨毯」に対する認識の相違を創出した要因を分析する方法を独自に考えた。

大学院修士課程より英語・ドイツ語・ペルシア語・アラビア語・トルコ語をはじめとする多言語の史資料を用いて研究を行い、かつ日本（大阪の国立民族学博物館）、イラン（テヘランの国立絨毯博物館）、トルコ（イスタンブールの首相府オスマン文書館およびトルコ・イスラーム美術館）、ドイツ（ベルリンのベルリン・イスラーム美術館附属図書館）における研究専門機関で実地調査の経験を積んできた筆者だからこそ、この着眼点を獲得することができた。

筆者は、オリエント（東洋）とオクシデント（西洋）という地域的・文化的な枠組みを越えた世界史的な視座から、ドイツとオリエントを結ぶ多文化交渉史を分析することを目指している。この研究方法は、先行研究において問題視されがちであった欧米の研究者の間に潜在するジャポニズムを含む東洋への先入観や偏見というオリエンタリズム批判を踏まえた上で、東洋を見る主体としての日本人、および東洋として見られる日本人という両義的な視点から地域研究を論じることが可能となる点で大きな意義がある。

これを受けて、本論文では、マイヤー・ミュッラー商会を事例とした「絨毯商人がと

らえたオリент像」、ベルリン美術館キュレーターのヴィルヘルム・ボーデを軸とした「絨毯研究家がとらえたオリент像」、東方系ユダヤ人のイエームズ・ジーモンを取り挙げた「絨毯収集家がとらえたオリент像」という3つの異なる視点から、「ペルシア絨毯」に象徴されたオリент像の変容と相互関係について論じてきた。

「ペルシア絨毯」が流行した19世紀後半から20世紀半ば頃のヨーロッパは、産業革命以来の機械制工業の発達により、モノの大量生産・大量消費の時代へと突入していた。汽船・鉄道などの交通網の整備と電信の発達によって、ヒト・モノ・カネ・情報が地域を越えて広範囲に流通し、世界の一体化（グローバリゼーション）が急激に進んだ時代であった。

また、欧米を中心に資本主義経済が発達し、各国は商品や余剰資本を輸出するための海外市場をアフリカ、アジアに求めて進出していった。現地に進出したヨーロッパ資本は、鉄道の敷設権、資源の採掘特権や関税・租税の免税特権を獲得することで独占的な財閥を成し、植民地に新たな経済圏を形成した。

ドイツに焦点をあてると、宰相ビスマルクが1877年の露土戦争を機に、オスマン帝国をはじめとするオリентに軍事的な関心を抱き始めていた。露土戦争でロシアにとって極めて有利な内容のサン・ステファノ条約（1878年）が締結されると、ロシアのバルカンへの勢力の拡大に危機感を抱いた英国とオーストリアがこれに抗議したため、ビスマルクはベルリン会議を開いて列強の利害を調整した。ビスマルクの巧みな外交戦術によって、サン・ステファノ条約が破棄されて、新たにベルリン条約が結ばれることで、ロシアの南下政策は阻止された。

一方で、フランスはカトリック教徒の保護を理由にオスマン帝国の内政に干渉し、オリентにおける影響力を拡大していった。当時、英国・フランス・ロシアの植民地争いに後れをとったドイツにとって、オリентへの植民地化を進めることは、自国の国際的権威を誇示するうえで急務の課題であった。1888年にはヴィルヘルム2世が積極的な「世界政策」を掲げ、オリентにおける植民地獲得競争へ本格的に参入していった。

当然ながら、政治的経済的な利益を動機に政府関係者や知識人を中心に、オリентに対する関心が高まり、オリентの歴史・政治・経済・語学・考古学・美術などの多岐にわたる分野で研究が活発に行われていた。このようなヴィルヘルム2世時代のドイツ帝国の枠組みの中で、「ペルシア絨毯」はオリентの特産物としての価値を再発見されたといえる。

絨毯は、ガージャール朝イラン政府の主導のもとで、1873年のウィーン万国博覧会を機にヨーロッパ社会に紹介されると、高額な美術品としての価値を見出された。

では、なぜ「ペルシア絨毯」が注目を集めたのだろうか。「トルコ絨毯」との違いはどこにあるのだろうか。

「ペルシア絨毯」は、二種類のタイプに大きく分けることができる。遊牧民によって織られた日常生活品としての要素が強い絨毯と、サファヴィー朝イランの王都エスファハーンで繁栄を遂げた宮廷工房の専門職人によって織られた美術工芸品としての要素が強い絨毯である。

前者の絨毯は、季節ごとの移動が多い遊牧生活に適した組み立て式の織り機を用いて織られた。また、絨毯の織り技法や図案は、親から子へ伝統的に口頭伝承されたため下絵を必要としなかった。遊牧民の絨毯は、織り技術としては比較的平易であり、直線的で抽象的な幾何学文様の図案が多くみられる。

これに対して、後者の絨毯は、宮廷工房に所属する写本挿絵画家や装飾家による緻密な下絵を基に、高度な専門技術をもった職人によって織られた。技術面でみると、曲線的な花柄や蔓草が複雑に織り込まれた絨毯は難易度が高く、まさに職人技といえる。ウィーン万国博覧会でヨーロッパの人々の心をとらえた絨毯は、このイランの宮廷発祥の絨毯であった。

「トルコ絨毯」と比較すると、「ペルシア絨毯」はとりわけ華やかで柔らかな曲線をもつ具象的な植物文様が多くみられる。「ペルシア絨毯」には織り手のイラン人の叙情性に富む民族性、神秘性や世界観が絵画のように表現されている。ヨーロッパの人々は、「ペルシア絨毯」をオリエントの伝統的な手工芸品の枠を越えた、完成度の高い芸術作品として高く評価したのである。

以後、アンティークの「ペルシア絨毯」は、一目で高値のつく換金性の高い商品として売り出された。しかしながら、その顧客層は裕福な貴族や大商人、あるいは美術館などの公共の研究機関に留まった。18世紀以前に織られた、いわゆるアンティークの「ペルシア絨毯」の価格が高騰の一途をたどる一方で、19世紀以降もガージャール朝イランやオスマン帝国を中心に絨毯は織られ続けた。こちらの絨毯は、アンティーク絨毯と比較すれば価格が抑えられており、新興のブルジョワジーを新たな顧客として獲得していった。

この時代は、都市と近郊を結ぶ交通網の発達により、自邸から職場への通勤制が確立し、職住分離が進んだ。ブルジョワジーの中には、寝食を分ける複数の部屋をもつ我が家を所有する者もでてきた。彼らは住まいの家具や調度品にこだわりを見せはじめ、「ペルシア絨毯」を模した、手を伸ばせば届く価格のオリエントで織られた絨毯を収集するようになった。

つまり、オリエントで織られた絨毯は、アンティークの「ペルシア絨毯」を収集する貴

族や美術館と、「ペルシア絨毯」を模した手頃な価格のオリエントで織られた絨毯を収集するブルジョワジーの、二通りの顧客層を形成した。

以上の時代背景を踏まえたうえで、【図 4】に基づいて絨毯商人（マイヤー・ミュッラー商会）、絨毯研究家（ヴィルヘルム・ボーデ）、絨毯収集家（イエームズ・ジーモン）のそれぞれの関係性を比較していこう。

マイヤー・ミュッラー商会は、「ペルシア絨毯」の複製化にあたって、ベルリン美術館のヴィルヘルム・ボーデから絨毯織り技術の助言を受けていた。ここで「絨毯を売買する商人」と「絨毯を研究する機関」が、精巧で高品質の絨毯の複製化に向けて協力関係にあったことが明らかになった。

ヴィルヘルム・ボーデに視点を移すと、ボーデはユダヤ人絨毯収集家イエームズ・ジーモンに美術品の鑑定書や目録を無償で提供した。その見返りに、ボーデはイエームズ・ジーモンから、ベルリン美術館に絨毯を含む数多くの美術品の寄贈を受けた。すでに当時、収集家たちの間では公共の美術館への寄贈行為が篤志家としての社会的名声を得る重要な意味合いをもっており、ボーデは彼ら収集家たちの野心を如才なく利用したのである。両者の相互扶助の関係は、ベルリン美術館の所蔵コレクションを拡充するうえで大きな推進力となった。

また、ボーデの最大の後援者は、ドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世であった。ボーデは自ら「ペルシア絨毯」コレクションを基底にイスラーム美術館の新設を熱望していたが、1902 年にムシャッタ宮殿の城壁が発掘されると、オリエント進出政策を積極的に推し進めるヴィルヘルム 2 世に訴えかけ、オスマン帝国から城壁の一部を獲得することに成功した。

この城壁は、ドイツ帝国が国家をあげて注力した文化政策の成果を体現する記念碑的（モニュメント）であると同時に、1904 年のベルリン・イスラーム美術館の創設を決定づける重要な役割を演じた。かくして、ボーデはヴィルヘルム 2 世の統治期にベルリン美術館を英国の大英博物館やフランスのルーヴル美術館に比肩する世界最高水準の美術館に発展させることに成功したのである。

続いてイエームズ・ジーモンに移ろう。イエームズと彼の一族は、エジプトやメソポタミアにおける発掘調査とドイツ・オリエント協会（DOG）の運営に継続的に多額の資金を投じて、これを支援してきた。イエームズは、ポーランドに祖先の起源をもつ東方系ユダヤ人（Ostjuden）の移民という社会的にマイノリティーな存在でありながら、当時の国家事業であった発掘調査に惜しみなく私財を投じるのと引き換えに、皇帝ヴィルヘルム 2 世か

らの政治的な庇護を受け続けた。ジーモン家が支援したエジプトのテル・エル・アマルナにおけるネフェティティの胸像の発掘（1912 年）や、イラクにおけるバビロンのイシュタル門の発掘（1899～1930 年）は、ヴィルヘルム 2 世の文化政策の象徴として現在に残されている。こうしたイエームズ・ジーモンの動向は、近代ドイツの考古学がユダヤ人ブルジョワジー出身の知識人の手によって著しい発展を遂げていた一面を明らかにした。

それでは、三者のとらえたオリент像とはどのようなものであったのか。

マイヤー・ミュッラー商会、すなわち絨毯商人にとって、「ペルシア絨毯」はオリент・イメージを端的に体現したモノであり、ウィーン万国博覧会を契機とする絨毯流行に感化された顧客の購買意欲を惹きつける宣伝広告の役割を担った。彼らは、「ペルシア絨毯」に表象されたオリент像が絨毯に高い商品価値を付与することを最も重要視したのである。ウィーン万国博覧会以来の欧米における絨毯需要を支えたのは、少数のイラン産の「ペルシア絨毯」と、多数の「トルコ絨毯」あるいは小アジア産の絨毯であったといえるであろう。また、18 世紀以前に織られた稀少な「ペルシア絨毯」を複製する試みは、高品質の絨毯を「商品開発」して、販路を拡大しようとする商業的な動機に突き動かされたものであった。

次に、ヴィルヘルム・ボーデに代表される絨毯研究家のとらえたオリент像をみていく。絨毯研究の発展に大きく貢献したボーデは、オリентの地を踏んだことがなかった。彼は、15～16 世紀に描かれた西洋絵画というフィルターを通して「ペルシア絨毯」すなわちオリентの実像をとらえた。「ペルシア絨毯」を含むオリентのモノは、西洋美術史の時代区分の枠に当てはめられて、西洋を主体とする比較関係の中で論じられてきたのだ。

ここで注意を払うべき点は、ボーデによって収集された絨毯コレクションがオリент美術の部門ではなく、イスラーム美術館に収蔵された点である。19 世紀から 20 世紀のドイツにとって、地理的にも政治的にも非常に近い存在であったオリентはオスマン帝国であった。

また、同時期にヴィルヘルム 2 世は、オリент進出政策の一環として、1902 年にヨルダンで発掘されたムシャッタ宮殿の城壁をベルリンまで運搬し、美術館内に城壁を実寸大で再現した。ボーデ個人は純粹にオリентの美術品を収蔵した美術館を望んだ可能性も否定できない。しかし、ベルリン美術館の最大の支援者である皇帝ヴィルヘルム 2 世の外交力を頼ることによって、絨毯は政治色を強く帯びたフィルターを通してとらえられるようになった。結果として、絨毯はムシャッタ宮殿の城壁とともに、ヴィルヘルム 2 世の文化政策の収穫物の標本として数えられたのである。

イエームズ・ジーモンを事例とするユダヤ人絨毯収集家にとって、オリエントは旧約聖書で語り継がれた祖国であり、かつての古代オリエントとその周辺の地域を指した。彼らにとって、「ペルシア絨毯」を含むオリエント伝来の美術品を収集する行為は、流浪の民である彼らユダヤ人のルーツと存在意義（アイデンティティ）を表明する重要な手段であった。最終的に、彼らの視線は古代文明、すなわちオリエント考古学へ向かった。よって、彼らが最も重要視したのは、古代遺跡の発掘であった。この点で、絨毯は他のオリエントの美術品と並んで、彼らの目を古代オリエントへ向けさせる契機を与えた存在であった。

三者に共通する点として、「ペルシア絨毯」は、その担い手（所有者）である絨毯商人、絨毯研究家、絨毯収集家の属する社会的立場や政治的立場、あるいは外的な影響によって、表象するオリエント像を大きく変容させてきたことがわかる。それは同時に、「ペルシア絨毯」に秘められたオリエント像の多様性を証明している。故に、各人が思い描くオリエント像に相違が生じるのである。

「ペルシア絨毯」は、ヨーロッパの人々にモノとして供給されるだけの存在ではなかった。例えば、「ペルシア絨毯」に描かれた草花文様・狩猟文様・庭園文様・ミフラブ文様（礼拝用の壁龕文様）は、絵画のように豊富なテーマを示している。これらのテーマを基に発達したメダリオン、アラビア文字、ロゼット、アラベスクなどの図案は、西洋の装飾美術に大きな影響を与えた。なかでもアラベスクは、現代の服飾品や調度品類に至るまで繰り返し使用される定番の商業デザインとなった。

また、「ペルシア絨毯」の表象するイメージは、ヨーロッパの文学作品にも影響を深く残している。いわゆる「空飛ぶ絨毯」のイメージといえ、中東を起源とする『千夜一夜物語』が真っ先に挙げられるであろう。だが、「ペルシア絨毯」がヨーロッパを席卷した同時期に、英国の児童文学作家イーディス・ネズビット(Edith Nesbit 1858～1924 年)が、『不死鳥と魔法の絨毯』(*The Phoenix and the Carpet*, 1906)を発表していた。

本作品は、ネズビット女史の代表作『砂の妖精』三部作の一つで、ロンドンに住む仲の良い 5 人兄弟の子供が、近所の砂利採集場で掘り出した砂の妖精サミアッドと共に繰り広げる冒険物語である。本論文の第 4 章第 2 節で取り挙げたカール・マイの冒険小説と大きく異なる点は、物語の舞台がオリエントではなく、ロンドンに移された点である。おそらく、当時の中流家庭ではオリエント産絨毯を身近に見かける機会が多かったのであろう。ヨーロッパの日常生活に溶け込んだ絨毯と、魔法や不死鳥といった非日常的な要素が対比的に盛り込まれ、子供から大人まで幅広い読者を惹きつけた。ヨーロッパの人々は、幼少期から

ネズビット作品を通じて、足を踏み入れたことのないオリエントのイメージを無意識のうちに刷り込まれていたのである。

このように、多岐にわたる分野に影響を及ぼしたオリエントのモノは、「ペルシア絨毯」の他に類を見ない。「ペルシア絨毯」は商業的価値と学術的価値を併せもつ特殊な存在なのだ。ガーજール朝イラン政府は「ペルシア絨毯」が秘める普遍的価値を見込んだ上で、ウィーン万国博覧会に出品したのである。「ペルシア絨毯」はヨーロッパの人々をオリエントへ惹きつけてやまない先導的役割を担ったのであった。

筆者が本論文で新たに明らかにできた重要な点は次の二点に集約することができる。

一つ目に、スイス系マイヤー・ミュッラー商会の 120 年余りにわたる絨毯交易の歴史を研究者ではじめて解明した点である。19～20 世紀に絨毯交易で発展を遂げたマイヤー・ミュッラー商会は、1990 年代初頭の解散後に取引記録の大半が廃棄されたため、マイヤー・ミュッラー商会という存在自体が未開のまま絨毯研究史の中から抜け落ちていた。筆者は、マイヤー・ミュッラー商会の稀少な文献資料と、元社員への聞き取り調査の結果を併用することによって、マイヤー・ミュッラー商会の創業から解散に至る歴史、経営体制、絨毯の流通経路を明らかにすることができた。本論文で得られた成果は、絨毯交易史研究の分野へ一石を投じるものである。

二つ目に、ベルリンの東方系ユダヤ人イエームズ・ジーモンに着目し、彼らが古代エジプトや古代メソポタミアにおける発掘調査や、DOG の運営に莫大な私財を投資することによって、ヴィルヘルム 2 世の中東政策の一端を担っていた事実を究明した。同時に、イエームズ・ジーモンは、ヴィルヘルム 2 世の「カイザー・ユードン」として政治的後ろ盾を得ていた。このようなジーモン家の意向と動向は、近代オリエント学研究を方向づけた重要な要素のひとつであったと筆者は指摘した。

ドイツにおける東方系ユダヤ人の移民史は、1880 年以降の反ユダヤ主義運動の影響によるパレスチナおよびアメリカ大陸等への流出が要因となり、彼らの出自・家族構成・階級・ドイツ社会における動向等が本論文で扱った文脈では必ずしも十分に解明されてこなかった。本論文は、ドイツおよびアメリカ合衆国に散在するジーモン家の貴重な記録資料を収集して統合することで、1780 年代から現代に至る東方系ユダヤ系ブルジョワジーの家族史の再構築に大きく貢献した。また、ベルリンにおける東方系ユダヤ系ブルジョワジーの政治的・経済的・社会的動向の一端を究明することで、近代ドイツ史だけでなく、同時代のヨーロッパにおける政治史、社会経済史・移民史・美術史等の研究に新たな知見を提供すること

ができた。

これまで、ドイツにおけるオリエント研究およびイスラーム研究の発展には、ユダヤ人の多くが携わってきた。その理由として、かつてバビロン捕囚にあったユダヤ人を解放したアケメネス朝ペルシア王のキュロス 1 世（在位紀元前 559～529 年）に対する恩恵が千年以上にわたり脈々と伝承されてきたため、今なおユダヤ人たちの底流には伝統的に古代ペルシアへの憧憬が垣間見られる。

ドイツでイエームズ・ジーモンと彼の一族が携わったオリエント研究に関連する活動の全貌の解明は、すなわちヴィルヘルム 2 世の帝国主義政策に占めたユダヤ人の役割を位置づける手がかりとなり得る。本論文の成果は、歴史学研究だけに留まらず、現代日本の中学校・高等学校の社会科・世界史教育におけるドイツ帝国の対中東政策の新たな側面を補足する要素となり得るであろう。

他方で、本論文で十分に議論できなかった点は、絨毯に描かれたオリエント伝来の意匠がヨーロッパの服飾文化に与えた影響である。例を挙げれば、礼拝絨毯にはイスラム教の聖地であるメッカを指し示すミフラーブ文様が織り込まれている。ミフラーブとは、モスク内で聖地メッカの方向に施された壁龕のことである。ムスリムたちはこの壁龕に向かって一日五回祈りを捧げる。モスクがない場所であっても、礼拝絨毯をメッカの方角へ広げれば即席の礼拝場が出来上がる。このミフラーブ文様は、「マグリブ」、すなわち現在のモロッコ、アルジェリア、チュニジアの地域を指すが、その地域では、刺繍のモチーフとして用いられており、女性用民族衣装のスカートの裾にミフラーブ文様の刺繍がみられる。

同じように、「ペルシア絨毯」の意匠から着想を得たデザインが、近代ヨーロッパの服飾文化に影響を与えた可能性は十分に推測できるであろう。元来のオリエントの図案に込められた意味合いが、近代から現代にいたるヨーロッパのファッション産業界でどのように受容されたのであろうか。それに対して、オリエントの人々がどのような反応を返したであろうか。今後の課題として、「ペルシア絨毯」がヨーロッパの装飾美術分野に形成したオリエント像をさらに深く掘り下げて考察したい。



- 
- <sup>1</sup> 小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』（名古屋出版会、2008年）207頁。
- <sup>2</sup> Bode, Wilhelm von, *Fünzig Jahre Museumarbeit*, Leipzig, 1922, S.61, 63., Bode, Wilhelm von, *Mein Leben*, Berlin, 1930, S.105, 313.
- <sup>3</sup> 杉村棟「絨毯行脚の旅」（『季刊民族学』第150号、2014年）52頁。
- <sup>4</sup> 杉村棟『ペルシヤ絨毯図鑑』（手織絨毯協会、1986年）110頁。
- <sup>5</sup> Birdwood, George, *Oriental Carpets*, Vienna, 1892.
- <sup>6</sup> Kendrick, A. F. & Tattersall, C. E. C., *Hand-woven carpets*, 1922, pp.3,5., アリ・ソレイマニエ「イラン経済における尽きない資源—ペルシヤ絨毯—」（『イラン国民経済のダイナミズム』研究双書503、日本貿易振興会アジア経済研究所、2000年）219頁。坂本勉『ペルシヤ絨毯の道—モノが語る社会史』（山川出版、2003年）11頁。
- <sup>7</sup> Kendrick, A. F. & Tattersall, C. E. C., *Hand-woven carpets*, p.3., 海野弘『装飾空間論：かたちの始源への旅』（美術出版社、1973年）160頁。小林一枝『「アラビアン・ナイト」の国の美術史—イスラーム美術入門』（八坂書房、2004年）119頁。
- <sup>8</sup> Friedrich Spuhler, *Oriental Carpets in the Museum of Islamic Art* (translated by Robert Pinner), Berlin, 1987, p.18.
- <sup>9</sup> イラン歴代の王や英雄の生涯や戦いを綴った書。ペルシア文学史上最高の民族・英雄時叙事詩である。
- <sup>10</sup> 杉田英明「絨毯と文学（3）」（『紀要比較文化研究』第25輯、1987年）69頁。
- <sup>11</sup> Marthe Bernus-Taylor et l., *Great Carpets of the world*, New York, The Vendome Press, 1996, p.20.
- <sup>12</sup> 杉田英明「絨毯と文学（1）」（『紀要比較文化研究』第23輯、1985年）49頁。
- <sup>13</sup> R. Ettinghausen, “The Impact of Muslim Decorative Arts and Painting on the Arts of Europe”, *The Legacy of Islam*, pp.293-294; K. Erdmann, *Seven Hundred Years of Oriental Carpets*, University of California Press, 1970, p.23.
- <sup>14</sup> プリニウスは『博物誌』の中で、「さまざまな色彩を編んで絵柄にすることは主としてバビロニアで行われた為、この名が与えられるようになった」（8-196）と述べている。杉田英明「絨毯と文学（3）」（『紀要比較文化研究』第25輯、1987年）70頁。
- <sup>15</sup> マルコ・ポーロ（愛宕松男訳）『東方見聞録第1巻』（平凡社、1970年）39頁。
- <sup>16</sup> Erdmann, *Siebenhundert Jahre Orientteppich*, S.96-98.
- <sup>17</sup> 杉田英明「絨毯と文学（3）」1-76頁。
- <sup>18</sup> 当時のヴェネツィア大使は、ウォルジー枢機卿が輸入品の関税撤廃と引き換えにオリエント産絨毯を催促したことを記録に残している。以下、訳出文（括弧内は本論文執筆者が補足した）。「協議の後、彼（ウォルジー枢機卿）は何枚もの選り抜きの絨毯を催促してきた。（中略）私は彼が（関税撤廃の）請願を受け入れる気がないのではないかと疑った…一方で、彼は12枚から15枚の素晴らしい小型の絨毯を入手し、大変満足している様子であった。」 Kendrick, A.F. and C.E.C. Tattersall, *Hand-woven carpets*, p.77.
- <sup>19</sup> Bérinstain, Valérie et al. eds., *Great carpets of the world*, p.314., Kendrick, A.F. and C.E.C. Tattersall, *Hand-woven carpets*, pp.73, 80-81.
- <sup>20</sup> 坂本勉『イスタンブール交易圏とイラン—世界経済における近代中東の交易ネットワーク』（慶應義塾出版会、2015年）131頁。
- <sup>21</sup> 坂本勉『ペルシヤ絨毯の道—モノが語る社会史』35頁。
- <sup>22</sup> Spuhler, Friedrich. ed., *Oriental carpets in Museum of Islamic art*, Berlin, London, 1988, p.74.

<sup>23</sup> Tavernier, J. B, *Suite des voyages de Monsieur J.B. Tavernier en Turquie, en Perse et aux Indes*, 6 vols, Rouen, 1724.

<sup>24</sup> Chardin, Jean, *Voyages du Chevalier Chardin, en Perse, et autres lieux d'Orient* (L. Langrès ed.), 10 vols, Paris, 1811.

<sup>25</sup> ハクルトは自身の航海記で、「1579年、いくつかの任務がペルシアに派遣された染色師モルガン・ハッブルゾーンに課せられた」と見出しに挙げ、当時のペルシア産絨毯について以下のように記録した。「ペルシアでは、きめの粗い房がついた世界で最高級の、素晴らしい色づかいの絨毯をみかけるだろう。(中略)もし、帰国する前に並外れた優秀な絨毯職人を獲得できたのなら、英国に絨毯を普及させるべきである。そうすれば、あなたの会社の取引も急増するだろう。」Kendrick, A.F. and C.E.C. Tattersall, *Hand-woven carpets*, p.79.

<sup>26</sup> 後藤晃「19世紀イランにおける貿易の展開と社会経済構造の変容Ⅰ」(『東洋文化研究所紀要』、1987年)107-209頁。

<sup>27</sup> 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』(5)(宗高書房、1975年)28頁。

<sup>28</sup> 坂本勉『イスタンブール交易圏とイラン—世界経済における近代中東の交易ネットワーク』143頁。

<sup>29</sup> ソルターナーバードの絨毯工場の詳細については、坂本勉「タブリーズの絨毯貿易」(『東洋文化研究所紀要』第114冊、1991年)151-152頁で述べられている。

<sup>30</sup> 坂本勉『イスタンブール交易圏とイラン—世界経済における近代中東の交易ネットワーク』145頁。

<sup>31</sup> 坂本勉『ペルシア絨毯の道 モノが語る社会史』54頁。

<sup>32</sup> 前掲書 55-56頁。

<sup>33</sup> 坂本勉「タブリーズの絨毯貿易」(『東洋文化研究所紀要』第114冊、1991年)161頁。坂本勉『ペルシア絨毯の道 モノが語る社会史』56-57頁。

<sup>34</sup> 鶴岡真弓『「装飾」の美術文明史 ヨーロッパ・ケルト、イスラームから日本へ』(日本放送出版会、2004年)212頁。

<sup>35</sup> マイヤー・ミュッラー商会元社員のリチャード・ルディン氏の証言によれば、ピュンターは当時スイス滞在中のイラン人に対して経済的な支援を行うなど、特命大使的な役割を担っていたという。(2015年11月14日に筆者が行ったインタビュー調査より)

<sup>36</sup> 1979年のイラン・イスラム革命のことを指すとみられる。

<sup>37</sup> インタビューでは1963年生まれと証言していたが、ディプロマ合格証の記載から、正しくは1964年生まれであることが判明した。

<sup>38</sup> 本人は23歳で合格したと証言したが、合格証の記載から正しくは24歳であったことが判明した。

<sup>39</sup> 1990年のスイスフランと日本円の換金平均値は1フラン93円であることに基づいて換算すると、29万フランは約2,697万円である。

出典：<http://スイス円.com/img/chfjpy1990.png>

<sup>40</sup> “Der wichtigste Gegenstand zur behaglichen Ausstattung eines Wohnraumes ist entschieden der Teppich! Die kostbarsten Möbel, die reichsten Dekorationen kommen nicht zur Geltung ohne einen passenden Teppich, der das ganze Arrangement eines Zimmers vervollständigt. Wiederum sind es die echt orientalischen Teppiche, die in ihrer reichen und doch harmonischen Farbenpracht am ruhigsten wirken. Der Besitzer schöner, echter Teppiche erfreut sich täglich an dem Reiz der Farben und der Originalität jedes einzelnen Stückes, abgesehen von der unverwüstlichen Qualität und dem fortwährend zunehmenden Wert solcher Teppiche. ...dessen Boden mit einem schweren Afghan-, Bochara- oder Kasak-Teppich belegt ist, in dem eine Chaiselongue mit einem weichen, mattglänzenden Mekka-Teppich ...In jedem anderen Raum, Speisezimmer, Salon, Boudoir, Schlafzimmer wird der richtig gewählte, echte Teppich

---

die schönste und dauernd befriedigende Wirkung erzielen. Geeignete kräftige Stücke kommen besonders in Vestibüls, Hallen, auf Treppen etc. vorzüglich zur Geltung, wo sie mit Recht immer mehr verwendet werden.” Meyer-Müller, *Der Orientalische Teppich*, Bern, 1904, S.38.

<sup>4 1</sup> Meyer-Müller, *Der Orientalische Teppich*, S.27.

<sup>4 2</sup> “Hat man sich über den Preis eines Postens geeinigt, so wird dies durch Handschlag beschlossen und besiegelt. Natürlich werden die Teppiche gegen Bezahlung sofort durch Hammals (Träger) oder Lastwagen weggeführt, wie auf einigen unserer Bilder ersichtlich ist. Nachdem wir meist staubbeladen die anstrengende Arbeit des Teppicheinkaufens fortgesetzt haben, bis unser Bedarf gedeckt und eine gehörige Ladung beisammen ist, bietet uns die Weiterreise zur See nach Smyrna und in die kleinasiatischen Teppichgebiete willkommene Erholung und Abwechslung. Näheres über die Produktion der sogenannten Smyrna-Teppiche, von denen wir gleichfalls grosse Qualitäten an Ort und Stelle einkaufen, haben wir bereits unter dem Abschnitt «Herstellungsweise der Orient-Teppiche» berichtet.” Meyer-Müller, *Der Orientalische Teppich*, S.27.

<sup>4 3</sup> “Vor der Abreise von Konstantinopel müssen die Pässe neuerdings visiert werden. Beim Passieren des Zollamtes treten die bekannten rückständigen Verhältnisse in lästiger Weise zutage. Ohne «Bakschisch» (Trinkgeld) geht es da nicht ab. Die Zollbeamten rühren sich nicht, bis dieses «Hilfsmittel» zur Anwendung kommt. Die Leute sind sozusagen auf diese Trinkgelder angewiesen, da sie von der Regierung oft lange keine Gehalt ausbezahlt bekommen.--Am Quai oder in einer Barke bei den zur Abfahrt bereiten Schiffen befinden sich türkische Polizeibeamte, die durch nochmaliges Visum der Pässe die Abreisenden kontrollieren.” Meyer-Müller, *Der Orientalische Teppich*, S.29.

<sup>4 4</sup> “Smyrna ist nicht nur landschaftlich von hervorragender Schönheit, es ist auch eine der interessantesten, wichtigsten Handelstädte des türkischen Reichs. Auf dem langen und breiten Quai herrscht ein malerisches Leben und Treiben. Auffallend sind die vielen Karawanenzüge, welche Ausfuhrware, Feigen, Rosinen, Teppiche etc. aus dem Binnenlande ans Meer bringen. An der Spitze eines solchen Zuges reitet der Führer auf einem Esel, dann folgen, immer an das vorhergehende angebunden, die schwer gepackten Kameele, deren letztes eine Glocke trägt, damit der Führer stets weiss, ob sein Zug noch beisammen ist. Unsere Teppicheinkäufe nehmen wieder viel Zeit und Mühe in Anspruch, unsere Aufgabe ist aber glänzend erfüllt. Mit Freuden sehen wir, wie die vielen Ballen Teppiche auf den Dampfer verladen werden, um die Reise nach der Schweiz anzutreten. Wir benutzen unsere Heimfahrt zum Besuche von Athen, zu welchem Zweck wir in Piräus der Hafenstadt landen.” Meyer-Müller, *Der Orientalische Teppich*, S.29.

<sup>4 5</sup> Quataert, Donald, “Ottoman Manufacturing in the Nineteenth Century” in Quataert, Donald ed, *Manufacturing in the Ottoman Empire and Turkey 1500-1950*, New York, 1994, pp.108-110.

<sup>4 6</sup> *ibid.*, pp.108-110.

<sup>4 7</sup> Christie’s, *Fine Oriental Rugs and Carpets including the C. Meyer-Müller Collection (Part II)*, New York, 1991, p.30.

<sup>4 8</sup> Carl, Meyer-Pünter, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel*, Zurich, 1917, S.12.

<sup>4 9</sup> Der Kaiser-Friedrich Museums Berlin ed., *Wilhelm von Bode, Museumsdirektor und Mäzen: Wilhelm von Bode zum 150. Geburtstag*. Berlin, 1995., Ohlsen, Manfred, *Wilhelm von Bode: Zwischen Kaisermacht und Kunsttempel, Biographie*, Berlin, 1995.

<sup>5 0</sup> Klose, Wolfgang ed., *Wilhelm von Bode –Otto Kummel: Briefwechsel aus 20 Jahren*

---

1905-1925. Norderstedt, 2009.

<sup>51</sup> 数少ない先行研究の一例として、杉田英明氏は近代ヨーロッパにおける絨毯の受容と文学作品への表象を取り扱った論文中でボーデと絨毯研究について簡単に触れている。杉田英明「絨毯と文学（3）」141頁を参照のこと。

<sup>52</sup> Enderlein, Volkmar, “Bode’s legacy: Wilhelm von Bode & the Berlin carpet collection” In *HALI* 69:84, 1993.

<sup>53</sup> 研究書によっては、ヴィルヘルム・フォン・ボーデ（Wilhelm von Bode）と記載されることが多いが、本論文ではイスラーム美術部門設立の1900年代までを中心に扱うため、便宜上、フォンを省略し、ヴィルヘルム・ボーデに統一する。

<sup>54</sup> Bode, Wilhelm von, *Mein Leben*, vol.1, Berlin, 1930, S.105.

<sup>55</sup> *ibid.*, S.105.

<sup>56</sup> *ibid.*, S.60.

<sup>57</sup> Marchand, L. Suzanne, *German Orientalism in the Age of Empire: Religion, Race, and Scholarship*, Cambridge, 2009, p.398.

<sup>58</sup> ピーター・コーマック『モリスが先導したアーツ・アンド・クラフツ イギリス・アメリカ』（アーツ・アンド・クラフツ出版委員会、2008年）17頁。

<sup>59</sup> Erdmann, *Siebenhundert Jahre Orientteppich*, S.29.

<sup>60</sup> Vernoit, Stephen ed., *Discovering Islamic Art: Scholars, Collectors and Collections, 1850-1950*, London, 2000, p.120.

<sup>61</sup> Bode. *Mein Leben*. vol.1, S.252.

<sup>62</sup> 杉田「絨毯と文学（3）」74頁。

<sup>63</sup> ボーデは、絨毯をメダリオン・ウシャク、スターウシャク、ダブル・ニッチ・ウシャク、ロット絨毯、ホワイト・グランド・ウシャク、ホルバイン絨毯の6種類に分類した。Spuhler, *Oriental carpets in Museum of Islamic art*, p.10.

<sup>64</sup> Marchand, *German Orientalism in the Age of Empire*, p.393.

<sup>65</sup> Bode, *Fünfzig Jahre Museumarbeit*, S. 60.

<sup>66</sup> *ibid.*, S.60.

<sup>67</sup> ヒジャーズ鉄道は、シリアとアラビア半島西岸部のヒジャーズ地方を結ぶことを目指し、1900年に建設が開始された。鉄道建設の裏には、メッカ巡礼を活性化することでムスリムの団結を図るとともに、自らの権威と影響力を誇示しようとするアブデュルハミト2世の政治的思惑が働いていた。そのため、当時のオスマン帝国領内を走る鉄道の大部分がヨーロッパ資本で建設されたのに対して、ヒジャーズ鉄道はオスマン帝国からの出資と内外のムスリムからの寄付金のみで建設費用がまかなわれた。また、経済的には、蒸気船時代の到来によって巡礼客をバイルートに奪われ、衰退していた中継都市のダマスカスを再興させる狙いがあった。『岩波イスラーム辞典』807頁。

<sup>68</sup> Bode, *Fünfzig Jahre Museumarbeit*, S.59.

<sup>69</sup> *ibid.*, S.59-60.

<sup>70</sup> Alexander, Edward, *Museum Masters: Their Museums and Their Influence*. London, 1995, p.209.

<sup>71</sup> Bode, *Fünfzig Jahre Museumarbeit*, S.61.

<sup>72</sup> Bode, *Mein Leben*, S.313.

<sup>73</sup> Spuhler, *Oriental carpets in Museum of Islamic art, Berlin*. London, 1988.

<sup>74</sup> 野村真理「東欧ユダヤ人」(『若尾祐司・井上茂子編『近代ドイツの歴史 18世紀から近代まで』(ミネルヴァ書房、2005年) 137頁。

<sup>75</sup> Bode, *Fünfzig Jahre Museumarbeit*, S.61.

<sup>76</sup> Hauser, R. Stefan. R. and Anne. C. Gunter, *Ernst Herzfeld and the Development of Near Eastern Studies, 1900-1950*, Leiden, 2004.

<sup>77</sup> Staatliche Museen zu Berlin ed., *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen*, Berlin, 2007, S.13.

- 
- <sup>78</sup> Matthes, Olaf, *James Simon: Die Kunst des sinnvollen Gebens*, Berlin, 2011, S.32.
- <sup>79</sup> 若尾祐司・井上茂子編『近代ドイツの歴史 18 世紀から近代まで』（ミネルヴァ書房、2005 年）112 頁。
- <sup>80</sup> Staatliche Museen zu Berlin, *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen*, S.11.
- <sup>81</sup> Matthes, *James Simon: Die Kunst des sinnvollen Gebens*, S.22.
- <sup>82</sup> Staatliche Museen zu Berlin, *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen*, S.10.
- <sup>83</sup> Brandenburgisches Landeshauptarchiv. Potsdam. Rep.30, Berlin C Tit94, Nr.13424: James Simon.
- <sup>84</sup> Mosse, Werner. E, *Jews in the German Economy: The German-Jewish Economic Elite, 1820-1935*, Oxford, 1987, p.173. 参考までに、同年の皇帝ヴィルヘルム 2 世の総資産額は、1 億 4000 万マルクである。
- <sup>85</sup> Matthes, Olaf, *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter*, Berlin, 2000.
- <sup>86</sup> 若尾祐司・井上茂子編『近代ドイツの歴史 18 世紀から近代まで』144 頁。
- <sup>87</sup> 永田雄三編『西アジア史Ⅱ（新版世界各国史九）』（山川出版社、2002 年）309-310 頁。
- <sup>88</sup> 南ドイツのレーゲンスブルグの絵入り週刊誌に連載されたこの物語は、万能のドイツ人主人公が忠実なムスリムの「召使い」とともに、オリエント各地を舞台に大活躍を展開する筋書きで人気を集めた。杉村達『オリエントへの道—ドイツ帝国主義の社会史』（藤原書店、1990 年）234-239 頁。
- <sup>89</sup> Matthes, Olaf, *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter*, Berlin, 2000, S.200.
- <sup>90</sup> *ibid.*, S.201.
- <sup>91</sup> Matthes, *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter*, S.204., Archiv des Orient-Komitees im Archiv des Vorderasiatischen Museums zu Berlin Preußischer Kulturbesitz 1.1.
- <sup>92</sup> Matthes, *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter*, S.204.
- <sup>93</sup> *ibid.*, S.205.
- <sup>94</sup> *ibid.*, S.206.
- <sup>95</sup> *ibid.*, S.208.
- <sup>96</sup> *ibid.*, S.210.
- <sup>97</sup> *ibid.*, S.223.
- <sup>98</sup> Staatliche Museen zu Berlin, *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen*. S.16., Matthes, *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter*, S.235.
- <sup>99</sup> *ibid.*, S.55-58.
- <sup>100</sup> 寄贈したコレクションの内訳は次の通りである。絵画 21 点、彫像 19 点。彫刻細工品 48 点、硬貨 388 点、蠟細工品 6 点、象嵌細工品 3 点、貴金属品 5 点、マジョルカ陶器 2 点。Staatliche Museen zu Berlin, *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen*, S.152.
- <sup>101</sup> *ibid.*, S.119.
- <sup>102</sup> Staatliche Museen zu Berlin. *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen*, S.18.
- <sup>103</sup> *ibid.*, S.18.

MEYER



MÜLLER

Property of the  
National Museum of Ethnology  
Senri Expo Park  
Suita, Osaka 565, Japan

No. 59 Yomud Turkoman Flatwoven Tentband, circa 1900  
The brick-red ground covered by an all-over repeating pattern of lachthook diamonds in navy-blue, rust, brown and ivory flanked by a pair of brown and ivory zig-zag borders - 1600 x 35 cm.

No. 60 Yomud Turkoman Horsecover, circa 1900  
The ground composed of alternating brick-red, navy-blue, saffron and ivory vertical bands with barberpole stripes and diamond design - 133 x 119 cm.

Lit.: Uwe Jourdan, Orientteppiche, Band 4: Turkmenische Teppiche, Battenberg Verlag, München, 1989, page 177, figure 129.





MEYER



MÜLLER

- No. 62 Afshar Flatwoven Saltbag, circa 1900  
The ivory ground covered by an alllover pattern of interlacing trellis design containing cruciform devices in navy-blue, red and apricot with original kilim backing and tassels - 55 x 52 cm.
- No. 63 Yomud Turkoman Saddlecover, circa 1900  
"U"-shaped in the form of a saddle, the reddish-brown ground covered by an alllover pattern of unusual navy-blue latchhook guls surrounded by an ivory primary border of reciprocal devices, with slit-opening for saddle pommel - 60 x 43 cm.



(62)



(63)

H. 186131

MEYER



MÜLLER

No. 64 Yomud Turkoman Asmalyk, circa 1880

The ground covered by an all-over pattern of vertical stems with ivory serrated leaves surrounded by a teal-green border of alternating stepped devices and reciprocal tuning fork devices with an unusual striped kilim along the top edge - 129 x 72 cm.

Lit.: Uwe Jourdan, Orientteppiche, Band 4: Turkmenische Teppiche, Battenberg Verlag, München, 1989, pages 220-221, figure 189.



H 186132

(64)



MEYER



MÜLLER

- No. 65 Anatolian Multiple Saph Kilim, dated 1893  
The ground covered by three sea-green mihrabs containing radiating latchhook arches and stylized plant forms with a ewer in the center panel surrounded by a rust primary border of latchhook medallions and an outer navy-blue border of hexagons - 250 x 146 cm.

Lit.: Eberhart Herrmann, Seltene Orienteppiche V, München, 1983, pages 38-39, figure 16.



(65)

H 186133

MEYER



MÜLLER

No. 66 Karakalpak Turkoman Long Rug, third quarter 19th Century  
The rust-red ground covered by five star-shaped medallions  
in salmon and teal-blue with various geometric devices and  
stylized animals surrounded by a teal-blue primary border  
of cruciform devices and three narrow guard borders -  
386 x 140 cm.

Published: Carl Meyer-Pünter, Der Orient Teppich, Zürich,  
1917, Index, entry 3908.



(66)

H. 186134



MEYER



MÜLLER

No. 67 Beshir Turkoman Carpet, circa 1875

The brick-red ground covered by an alllover pattern of alternating Mina Khani style flowerheads and Chuval guls with interspersed daimonds and one solitary human figure surrounded by a pair of ivory zig-zag stripes and three guard borders with striped kilim skirts at both ends - 373 x 212 cm.

Published: Carl Meyer-Pünter, Der Orient Teppich, Zürich, 1917, Index, page 28, entry 5634.



H. 186135



## Internet-Auszug - Handelsregister des Kantons Zürich

### Bestellung

Bestellung von beglaubigten Handelsregisterauszügen, Statuten und anderen Registerakten (gegen Rechnung, Zustellung per Post)

[Bestellung von beglaubigten Handelsregisterauszügen \(Anmeldung zur Kreditkarten-Zahlung\)](#)

Preis des beglaubigten Vollauszuges: CHF 50

Firmennummer	Rechtsnatur	Eintragung	Löschung	Übertrag CH-020.3.926.162-0 von: <a href="#">CH-020.3.926.162-0/a</a> auf:
HE-105.954.137	Aktiengesellschaft (AG)	13.07.1904	18.05.2011	

Ei	Lö	Firma
1	13	Teppichhaus Meyer-Müller AG
11	13	(Teppichhaus Meyer-Müller SA) (Teppichhaus Meyer-Müller Ltd)
13		Teppichhaus Meyer-Müller AG in Liquidation
13		(Teppichhaus Meyer-Müller SA en liquidation) (Teppichhaus Meyer-Müller Ltd in liquidation)

Ref	Sitz
1	Zürich

Ei	Lö	Aktienkapital (CHF)	Liberierung (CHF)	Aktien-Stückelung
1	11	500'000.00	500'000.00	500 Namenaktien zu CHF 1'000.00
11		100'000.00	100'000.00	100 Namenaktien zu CHF 1'000.00

Ei	Lö	Adresse der Firma
1	6	Stampfenbachstrasse 6 8001-Zürich
6	7	Uranistrasse 40 8001-Zürich
7		Weinbergstrasse 5 8001 Zürich

Ei	Lö	PS-Kapital (CHF)	Liberierung (CHF)	Partizipationsscheine

Ei	Lö	Zweck
1	11	Handel mit Teppichen und Bodenbelägen aller Art sowie Verlegung von Bodenbelägen; Gesellschaft kann alle weiteren Geschäfte tätigen, welche direkt oder indirekt mit ihrem Zweck in Verbindung stehen, sowie ferner sich an anderen Unternehmungen beteiligen und andere Unternehmungen sowie Liegenschaften erwerben.
11		Handel mit Teppichen, Bodenbelägen sowie Accessolres jeglicher Art; kann sich an anderen Unternehmen beteiligen sowie Grundstücke erwerben, halten und veräussern.

Ei	Lö	andere Adresse

Ei	Lö	Bemerkungen	Ref	Statutendatum
11		Mitteilungen an die Aktionäre erfolgen durch eingeschriebenen Brief an die im Aktienbuch verzeichneten Adressen.	1	03.12.1975
11		Die Übertragbarkeit der Namenaktien ist nach Massgabe der Statuten beschränkt.	11	29.03.2000
11		Bei der Kapitalherabsetzung vom 29.03.2000 werden 400 Namenaktien zu CHF 1'000.-- vernichtet und zurückbezahlt, die Beachtung der gesetzlichen Vorschriften von Art. 734 OR wird mit öffentlicher Urkunde vom 10.07.2000 festgestellt.		
13		Die Gesellschaft ist mit Beschluss der Generalversammlung vom 12.09.2007 aufgelöst.		
14		Die Liquidation ist beendet. Die Gesellschaft wird gelöscht.		

Ei	Lö	Besondere Tatbestände	Ref	Publikationsorgan
			1	SHAB

Ei	Lö	Zweigniederlassung (en)	Ei	Lö	Zweigniederlassung (en)
1	5	Bern			
1	5	Solothurn			

Zel	Ref	TR-Nr	TR-Datum	SHAB	SHAB-Dat.	Seite / Id	Zel	Ref	TR-Nr	TR-Datum	SHAB	SHAB-Dat.	Seite / Id
ZH	0		(Auslassung)		(Auslassung)		ZH	8	26899	11.12.1996	245	17.12.1996	7809
ZH	1	23635	18.12.1991	2	07.01.1992	22	ZH	9	1734	23.01.1997	18	29.01.1997	611
ZH	2	19295	13.11.1992	229	25.11.1992	5496	ZH	10	6152	18.03.1997	56	24.03.1997	1980
ZH	3	3854	02.03.1993	49	11.03.1993	1194	ZH	11	17973	25.07.2000	147	31.07.2000	5212
ZH	4	2917	09.02.1994	33	16.02.1994	914	ZH	12	20794	30.08.2000	172	05.09.2000	6052
ZH	5	12044	14.06.1995	117	20.06.1995	3438	ZH	13	27113	27.09.2007	191	03.10.2007	21 / 4137586
ZH	6	21883	20.10.1995	208	26.10.1995	5890	ZH	14	18262	18.05.2011	99	23.05.2011	6173510
ZH	7	14281	02.07.1996	130	08.07.1996	4062							

Ei	Ae	Lö	Personalangaben	Funktion	Zeichnungsart
1	3m		Gebertshöel, Mirella, von Oltingen und Winterthur, in Küsnacht	Präsident des Verwaltungsrates + Delegierter des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
1	4		Strebel, Dr. Kurt, von Lindau und Wolkenshvil, in Lindau	Mitglied des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
1	13m		Wäber, Dr. Thomas, von Stäfa, in Zürich	Mitglied des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
1	6		Frauenfelder, Viktor, von Zürich und Adlikon, in Hausen am Albis	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1	3m		Keller, Beat, von Bremgarten AG, in Zürich	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1	12		Kühn, Hanspeter, von Zürich, in Niederglatt	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1	2		Schmid, Christoph A., von Zürich und Hegglingen, in Zürich	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1	3m		Beeler, Eduard, von Arth, in Opfikon		Kollektivprokura zu zweien
3	10m		Gebertshöel, Mirella, von Oltingen und Winterthur, in Küsnacht	Präsident des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
3	8		Keller, Beat, von Bremgarten AG, in Zürich	Delegierter des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien

10	13m	<del>Gaberthüel-Mirella, von Oftringen und Winterthur, in Küsnacht</del>	<del>Präsident des Verwaltungsrates</del>	<del>Einzelunterschrift</del>
13		Gaberthüel, Mirella, von Oftringen und Winterthur, in Küsnacht	Präsident des Verwaltungsrates	ohne Zeichnungsberechtigung
13		Wäber, Dr. Thomas, von Stäfa, in Zürich	Mitglied des Verwaltungsrates + Liquidator	Einzelunterschrift

XML

<Excerpt>

Die obenstehenden Informationen erfolgen ohne Gewähr und haben keinerlei Rechtswirkung. Verbindlich sind einzig die vom kantonalen Handelsregisteramt ausgestellte, beglaubigte Handelsregisterauszug und der Publikationstext im Schweizerischen Handelsanztblatt (SHAB). Hinweis: Es ist möglich, dass grafische Elemente (z.B. Durchstreichungen) nicht mit allen rowsem dargestellt werden können.

Sollten Sie mit unserem Web-Server ein Problem feststellen, können Sie uns per E-Mail eine [elektronische Meldung senden](#).





# HANDELSREGISTER DES KANTONS ZÜRICH

Firmennummer	Rechtsnatur	Eintragung	Löschung	Übertrag CH-020.3.926.162-0 von: CH-020.3.926.162-0/a auf:	1
CHE-105.954.137	Aktiengesellschaft	13.07.1904	18.05.2011		



Alle Eintragungen

Firma erloschen

Ei	Lö	Firma	Ref	Sitz
1	13	Teppichhaus Meyer-Müller AG	1	Zürich
11	13	(Teppichhaus Meyer-Müller SA) (Teppichhaus Meyer-Müller Ltd)		
13		Teppichhaus Meyer-Müller AG in Liquidation		
13		(Teppichhaus Meyer-Müller SA en liquidation) (Teppichhaus Meyer-Müller Ltd in liquidation)		

Ei	Lö	Aktienkapital (CHF)	Liberierung (CHF)	Aktien-Stückelung	Ei	Lö	Adresse der Firma
1	11	500'000.00	500'000.00	500-Namenaktien zu CHF 1'000.00	1	6	Stampfenbachstrasse 6 8001 Zürich
11		100'000.00	100'000.00	100 Namenaktien zu CHF 1'000.00	6	7	Uraniastrasse 40 8001 Zürich
					7		Weinbergstrasse 5 8001 Zürich

Ei	Lö	Zweck	Ei	Lö	Postadresse
1	11	Handel mit Teppichen und Bodenbelägen aller Art sowie Verlegung von Bodenbelägen; Gesellschaft kann alle weiteren Geschäfte tätigen, welche direkt oder indirekt mit ihrem Zweck in Verbindung stehen, sowie ferner sich an anderen Unternehmungen beteiligen und andere Unternehmungen sowie Liegenschaften erwerben.			
11		Handel mit Teppichen, Bodenbelägen sowie Accessoires jeglicher Art; kann sich an anderen Unternehmen beteiligen sowie Grundstücke erwerben, halten und veräußern.			

Ei	Lö	Bemerkungen	Ref	Statutendatum
11		Mitteilungen an die Aktionäre erfolgen durch eingeschriebenen Brief an die im Aktienbuch verzeichneten Adressen.	1	03.12.1975
11		Die Übertragbarkeit der Namenaktien ist nach Massgabe der Statuten beschränkt.	11	29.03.2000
11		Bei der Kapitalherabsetzung vom 29.03.2000 werden 400 Namenaktien zu CHF 1'000.- vernichtet und zurückbezahlt; die Beachtung der gesetzlichen Vorschriften von Art. 734 OR wird mit öffentlicher Urkunde vom 10.07.2000 festgestellt.		
13		Die Gesellschaft ist mit Beschluss der Generalversammlung vom 12.09.2007 aufgelöst.		
		<b>Die Liquidation ist beendet. Die Gesellschaft wird gelöscht.</b>		

Ei	Lö	Besondere Tatbestände	Ref	Publikationsorgan
			1	SHAB

Ei	Lö	Zweigniederlassung (en)	Ei	Lö	Zweigniederlassung (en)
1	5	Bern			
1	5	Soletum			

Zei	Ref	TR-Nr	TR-Datum	SHAB	SHAB-Dat.	Seite / Id	Ze	Ref	TR-Nr	TR-Datum	SHAB	SHAB-Dat.	Seite / Id
ZH	0		(Auslassung)		(Auslassung)		ZH	8	26899	11.12.1996	245	17.12.1996	7809
ZH	1	23635	18.12.1991	2	07.01.1992	22	ZH	9	1734	23.01.1997	18	29.01.1997	611
ZH	2	19295	13.11.1992	229	25.11.1992	5496	ZH	10	6152	18.03.1997	56	24.03.1997	1980
ZH	3	3854	02.03.1993	49	11.03.1993	1194	ZH	11	17973	25.07.2000	147	31.07.2000	5212
ZH	4	2917	09.02.1994	33	16.02.1994	914	ZH	12	20794	30.08.2000	172	05.09.2000	6052
ZH	5	12044	14.06.1995	117	20.06.1995	3438	ZH	13	27113	27.09.2007	191	03.10.2007	21 / 4137586
ZH	6	21883	20.10.1995	208	26.10.1995	5890	ZH	14	18262	18.05.2011	99	23.05.2011	6173510
ZH	7	14281	02.07.1996	130	08.07.1996	4062							



【資料3】マイヤー・ミュッラー商会の商業登録抄本（チューリヒ市商工会議所）電子媒体bの続き

## HANDELSREGISTER DES KANTONS ZÜRICH

CHE-105.954.137	Teppichhaus Meyer-Müller AG in Liquidation	Zürich	2
-----------------	--	--------	---

### Alle Eintragungen

Ei	Ae	Lö	Personalangaben	Funktion	Zeichnungsart
1		3m	Gaberthüel, Mirella, von Oftringen und Winterthur, in Küsnacht	Präsident des Verwaltungsrates + Delegierter des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
1		4	Strebel, Dr. Kurt, von Lindau und Wohlenschwil, in Lindau	Mitglied des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
1		13m	Wäber, Dr. Thomas, von Stäfa, in Zürich	Mitglied des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
1		6	Frauenfelder, Viktor, von Zürich und Adlikon, in Hausen am Albis	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1		3m	Keller, Beat, von Bremgarten AG, in Zürich	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1		12	Kühn, Hanspeter, von Zürich, in Niederglatt	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1		2	Schmid, Christoph A., von Zürich und Hegglingen, in Zürich	Direktor	Kollektivunterschrift zu zweien
1		3m	Beeler, Eduard, von Arth, in Opfikon		Kollektivprokura zu zweien
3		10m	Gaberthüel, Mirella, von Oftringen und Winterthur, in Küsnacht	Präsident des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
3		8	Keller, Beat, von Bremgarten AG, in Zürich	Delegierter des Verwaltungsrates	Kollektivunterschrift zu zweien
3		12	Beeler, Eduard, von Arth, in Opfikon	Vizedirektor	Kollektivunterschrift zu zweien
9			Integer Treuhand, Anton Meier, in Birmensdorf ZH	Revisionsstelle	
10		13m	Gaberthüel, Mirella, von Oftringen und Winterthur, in Küsnacht	Präsident des Verwaltungsrates	Einzelunterschrift
13			Gaberthüel, Mirella, von Oftringen und Winterthur, in Küsnacht	Präsident des Verwaltungsrates	ohne Zeichnungsberechtigung
13			Wäber, Dr. Thomas, von Stäfa, in Zürich	Mitglied des Verwaltungsrates + Liquidator	Einzelunterschrift

Zürich, 26.08.2015 13:29

Diese Internet Information aus dem kantonalen Handelsregister hat mangels Originalbeglaubigung keinerlei Rechtswirkung und erfolgt ohne Gewähr.

Die obenstehenden Informationen erfolgen ohne Gewähr und haben keinerlei Rechtswirkung.

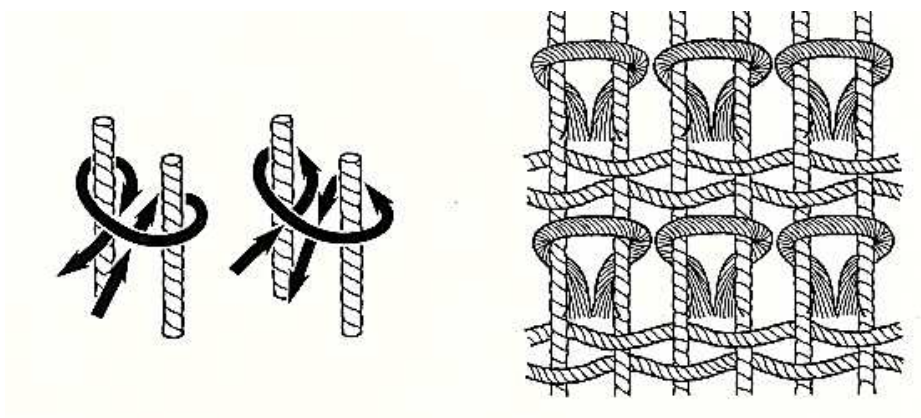


【図 1】 トルコ結びとペルシア結び

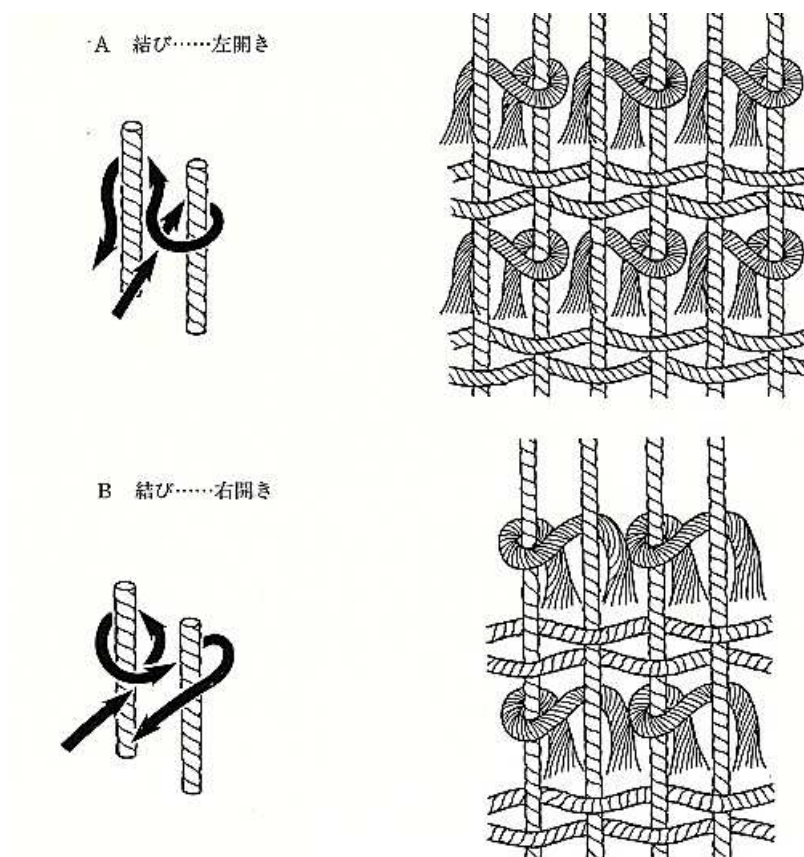
出典：アリ・ソレイマニエ「イラン経済における尽きない資源—ペルシア絨毯」

（『イラン国民経済のダイナミズム』、アジア経済研究所、2000年）

◆閉鎖型、左右均等結び、トルコ結び



◆開放型、左右非均等結び、ペルシア結び



【図 2】 ペルシア絨毯の輸出先

(1913 年 5 月 21 日～1914 年 5 月 20 日、イラン公使館の記録に基づく)

※1 クランは約 1 フランに相当する。赤の下線部は筆者によるものである。

出典：Carl, Meyer-Pünter, 1917, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel*.

Export von Perser-Teppichen	
in Wolle, in der Zeit vom 21. März 1913 bis 20. März 1914.	
(Wert in Krans à ca. 1 Fr.)	
Laut Angaben der Kaiserlich Persischen Gesandtschaft in Paris.	
Deutschland . . . . .	Krans 1 899 593.30
Oesterreich-Ungarn . . . . .	» 593 852.60
Belgien . . . . .	» 46 823.70
Egypten . . . . .	» 1 447 858.50
Groß-Britannien . . . . .	» 2 581 928.80
Indien . . . . .	» 472 582.—
Amerika . . . . .	» 8 012 581.50
Frankreich . . . . .	» 423 050.10
Italien . . . . .	» 2 640.—
Holland . . . . .	» 5 500.—
Rußland . . . . .	» 28 617 056.60
Schweden . . . . .	» 3 963.30
Schweiz . . . . .	» 47 756.50
Türkei . . . . .	» 15 292 132.90
Mascate . . . . .	» 26 488.—
Oman . . . . .	» 113 614.60
Zanzibar . . . . .	» 10 010.—
	<u>Krans 59 597 432.40</u>

【图 3】产地区分表

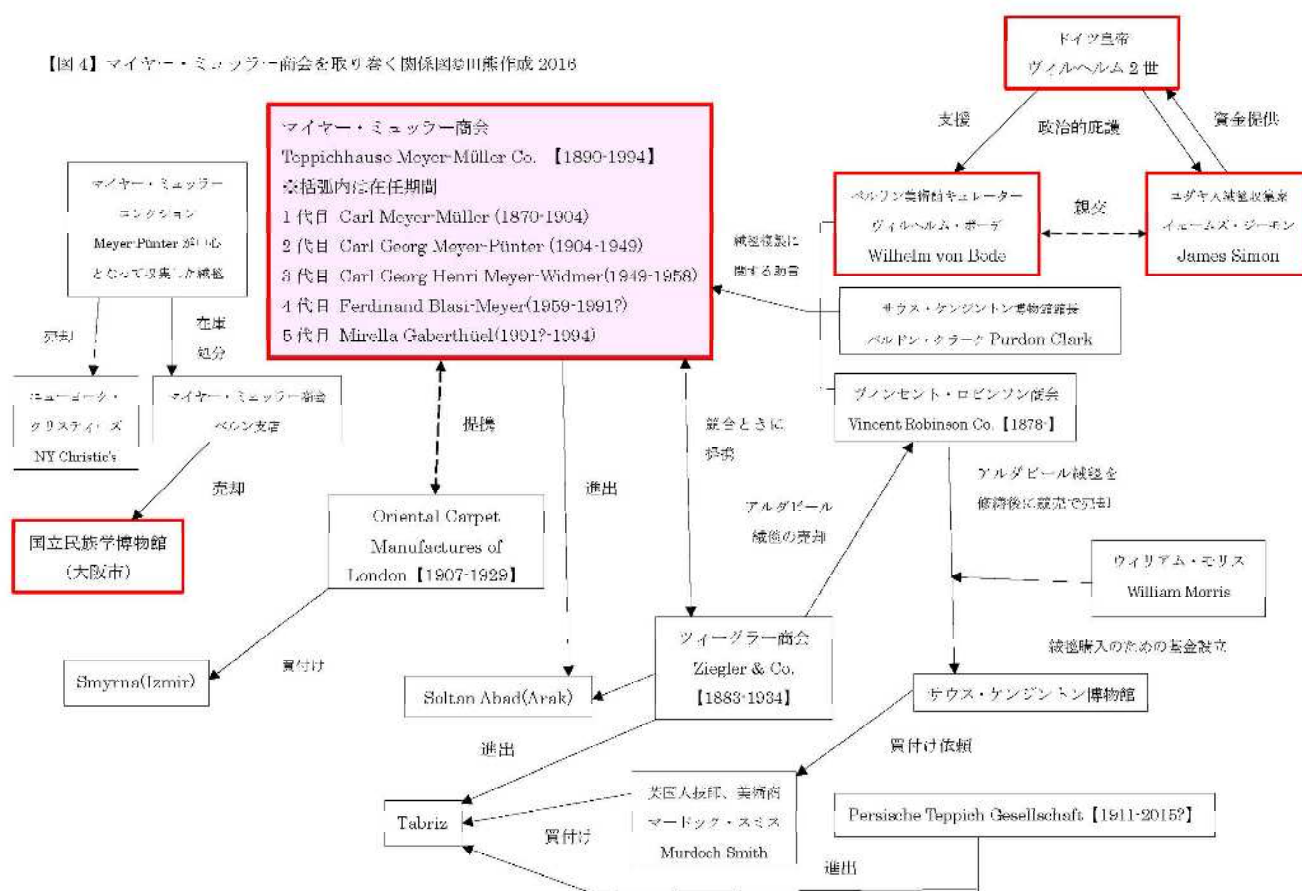
出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.

# EINTEILUNG DER ORIENTALISCHEN TEPPICHE NACH URSPRUNG UND BENENNUNG

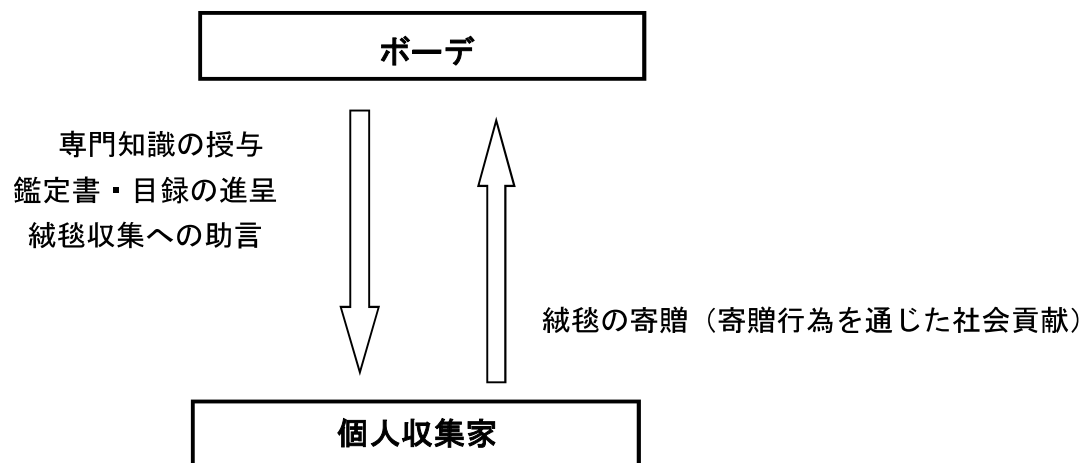
Türkische Teppiche	Persische Teppiche	Kaukasische Teppiche	Zentralasiatische Teppiche	Indische Teppiche
<p>Alayound Borlou Demirdji Djimdjim Ghiordes Hamidieh Hilofstan Joskad Ineli Kadjik Karamanie Kassaba Konja Kula Kulistan Kutabia Ladik Melas Mohair Mudjur (Gebet) Pergamos Selam Sivas Sparta Uschak</p>	<p>Azerbeidschan Bidjar Biredschend Dschucheghan Ferahian Gallerie (Kenare) Gerus Hamadan Heris Ispahan Karadagh Kaschkai Khain Khorassan Kolduk Kirmanscha Kirman Kurdistan Mesched Mir Mossoul Muskabad Sarouchan Sarouk Schiras oder Mekka Schah-Abbas Senne Senne-Kilims Serabend Sultanabad Tabris Yoraghan Zendjan</p>	<p>Baku Daghestan Derbent Kabistan Karabagh Kasak Kendje Kuba Kodschan Lesghi Schedé Schirwan Silé Sunak Talisch Verné</p>	<p>Afghanistan Beludjistan Beschir Bitlis Bochara Herat Katschlou Khuiva Kysyl-Ajak Samar kand Tschirpai Yomud</p>	<p>Agra Ak-schehr Amritsar Calcutta Haidamur Hakkar Hazzar Hossu Jaipur Junna Kaschmir Lahore Malabar Masulipatam Mirzapore Numadaho</p>

Ferner existieren im Handel: □  
 Syrische, bosnische, bulgarische,  
 rumänische, serbische, griechische,  
 chinesische, japanische, marokka-  
 nische, tünisinische, ebenfalls per  
 Hausindustrie und auf Handweb-  
 stühlen erzeugte Teppiche. □

【図4】マイヤー・ミッスラー商会を取り巻く関係図 田熊作成 2016

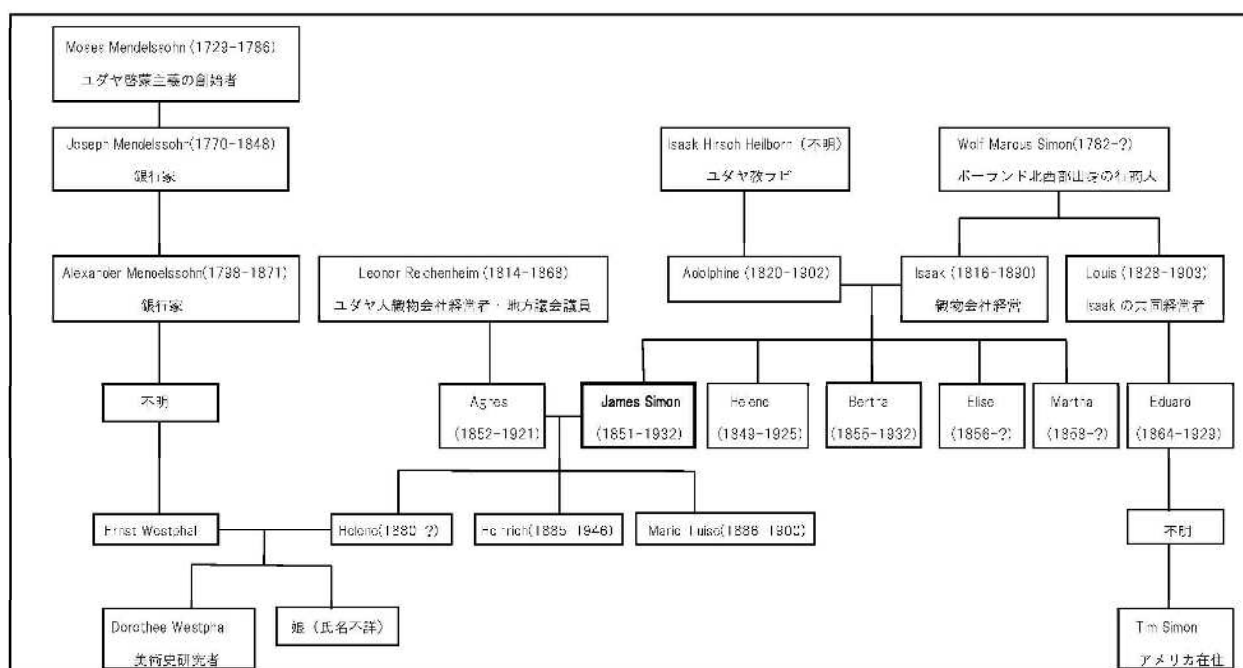


【図 5】 ボーデと個人収集家の関係図式 ©田熊作成2016





【図6】 ジーモン家の家系図



Matthes, Olaf, 2000, *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter* および Matthes, Olaf, 2011, *James Simon: Die Kunst des Sinnvollen Lebens* を基に筆者作成。

【図 7】 億万長者の図（1912 年頃）

Rudolf Martins による風刺画。中央に描かれたイエームズ・ジーモンは、ベルリン美術館等の事業に総額 1,000 万マルクを寄贈したと説明されている。中央部右手はオスマン帝国などに武器を輸出したクルップ商会、下段左手はユダヤ人銀行家のメンデルスゾーン家である。

出典：Matthes, Olaf, 2000, James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter.



【図8】 皇帝ヴィルヘルム 2 世に資金提供するユダヤ人達 （1911～1912年頃）

王座に座した人物が皇帝ヴィルヘルム 2 世。中央より順に、イエームズ・ジーモン、エドワード・アーノルド、レオポルド・コッペルが描かれている。

出典：Matthes, Olaf, 2000, *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter* .





国立民族学博物館で杉村棟氏が収集した絨毯

【表1】 標本名一覧

(標本名は国立民族学博物館の標本資料収集カードの表記に従った。)

標本名	点数
ショール	2
スプーン収納用袋、スプーン入れ袋	3
テーブルクロス	1
テント装飾用帯	3
テント装飾布、テント用飾り布	4
バン包み布	1
ベルト	1
マット	3
モスク用壁掛	1
ゆりかご用布	1
らくだ用鞍掛け	1
らくだ用鞍袋	1
ラクダ用胸飾り	1
らくだ用飾り布	3
ロバ用鞍袋	2
鞍掛け	1
鞍袋	15
鞍敷	5
衣裳入れ袋、衣服入れ用袋	2
衣裳製作用生地	3
壇入れ袋	1
化粧瓶用飾り	4
掛け布	2
掛け布団	1
肩下げ袋	3
腰帯	4
婚礼用壁掛け	1
収納袋	16
女性用ズボン	1
女性用上衣	6
女性用長衣	2
女性用頭被い布	2
上衣	1

標本名	点数
飾り布	2
寝具入れ袋	3
垂れ幕	1
装飾用帯	1
男性用腰帯	2
男性用上衣	1
貯蔵用袋	3
綴織	1
動物用胸飾り	1
動物用帯	1
鏡つかみ	1
馬用鞍掛け	2
馬用胸飾り	2
馬用首輪	1
馬用装飾布	3
布地	5
敷物	7
敷物（綴織）	7
敷物（綴織）文様見本）	1
敷物（絨織）	31
壁掛け	22
壁掛け用小型鏡	1
包み布	1
屏飾り	1
礼拝用敷物	1
礼拝用敷物（綴織）	1
礼拝用敷物（壁掛）	3
礼拝用敷物（絨織）	1
絨織織り用緯打ち具	1
絨織織り用経打ち具	1
絨織織り用原毛	2
絨織織り用色糸	18
合計	227

【表2】 製作地別

(標本名は国立民族学博物館の標本資料収集カードの表記に従った。)

製作地		点数
アゼルバイジャン共和国		1
アフガニスタン共和国		1
イラク共和国		1
イラン回教共和国		55
エジプト・アラブ共和国		1
シリア・アラブ共和国		13
ソビエト社会主義共和国連邦	ウズベク共和国	14
	カザフ共和国	2
	タジク共和国	2
	キルギス共和国	3
	ウクライナ共和国	2
	トルクメン共和国	24
	ダゲスタン自治共和国	3
	Adyge自治州Maikop市周辺	1
	アゼルバイジャン共和国	2
トルクメニスタン		7
トルコ共和国		82
ウズベキスタンからトルクメニスタンにかけて		1
ロシア連邦コーカサス		2
ロシア連邦タゲスタン共和国		1
中央アジア（ロシア製）		1
中央アジア		2
不明		6
合計		227

【表3】 収集年月別

収集年月	点数
1979年11月	15
1986年7月	80
1989年10月～11月	53
1992年8月	79
合計	227

【表 4】国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯一覧

国立民族学博物館の標本資料目録データベースの情報に基づいて筆者作成。

絨毯証明書の 番号	標本番号	標本名	製作地	寸法(cm)	素材	取得年	取得価格（当時）	ミュッラー社の覆札の 記載事項
—	II0186126	ちくだ月巻袋	イラン国教共和国	286×106	羊毛？	1992 年 8 月	非公算	—
No.59	II0186127	ラング装飾用帯	イラン国教共和国	38×1599	羊毛？	1992 年 8 月	非公算	100006 Yomuth Band 16×35 201813 Hubschmid
No.60	II0186128	敷敷	トルクメニスタン	133×119	羊毛？	—	非公算	202520
No.62	II0186130	塩入れ袋	イラン国教共和国東部	(55×52) 底面に貼着し、 絨毯証明書の記載 に基づく	羊毛？	—	非公算	—
No.63	II0186131	敷掛け	トルクメニスタン	60×43	羊毛？	—	非公算	—
No.64	II0186132	壁掛け	トルクメニスタン	78.5×131	羊毛	1992 年 8 月	非公算	1153.05 43
No.65	II0186133	敷物	トルコ共和国西アナトリア地方	149.5×249	羊毛	1992 年 8 月	非公算	—
No.66	II0186134	敷物（絨毯）	ウズベキスタン共和国	379×145	羊毛	1992 年 8 月	非公算	3908 201727
No.67	II0186135	敷物（絨毯）	トルクメニスタン	400×214.5	羊毛	1992 年 8 月	非公算	5634 144 201976

【表 5】マイヤー・ミュッラー氏の絨毯コレクション目録①

出典：Carl, Meyer-Pünter, 1917, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel*.

Die Teppiche der Sammlung des Herrn Meyer-Müller, sen.	
	Seite
Uebersicht . . . . .	28—32
<b>A. Persische Teppiche im engern Sinne.</b>	
Vorbemerkung . . . . .	33
Chorassan 5605 . . . . .	34
Chorassan 3880 . . . . .	35
Ferahan 5550 . . . . .	36
Ferahan 5939 . . . . .	37
Goltuck 5533 . . . . .	38
Goltuck 6733 . . . . .	39
Ispahan 7325/4 . . . . .	40
Seidenfragment	
Kafaroff 2/7323 . . . . .	41
Ispahan, antik 3/7324 . . . . .	42
Kirman-Laver 7253 . . . . .	43
Mossoul 5848 . . . . .	44
Senneh 8084 . . . . .	45
Schiras 6656 . . . . .	46
Senneh-Kelim 4001 . . . . .	47
Seiden-Gebet- Teppich 1/7322 . . . . .	48
<b>B. Centralasiatische Tep- piche (Turkestan).</b>	
Vorbemerkung . . . . .	49
Afghan 5730 . . . . .	50
Belutschistan 6928 . . . . .	51
Beschir 4158 . . . . .	52
Beschir 5696 . . . . .	53
Beschir 3992 . . . . .	54
Chatschlou- Kerki 3974 . . . . .	55
Kaschgari- chinois 4301 . . . . .	56
Yamuth-Kerki 3969 . . . . .	57
Yamuth 6738 . . . . .	58
Yamuth 5010 . . . . .	59
Bodhara 7887 . . . . .	60
<b>C. Kaukasische Teppiche.</b>	
Vorbemerkung . . . . .	61
Chile-Baku 4428 . . . . .	62
Derbent 4989 . . . . .	63
Kabistan 4000 . . . . .	64
Kasak 5517 . . . . .	65
Kuba 5433 . . . . .	66
Soumak 7024 . . . . .	67
<b>D. Asiatische Türkei.</b>	
Vorbemerkung . . . . .	68—69
Kula-Gebet 5689 . . . . .	70
Ladyk-Gebet	
Kolon.-Tepp. 8085 . . . . .	71
Bergamos 3738 . . . . .	72
Yürük- Bergamos 3982 . . . . .	73
Yürük-Anatol 5145 . . . . .	74
Ushak, antik 7279 . . . . .	75—76
<b>E. Neuzeitliche Perser- Teppiche.</b>	
Vorbemerkung . . . . .	77
Täbris 4244 . . . . .	78
Joraghan 5859 . . . . .	79
Extra Mesched 5910 . . . . .	80
Kirman 7298 . . . . .	81
Mahal 7974 . . . . .	82
Keschan- Karawane 8109 . . . . .	83
Keschan 6962 . . . . .	84

【表 5】マイヤー・ミュッラー氏の絨毯コレクション目録②

出典：Carl, Meyer-Pünter, 1917, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel*.

赤の下線部は筆者によるものである。

Uebersicht.	
Abgebildete Teppiche.	Sammlung C. Meyer-Müller, wovon keine Bilder.
<b>Afghan.</b> No. 5730      226×337 cm.	<b>Afghan.</b> No. 6268      340×210 cm. » 7621      228×325 » » 7626      268×363 » » 3979      110×140 » » 7634      230×280 »
<b>Bagdad.</b>	<b>Bagdad.</b> No. 4269      183×465 cm.
<b>Belutschistan</b> No. 6928      145×225 cm.	<b>Belutschistan.</b> No. 5905      103×143 cm.
<b>Bergamo.</b> No. 3738      168×208 cm.	<b>Bergamo.</b> No. 5771      187×235 cm. » 3983      128×164 »
<b>Beschr.</b> No. 5696      212×415 cm. » 3992      172×370 » » 4158      198×385 »	<b>Beschr.</b> No. 5417      169×470 cm. » 4857      153×220 » » 3877      147×332 » » 7614      173×330 » » 3975      175×358 » » 3989      138×268 » » 3643      142×197 » » 4290      260×650 » » <u>5634</u> <u>214×410</u> » » 4289      252×575 » » 5633      214×450 » » 3878      236×420 » » 4300      170×290 » » 3883      180×380 »
<b>Bochara.</b> No. 7887      190×300 cm.	<b>Bochara.</b> No. 7887      190×300 cm. » 3976      85×135 »
<b>Chatschlou-Kerki.</b> No. 3974      170×200 cm.	<b>Chatschlou-Kerki.</b>
<b>Chile-Baku.</b> No. 4428      154×364 cm.	<b>Chile-Baku.</b> No. 3991      155×375 cm.
<b>Chorassan.</b> No. 3880      196×303 cm. » 5605      111×186 »	<b>Chorassan.</b> No. 5896      197×380 cm. » 4247      140×285 »



【表 5】マイヤー・ミュッラー氏の絨毯コレクション目録③

出典：Carl, Meyer-Pünter, 1917, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel* .

Abgebildete Teppiche.	Sammlung C. Meyer-Müller, wovon keine Bilder.
<b>Derbent.</b> No. 4989 162×293 cm.	<b>Derbent.</b>
<b>Ferahan.</b> No. 5550 117×190 cm. » 5939 120×205 »	<b>Ferahan.</b> No. 6732 161×335 cm. » 5864 131×193 » » 5609 172×375 » » 6734 200×500 » » 5610 193×393 »
<b>Galerie.</b>	<b>Galerie.</b> No. 5937 94×420 cm. » 5938 94×420 »
<b>Goltuck.</b> No. 5533 127×230 cm. » 6733 150×292 »	<b>Goltuck.</b> No. 5532 100×173 cm. » 5867 130×233 » » 5607 128×218 » » 7969 93×270 » » 5565 92×340 » » 5608 143×290 » » 5780 136×302 »
<b>Hamedan.</b>	<b>Hamedan.</b> No. 5578 95×493 cm. » 5551 133×227 » » 3985 124×225 »
<b>Herat.</b>	<b>Herat.</b> No. 3986 150×340 cm.
<b>Ispahan.</b> No. 7323/2 (Seida) 34×35 cm. » 7324/3 (Fragm.) 106×158 » » 7325/4 202×276 « » 7322/1 (Seident.) 96×139 »	<b>Ispahan.</b>
<b>Kabistan.</b> No. 4000 115×320 cm.	<b>Kabistan.</b> No. 5563 107×303 cm. » 4003 140×280 » » 5597 110×268 » » 5548 113×270 » » 3499 129×185 » » 5534 166×350 » » 3987 135×255 » » 5599 81×158 » » 4357 102×240 »

【表 5】マイヤー・ミュッラー氏の絨毯コレクション目録④

出典：Carl, Meyer-Pünter, 1917, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel*.

Abgebildete Teppiche.	Sammlung C. Meyer-Müller, wovon keine Bilder.
	Kabistan Fortsetzung.
	No. 5601 96×138 cm.
	» 5598 116×215 »
	» 5602 120×287 »
<b>Karabagh.</b>	<b>Karabagh.</b>
	No. 3980 110×255 cm.
	» 4433 140×380 »
	» 5207 100×142 »
<b>Kars (Bergamos).</b>	<b>Kars (Bergamos).</b>
	No 5203 120×145 cm.
<b>Kasak.</b> No. 5517 161×235 cm.	<b>Kasak.</b> No. 3973 140×247 cm.
	» 6915 128×204 »
	» 5210 88×145 »
<b>Kaschan (Seidenteppich).</b> Karawane am Brunnen. No. 8109 158×200 cm.	<b>Kaschan (Seidenteppich).</b>
<b>Kaschgar-Chinois.</b> Samarkand. No. 4301 188×381 cm.	<b>Kaschgar-Chinois.</b>
<b>Kerki-Fenster-teppich</b> oder Yamuth-Chatschlou.	<b>Kerki-Fenster-teppich</b> oder Yamuth-Chatschlou.
	No. 4859 181×200 cm.
	» 3994 137×200 »
	» 4848 165×273 »
	» 3663 150×208 »
	» 4343 133×178 »
	» 4861 145×180 »
	» 3970 137×200 »
	» 4852 150×198 »
	» 3978 148×207 »
	» 3990 154×215 »
<b>Kuba.</b> No. 5433 135×182 cm.	<b>Kuba.</b>
<b>Kula-Gebet.</b> No. 5689 127×200 cm.	<b>Kula-Gebet.</b>
<b>Ladyk-Gebet.</b> No. 8085 141×215 cm.	<b>Ladyk-Gebet.</b> No. 4410 118×172 cm.



【表 5】マイヤー・ミュラー氏の絨毯コレクション目録⑤

出典：Carl, Meyer-Pünter, 1917, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel* .

赤の下線部は筆者によるものである。

Abgebildete Teppiche.	Sammlung C. Meyer-Müller, wovon keine Bilder.
<b>Laver-Kirman.</b> No. 7253            230×300 cm.	<b>Laver-Kirman.</b> No. 5868            154×228 cm. » 7254            217×290 »
<b>Extra-Mesched.</b> No. 5910            133×183 cm.	<b>Extra-Mesched.</b>
<b>Mir-Serabend.</b>	<b>Mir-Serabend.</b> No. 6744            202×490 cm. » 5934            255×580 »
<b>Mir-Satteltasche.</b>	<b>Mir-Satteltasche.</b> No. 7907/8            53×70 cm.
<b>Mossoul.</b> No. 5848            92×220 cm.	<b>Mossoul.</b>
<b>Moughan-Gebet.</b>	<b>Moughan-Gebet.</b> No. 5126            90×180 cm.
<b>Pamyr-Kirgise.</b>	<b>Pamyr-Kirgise.</b> No. 3908            140×386 cm.
<b>Pendik.</b>	<b>Pendik.</b> No. 3453            200×293 cm.
<b>Samarkand.</b>	<b>Samarkand.</b> No. 7506            96×357 cm. » 3545            180×375 » » 3993            188×381 »
<b>Sarouch.</b>	<b>Sarouch.</b> No. 7027            135×195 cm.
<b>Senneh.</b> No. 8084            131×187 cm. » 4001 (Kelim) 130×190 cm.	<b>Senneh.</b> No. 5873            137×190 cm. » 3919            142×200 » » 5904            230×360 » » 7020            128×190 » » 6750            100×100 » » 5908 (Sattel) 88× 97 » » 5606            127×200 »
<b>Serabend.</b>	<b>Serabend.</b> No. 5626            178×396 cm. » 5562            100×255 »

【表 5】マイヤー・ミュッラー氏の絨毯コレクション目録⑥

出典：Carl, Meyer-Pünter, 1917, *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe und Handel* .

Abgebildete Teppiche.	Sammlung C. Meyer-Müller, wovon keine Bilder.
<b>Soumak.</b> No. 7024      148×172 cm.	<b>Soumak.</b> No. 6729      235×325 cm. » 3998      114×264 » » 3915      236×288 »
<b>Sultanabað.</b>	<b>Sultanabad.</b> No. 5919      212×353 cm.
<b>Schiras.</b> No. 6656      158×280 cm.	<b>Schiras.</b> No. 6633      121×145 cm. » 6623      128×193 » » 5560      130×233 » » 5777      120×160 » » 3977      183×335 » » 5692      116×162 » » 6619      110×172 » » 5558      183×335 » » 6632      133×194 »
<b>Schirwahan.</b> No. 3995      135×300 cm. (Konsulatszimmer)	<b>Schirwahan.</b> No. 5604      124×272 cm. » 7960      96×290 » » 5600 (Gebet) 86×160 » » 5555      93×132 «
<b>Täbris.</b>	<b>Täbris</b> No. 5861      135×188 cm.
<b>Tschitschi</b>	<b>Tschitschi</b> No. 5595      126×155 cm.
<b>Uschak antik.</b> No. 7279      200×440 cm.	<b>Uschak antik.</b>
<b>Yamuth-Fenster-teppich.</b> No. 3969      141×180 cm.	<b>Yamuth-Fenster-teppich.</b> No. 4899      126×170 cm. » 4896      144×175 »
<b>Yamuth.</b> No. 6738      238×415 cm. » 5010      178×265 »	<b>Yamuth.</b>
<b>Yürük-Anatol.</b> No. 5145      105×158 cm.	<b>Yürük-Anatol.</b>
<b>Yürük-Bergamos.</b> No. 3982      121×230 cm.	<b>Yürük-Bergamos.</b>



【表6】 ベルリン・イスラーム美術館の寄進者

Edith Aeschbacher-Bruns
Wilhelm von Bode
Alfred und Eva Cassirer
Karl Willibald von Dirksen
Arthur Francke
Theodor Glücksmann
Jakob Goldschmidt
Guido Graf Henckel Fürst von Donnersmarck
E. Heinrich Kirchheim
Said Motamed
Friedrich Graf von Pourtalès
Friedrich und Maria Sarre
Eduard Simon
Elise Wentzel-Heckman
Theodor Wiegand
Kaiser Wilhelm II. König von Preußen
Hans Graf von Wilczek

Kröger, Jens und Heiden, Désirée, 2004, *Islamische Kunst in Berliner Sammlungen: 100 Jahre Museum für Islamische Kunst in Berlin*. を基に筆者作成。

【表7】イエームズ・ジーモンが関与した社会慈善活動と東欧ユダヤ人難民の支援

名称	ドイツ語記号	Der Verein für Volksunterhaltung	Der Verein für Kinderkolonien	Verein zur Schule der Kinderwerkbeschädigten und Auszubildung	Der Hilfsverein der Deutschen Juden	Zentralverein für Schülerwanderungen
	英語訳	Society for Public Entertainment	Children's Vacation Camp Association	Protection Agency against Child Abuse and Exploitation	Aid Association of German Jews	Central Association for Student Hikes
設立年	1901年	1878年（イエームズは1890年から支援開始）	1899年	1901年	1906年	1906年
活動地区	ベルリン	ベルリン	ベルリン	ベルリンおよびドイツ全土（ポーランド北東部）	ベルリン、ドレスデン	ベルリンおよびドイツ全土（バルト海の島）
支援対象	労働者階級中心	貧窮家庭中の児童	虐待を受けた児童	暴行を受けたユダヤ人難民	貧困からのユダヤ人難民で、アメリカやパレスチナへ亡命を希望する者	貧困階級の児童
目的	若者と家長の親会（一部未婚労働者階級を含む）に開放した。	ベルリンの労働者階級の児童向けに夏休キャンプを開設した。	虐待の被害に遭った児童を保護し、救済を支援した。	学校と商店に居住するユダヤ人の市民権承認への支援、ユダヤ人の教育機会の整備と支援。	見られない境遇の児童向けに児童遊園地を開設した。	
イエームズの貢献	1907-1904年市長選	児童学校（皇帝フリード）と夫妻の夏の別荘333への家財の寄贈、内装工事の支援、近隣住民の移住を行った。ベッド数を50から100に増やした。	Frang von Mendelssohnと共同でベルリンの保護施設の運営費を負担。イエームズ個人は1915年から1917年の間に100万マルクを寄付した。	ハイファの科学技術のための研究教育機関（サイオン）に10万マルクを寄付した。	協会設立後の1905年から学童遊園地を企画、元徴してきた。1906-1915年会長職。	
活動実績	ユダヤ人の文化的な象徴であったベルリン・グロッセ・ポーターの近隣地区に博物館を設立。三立劇場、ドイツ・リンド劇場、ベルリン美術展覧会と提携を組んだ。	毎年夏の休暇にベルリンの初等学校の児童約100名を受け入れた。	①ベルリンで児童福祉施設Hans Kirschschildを運営②ポーランド東部からポーランド北東部（シロコフ）（Belostok）に飢民救済所を設立。	1914年までに20万人のユダヤ人を支援。1901年から1918年の間に約4,700万マルクの寄付を収めた。パレスチナの移民を促すための教育機関を設置し、3,000名の子供に教育の機会を提供した。	1900年から1931年までに13万5,000名の児童が参加した。皇帝グロッセ・ポーターに市民権を認め、バルト海のフリードリヒ（Usedom）にユダヤ人Kaiser Wilhelm Kinderheimを開設した。	
結果		Berlin Verein für häusliche Gesundheitspflegeの創立、Association for Domestic Health Careから20年した組織。		第一次大戦後、ハイファのサイオンをシオニストに売却。イエームズは近隣から退いた。		

Schulze, Bernd 2007. *James Simon, Philanthrop und Rassenkennner*. を編に参考文献。

【表8】 DOGへの資金提供金額（1897～1914年） 単位：マルク

	皇帝ヴィルヘルム2世	イエームズ・ジーモン
1897年	記載なし	25000
1898年	20000	4000
1899年	15000	1000(年会費)
1900年	15000	1000(年会費)
1901年	15000	15000
1902年	40000	50000
1903年	65000	60000
1904年	30000	40128,3
1905年	15000	28000
1906年	15000	2051
1907年	20000	62700
1908年	15000	27000
1909年	20000	25000
1910年	20000	1000(年会費)
1911年	20000	40000
1912年	25000	30000
1913年	25000	30000
1914年	40000	30000
合計	415000	471879,3

Matthes, Olaf, 2000, *James Simon: Mäzen im Wilhelmischen Zeitalter* を基に筆者作成。

【表9】 イェームズ・ジーモンが支援した発掘調査（1894～1914年）

	時期	主催者	発掘場所	備考
1894年		Orient-Komitee	Sendschirdi	
1897年				
1898年	1897年10月～1898年5月	E. Sachau, R. Koldewey	Babylon	
1902年	1902年1月～5月	DOG	Abusir el Rirah, Egypt	
	1902年7月～1903年5月	DOG	Fara, Mesopotamien	
1903年	1903年1月～5月	DOG	Abusir el Rirah, Egypt	
	1903年4月～8月	DOG	Palästina	
1904年	1904年1月～5月	DOG	Abusir el Rirah, Egypt	
	1905年5月～7月	DOG	Galiläa(Synagogen)	
1905年	1905年8月～10月	DOG	Abusir el Melek	
	1907年1月	DOG	Tell el-Amarna, Egypt	
1907年	1907年1月～7月	DOG	Abusir el Rirah, Egypt	
	1907年9月～11月	DOG	Galiläa(Synagogen)	
	1907年7月～1908年5月	DOG	Abusir el Rirah, Egypt	
1908年	1908年1月～4月	DOG	Jericho	
	1908年2月	DOG	Tell el-Amarna, Egypt	
1909年	1909年1月～4月	DOG	Jericho	
1911年	1911年1月～4月	DOG	Tell el-Amarna, Egypt	
	1911年11月～1912年5月	DOG	Tell el-Amarna, Egypt	
1912年	1912年11月～1913年5月	DOG	Tell el-Amarna, Egypt	1912年12月6日に「ネフェルティティ王妃の胸像」を発掘した。
1913年	1913年11月～1914年5月	DOG	Tell el-Amarna, Egypt	
1914年				

Schultz, Bernd. 2007. *James Simon: Philanthrop und Kunstsammler*. 邦基に筆者作成。

【表10】 イェームズ・ジーモンによるベルリン美術館への寄贈数（1885～1920年）

	古代近東博物館	古代エジプト博物館
1885年	1	0
1888年	0	4
1890年	1	0
1893年	0	1
1895年	0	1
1897年	0	0
1898年	2	0
1899年	3	1
1900年	10	0
1901年	2	33
1902年	52	0
1903年	468	0
1904年	23	0
1905年	75	0
1906年	8	1
1907年	255	1
1908年	0	0
1909年	1	0
1910年	146	0
1911年	0	7
1912年	0	0
1913年	0	1036
1914年	0	0
1920年	0	67
合計	1047	1152

Berlin Museen, *Inventarbüchern der Vorderasiatischen Abteilung.*,  
 Berlin Museen, *Inventarbüchern der Ägyptischen Abteilung.* を基に筆者作成。

【表11】 皇帝の側近を務めたユダヤ人メンバー（カイザー・ユーデン）

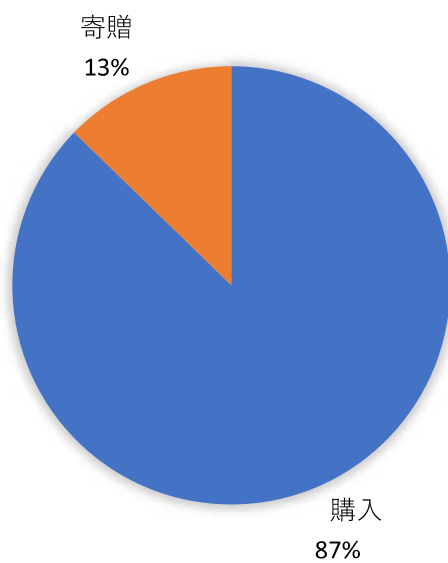
第1グループ	
1	Eduward Arnhold（1849～1925年）
2	Albert Ballin（1857～1918年）
3	James Simon（1851～1932年）
4	Carl Fürstenberg（1850～1933年）
5	Paul von Schwabach（1867～1938年）
6	Emil von Schwabach（詳細不明）
7	Walther Rathenau（1867～1922年）

第2グループ	
1	Fritz von Friedlaender-Fuld（1858～1917年）
2	Max. M. Warburg（1867～1947年）
3	Georg Solmssen（1869～1957年）
4	Whilhelm Hertz（1835～1902年）
5	Max Steinthal（1850～1940年）
6	Maximilian Kempner（1854～1927年）
7	Heinrich Grünfeld（1855～1931年）
8	Benjamin Liebermann（1812～1901年）
9	Isidor Loewe（1948～1910年）
10	Bernhard Dernburg（1865～1937年）
11	Ernst von Mendelssohn-Bartholdy（1846～1909年）

ユダヤ人以外の親交グループ	
1	Adolf von Harnack（1851～1930年）
2	Wilhelm von Bode（1845～1929年）
3	Theodor Wiegand（1864～1936年）

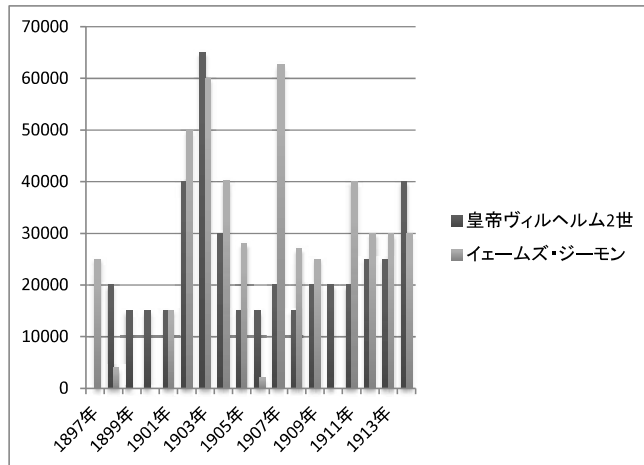
Matthes, Olaf, 2000, *James Simon: M ä zen im Wilhelminischen Zeitalter*. を基に筆者作成。

【グラフ1】 ベルリン・イスラーム美術館所蔵絨毯の内訳



Spuhler, Friedrich. ed. 1988, *Oriental carpets in Museum of Islamic art, Berlin*. を基に筆者作成。

【グラフ2】 DOGへの資金提供金額（1897～1914年） 単位：マルク



Matthes, Olaf, 2000, *James Simon: Mäzen im Wilhelmschen Zeitalter* を基に筆者作成。



【地図 1】 イランの地図

出典：杉村棟監修『特別展 ペルシャ絨毯の世界図録』

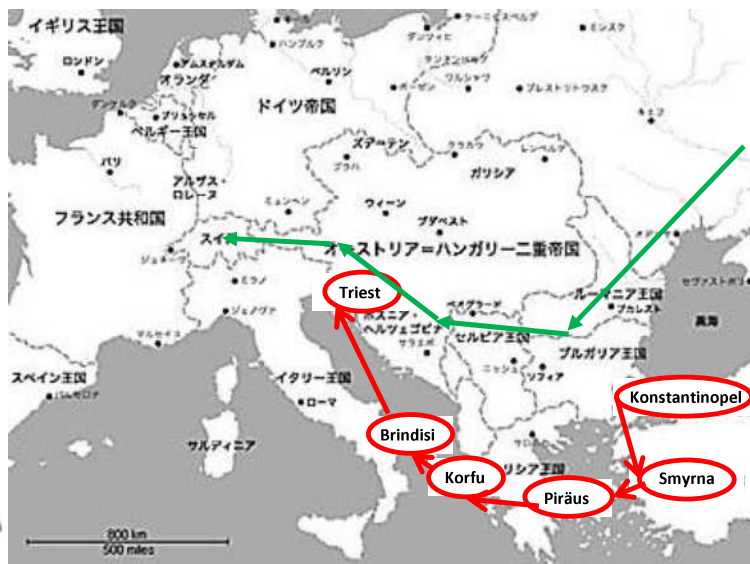
イラン地図



【地図2】 オリエントの絨毯の流通経路

写真の出典: Meyer-Müller, 1904, *Der orientalische Teppich*.

- ◆1900年代初頭の絨毯の買付け経路（赤色の矢印） Konstantinopel～Smyrna～Piräus～Korfu～Brindisi～Triest
- ◆1980年代の絨毯買付け経路（緑色の矢印） テヘラン～トルコ～旧ユーゴスラヴィア～イタリア～スイス



“我々は、いわゆるスミルナ産絨毯(Smyrna-Teppich)を大量に買い付け、その大部分をオリエントの絨毯(Orient-Teppich)として記載する”

*Der orientalische Teppich*, 1904, S.29.



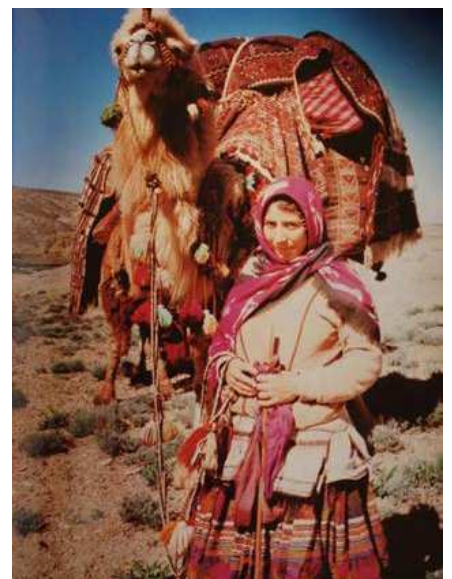
【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯

① H0186126 らくだ用鞍袋

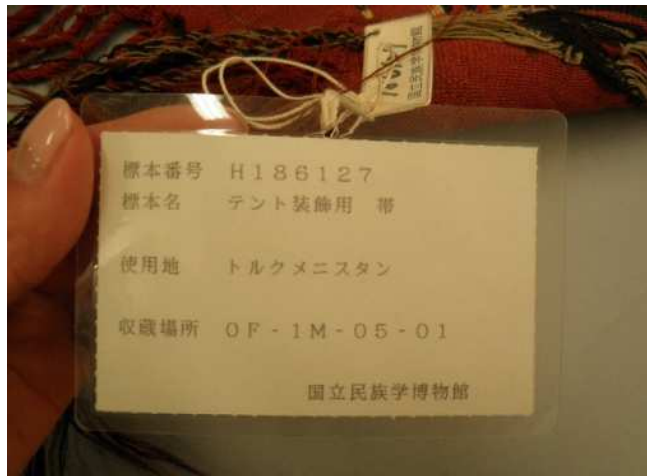


らくだ用鞍袋の実例→

出典：手織絨毯協会編. 1986『ペルシア絨毯図鑑』



【写真1】国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
② H0186127 テント装飾用帯





【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
③ H0186128 鞍敷





【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
④ H0186130 塩入れ袋



【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
⑤ H0186131 鞍掛け





【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
⑥ H0186132 壁掛け





【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
⑦ H0186133 敷物



【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
⑧ H0186134 敷物（絨緞）





【写真1】 国立民族学博物館所蔵マイヤー・ミュッラー商会絨毯  
⑨ H0186135 敷物（絨緞）





【写真 2】絨毯織りの種類

出典：杉村棟. 1994. 『絨毯—シルクロードの華』

◆水平機（すいへいばた）による絨毯織り（イラン・カシュガーイ族）



◆縦機による絨毯織り（トルコの村）



【写真 3】 現存する世界最古のパジリク絨毯（B.C.5 世紀、パジリク）

〈左〉 発掘されたパジリク絨毯 エルミタージュ美術館所蔵

出典：Seyf, Hadī. 2005. *Majnoonihā: Yādvār-e dūdeman-e tarrāh ve qālībāf-e diyār-e Esfahān*

〈右〉 復元されたパジリク絨毯

（2012 年 9 月 23 日、イラン・イスラム共和国テヘラン市の国立絨毯博物館にて筆者撮影）



【写真 4】 現存する世界最古のパジリク絨毯に描かれたモチーフ

出典：Seyf, Hadī. 2005. *Majnoonihā: Yādvār-e dūdeman-e tarrāh ve qālībāf-e diyār-e Esfahān*.





【写真5】フラ・リッポ・リヒ「聖母の戴冠」(1441～1445年頃)  
ウフィツィ美術館(フィレンツェ)

中央部のマリアの手元に掲げられた布の縁にアラビア語の文様がみられる。

<http://artfans.jp/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%9D%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%94/>

(2017年3月17日閲覧)



【写真6】ハンス・ホルバイン「大使たち」(1533年)  
ロンドン・ナショナルギャラリー(ロンドン)

出典：[http://www.salvastyle.com/menu\\_renaissance/holbein\\_gesandten.html](http://www.salvastyle.com/menu_renaissance/holbein_gesandten.html)

(2013年1月26日閲覧)



【写真7】ロレンツォ・ロット「聖アントニヌスの施し」(1542年)  
サンティッシミ・ジョヴァンニ・エ・パオロ教会(ヴェネツィア)

<http://blog.livedoor.jp/cucciola1007/archives/4333193.html>

(2017年3月17日閲覧)



【写真8】ヨハネス・フェルメール「眠る女」(1657年)  
メトロポリタン美術館所蔵(ニューヨーク)

出典：[http://www.salvastyle.com/menu\\_baroque/vermeer\\_slapend.html](http://www.salvastyle.com/menu_baroque/vermeer_slapend.html)

(2013年1月26日閲覧)





【写真 9】 アルダビール絨毯（1539～1540 年頃製作。イラン・アルダビール）

出典： <http://collections.vam.ac.uk/item/O54307/the-ardabil-carpet-carpet-unknown/>  
（2016 年 9 月 14 日閲覧）



【写真 10】 ビクトリア・アンド・アルバート美術館に展示されているアルダビール絨毯（ロンドン）

出典： <http://collections.vam.ac.uk/item/O54307/the-ardabil-carpet-carpet-unknown/>  
（2016 年 9 月 14 日閲覧）



【写真 11】 ハンス・ホルバイン「ヘンリー8世」(1537年頃)

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%98%E3%83%B3%E3%83%AA%E3%83%BC8%E4%B8%96\\_\(%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%E7%8E%8B\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%98%E3%83%B3%E3%83%AA%E3%83%BC8%E4%B8%96_(%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%E7%8E%8B))

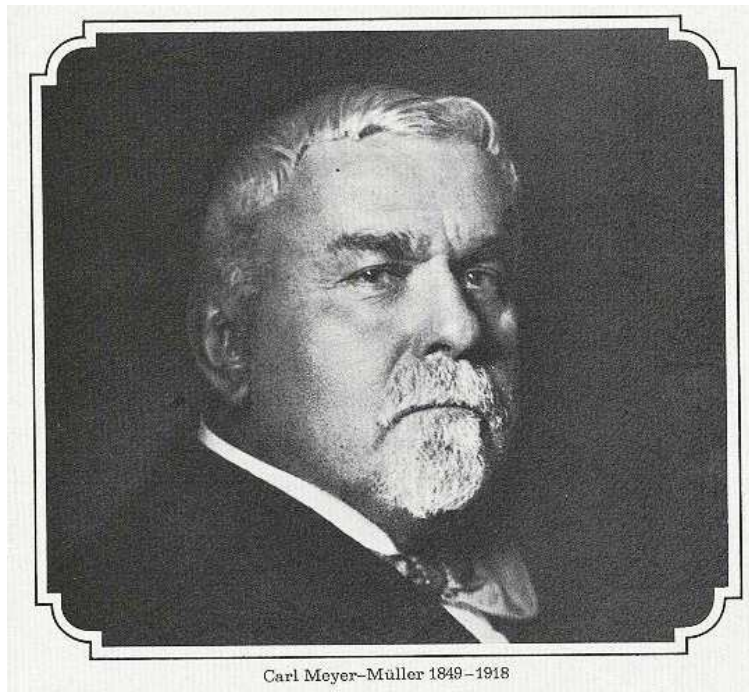
(2017年3月17日閲覧)





【写真 12】創設者カール・マイヤー・ミュッラー肖像

出典：Meyer-Müller. 1970. *100 Jahre aus dem Orient*.



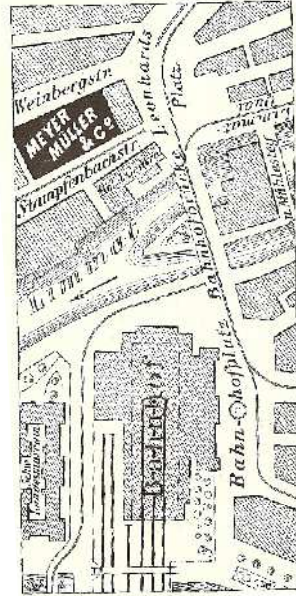
【写真 13】 チューリヒ本店（1904年、1970年、2015年）

住所：8001 Zürich, Stampfenbachstraße 6, beim Central.

1904 年頃 出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.



Geschäftshaus Zürich - Frontansicht Stampfenbachstrasse



1970 年頃 出典：Meyer-Müller. 1970. *100 Jahre aus dem Orient*.



Geschäftshaus Stampfenbachstrasse 6, Zürich

2015 年 11 月 14 日筆者撮影





【写真 14】 チューリヒ本店の内観（1904 年頃）

出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*. Bern.



Intérieur aus unsern Orientteppich-Ausstellungsräumen



Intérieur aus unsern Orientteppich-Ausstellungsräumen

【写真 15】 チューリヒ本店跡の内観（2015 年）

2015 年 11 月 14 日筆者撮影





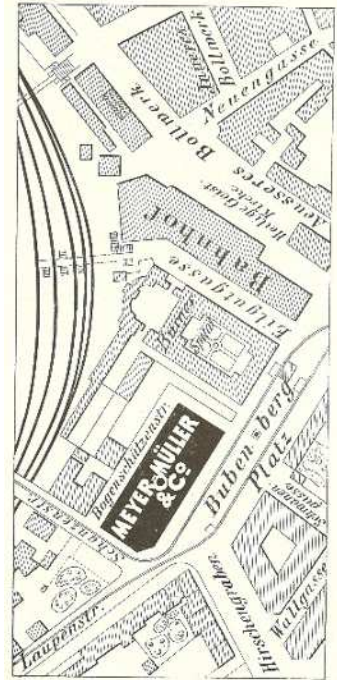
【写真 16】 ベルン支店（1904年、1970年）

住所：30001 Bern, Monbijoustraße 10.

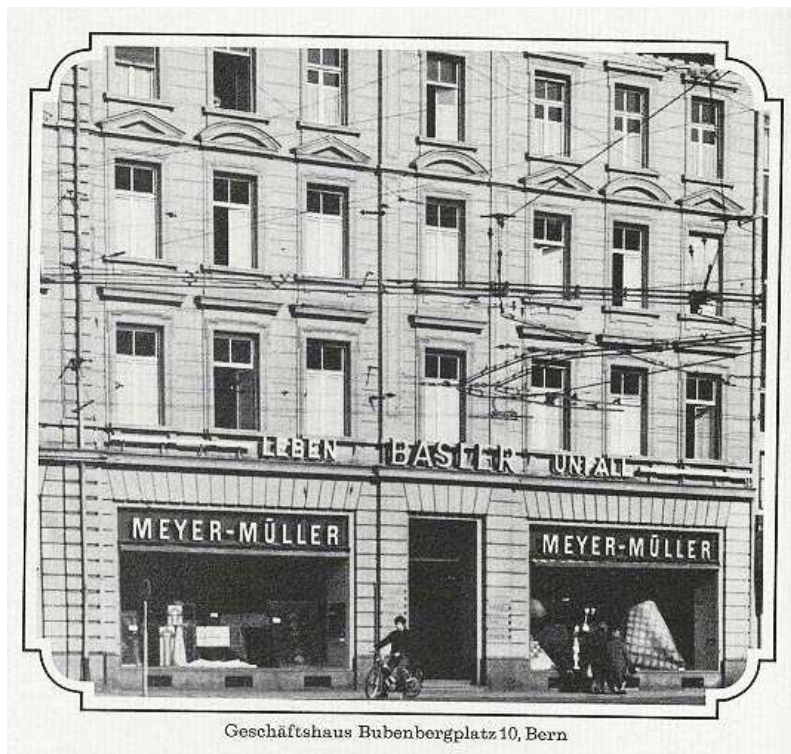
1904 年頃 出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.



Geschäftshaus in Bern, Bubenberplatz 10



1970 年頃 出典：Meyer-Müller. 1970. *100 Jahre aus dem Orient*.



Geschäftshaus Bubenberplatz 10, Bern

【写真 17】 ゲオルク・カール・マイヤー・ピュンター肖像

出典：Christie's. 1990. *Fine Oriental Rugs and Carpets including the C. Meyer-Müller Collection (Part I) and the J. P. J. Homer Collection of Beluchistan Rugs.*





【写真 18】ゾロトゥーン支店（1970年、2015年）

住所：4500 Solothurn, Hauptgasse 35.

1970 年頃 出典：Meyer-Müller. 1970. *100 Jahre aus dem Orient*.




2015 年 11 月 16 日筆者撮影





【写真 19】新聞紙に掲載されたマイヤー・ミュッラー商会の広告（1992年）  
元社員ツィーグラー氏より寄贈。1992 年掲載。掲載新聞名は不詳。

TOTAL LIQUIDATION



**MEYER MÜLLER**  
seit 1870

Unvorhergesehene Umstände zwingen das traditions-  
reiche und renommierte, über 30-jährige Teppich-  
haus MEYER-MÜLLER, Solothurn, zur definitiven  
Geschäftsaufgabe und **sofortigen**

**Total-Liquidation**

**Stopfen Sie das Januar-  
Loch mit diesen Rabatten:**  
**50%, 60%, 75%!**

**Nur 1/2 Preis!**

Ardebil, 302 x 80 cm, anstatt 2'400.-  
Ghasghai, 145 x 222 cm, anstatt 5'600.-  
Bachtiar, 259 x 154 cm, anstatt 3'900.-  
Kashmar, 305 x 202 cm, anstatt 5'800.-

**Weniger als 1/2 Preis!**

Berber, 94 x 342 cm, anstatt 1'995.-  
Ind. Herat, 347 x 95 cm, anstatt 3'000.-  
Keshan, 312 x 193 cm, anstatt 8'700.-  
Nain m. Seide 307 x 196 cm, anstatt 19'800.-  
Saruk Mir, 312 x 210 cm, anstatt 7'200.-

**Extrem: nur 1/4 Preis!**

Karadja, 65 x 166 cm, anstatt 1'900.-  
Malatya, 100 x 200 cm, anstatt 1'850.-  
Ind. Samarkand, 85 x 358 cm, anstatt 2'800.-  
Nain mit Seide, 323 x 212 cm, anstatt 22'500.-  
Samandaj, 210 x 325 cm, anstatt 6'800.-  
usw. usf.

**50%**

nur 1'200.-  
nur 2'900.-  
nur 1'950.-  
nur 2'900.-

**60%**

nur 800.-  
nur 1'200.-  
nur 3'480.-  
nur 7'900.-  
nur 2'880.-

**75%**

nur 480.-  
nur 470.-  
nur 700.-  
nur 5'650.-  
nur 1'700.-

**Alles wird sofort im Detail, ohne Nachwährschaft,  
gegen Barzahlung abgegeben.**  
Freie Besichtigung und Verkauf Dienstag-Freitag von  
9.00 bis 12.00 Uhr und von 13.00 bis 18.30 Uhr,  
Samstag von 9.00 bis 16.00 Uhr,  
**Donnerstag Abendverkauf bis 21.00 Uhr**  
Teppichhaus Meyer-Müller AG  
Hauptgasse 35, 4500 Solothurn  
Tel. 065/22 85 15  
amtl. bew. vom 30.10.92 - 30.4.93

TOTAL LIQUIDATION



【写真 20】新聞紙に掲載されたマイヤー・ミュラー商会の広告（1993年）

元社員ツィーグラー氏より寄贈。1993 年掲載。掲載新聞名は不詳。

VERANSTALTUNGENSeite 29

Teppichhaus Meyer-Müller AG, Stampfenbachstr. 6, beim Central, 8001 Zürich:

# HEUTE

R  
Ä  
U  
M  
U  
N  
G

**ORIENTTEPPICHE 33 % Rabatt** 2/3 Preis

- ◆ Bidjar extra fein 205 x 200 cm anstatt 7'950.- nur 5'300.-
- ◆ Sarab Korkwolle 292 x 201 cm anstatt 16'000.- nur 10'650.-
- ◆ Moud 247 x 200 cm anstatt 4'500.- nur 3'000.- usw.

**SEIDENTEPPICHE 50 % Rabatt** 1/2 Preis


- ◆ Hereke 98 x 78 cm, 2.56 Mio Knoten anstatt 36'500.- nur 18'250.-
- ◆ Ghom Seide 340 x 245 cm anstatt 56'000.- nur 28'000.-
- ◆ Täbriz Seide antik 157 x 123 cm anstatt 39'000.- nur 19'500.- usw.

**ALLE TIBETER 50 % Rabatt** 1/2 Preis

- ◆ Tibeter 295 x 203 cm anstatt 4'500.- nur 2'250.-
- ◆ Tibeter 309 x 250 cm anstatt 6'100.- nur 3'050.-
- ◆ Tibeter 235 x 167 cm anstatt 2'900.- nur 1'450.- usw.

**VIELE TEPPICHE 66 % Rabatt** 1/3 Preis

- ◆ Keschan 428 x 302 cm anstatt 18'500.- nur 6'160.-
- ◆ Kirman Lawer 401 x 298 cm anstatt 16'800.- nur 5'600.-



Teil-Liquidation  
omtl.bew. 29.10.92 - 31.1.93

MEYER · MÜLLER  
seit 1870

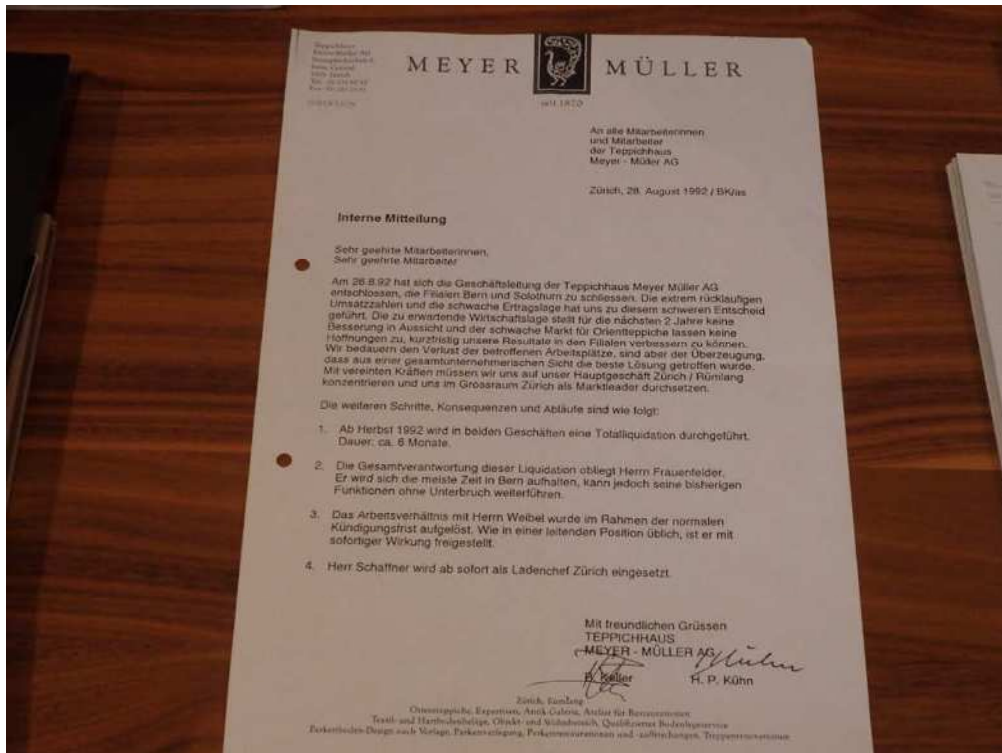
SW744

TANNER

# GROSS- LIQUIDATION

Liquidations-Versteigerungen: Donnerstags ab 17.30 Uhr, samstags ab 13.00 Uhr.

【写真 21】ベルン支店とゾロトゥーン支店閉店の通達文書（1992 年）  
2015 年 11 月 16 日筆者撮影。



＜筆者による日本語訳＞

1992 年 8 月 28 日 チューリヒ

内示  
社員各位

1992 年 8 月 26 日、マイヤー・ミュッラー商会執行部は、ベルン支店とゾロトゥーン支店の閉店を決定した。売上高の激減と低い収益見込みから、重大な決定を下すことになった。直近 2 年間のうちに経営回復を期待したが、改善の見通しが立たず、継続取引の衰退に希望を見出すことができなかったためである。我々としても、支店を失うことは大変遺憾であるが、すべての起業家の見解に基づいた最良の解決策であると信じている。社員一同と共に、我々はマイヤー・ミュッラー商会チューリヒ本店とリュムラングの事業に専念し、チューリヒを中心に市場を牽引していく次第である。

以下、決定事項

1. 1992 年秋以降、両支店を解散する。  
6 ヶ月以内を期限とする。
2. 解散手続きに関しては、Frauenfelder 氏の責任の下で遂行される。
3. 用務社員に関しては、通常の解職告知期間を適用しない。  
通常の管理職社員と同様に、即日解雇する。
4. Schaffner 氏をチューリヒ本店長に任命する。

以上  
マイヤー・ミュッラー商会  
B. Keller H. P. Kühn



【写真 22】 インタビューに応じたマイヤー・ミュッラー商会元社員の  
サンバスチャン氏(右)とルディン氏(左)

2015 年 11 月 14 日チューリヒ市内のサンバスチャン氏の絨毯工房にて筆者撮影。



【写真 23】 インタビューに応じたマイヤー・ミュッラー商会元社員のツィーグラー氏

2015 年 11 月 16 日ゾロトゥーン市内の料理店にて。

左より、スイス在住の美術研究家の熊野弘太郎氏、アンヌ・クロード氏（熊野氏ご夫人）、筆者、ツィーグラー氏。



2015 年 11 月 16 日ゾロトゥーン市内のツィーグラー氏の絨毯店にて筆者撮影。



【写真 24】絨毯専門国家試験合格証明書（ツィーグラー氏）

ツィーグラー氏は当時最年少の 24 歳で合格した。

2015 年 11 月 16 日筆者撮影。





【写真 25】 開店当時のゾロトゥーン支店①

出典：ツィーグラー氏の個人アルバム





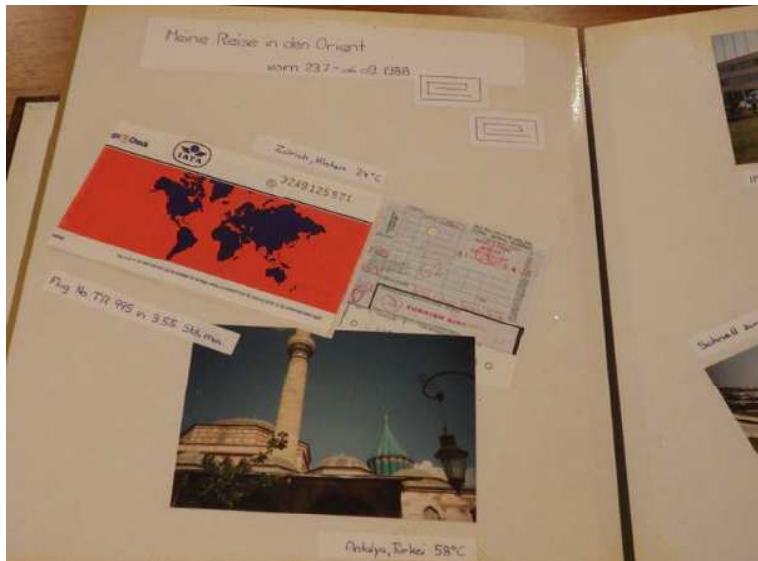
【写真 26】 開店当時のゾロトゥーン支店②

出典：ツィーグラー氏の個人アルバム



【写真 27】 ツィーグラー氏の中東への絨毯買い付けの旅（1988年7月23日～9月6日）

出典：ツィーグラー氏の個人アルバム



【写真 28】『イスラエル週刊新聞』30周年記念号に掲載されたマイヤー・ミュッラー商会の広告  
(1931年1月)

出典 : University of Florida Digital Collections

<http://ufdc.ufl.edu//AA00000362/00002>

Jahrgang **31** Nummer 1  
**Israelitisches Wochenblatt**  
Friedh. Stampfenbachstr. 39<sup>b</sup> für die Schweiz 2. Januar 1931  
Tel Aviv 22.522  
Alteingeführtes schweizerisches israelitisches Familienblatt

---


**Sondernummer**  
zum 30-jährigen Bestehen  
1901-1930

---

**WOHNliche  
RÄUME**  
Gestalten wir  
mit Sorgfalt und  
Verständnis

**J. KELLER & CIE.**  
Möbelfabrik  
Innendekoration  
Peterstrasse 16  
Gegründet 1861  
Bekannt  
für QUALITÄT

**ZÜRICH**



**60**  
**Jahre Teppichhaus**

eine lange Zeit! Das Vertrauen der Kundschaft hat uns  
gross gemacht, das Vertrauen der Kundschaft wird uns  
gross erhalten, da wir das Vertrauen stets rechtfertigen

Orient-Teppiche  
Maschinen-Teppiche  
Linoleum  
Korkparkett  
Gummi  
Decken



**Meyer-Müller**  
Co. Zürich-Bern, Stampfenbachstr. 6 AG



【写真 29】『イスラエル週刊新聞』50周年記念号に掲載されたマイヤー・ミュッラー商会の広告  
(1950年12月)

出典 : University of Florida Digital Collections

<http://ufdc.ufl.edu//AA00000362/00001>

# Israelitisches Wochenblatt

Journal Israélite Suisse

1901 **50** 1951  
JAHRE

## Die Bankag

**BANK-AKTIENGESellschaft**  
für Vermögensverwaltung und Wertschriftenverkehr  
**ZÜRICH, Bahnhofstr. 1**, Haus Galerie Neupert - Telefon (051) 25 76 90  
ist ein schweizerisches, vollständig unabhängiges Bankinstitut

Sie befasst sich hauptsächlich mit der kulantesten  
*Durchführung von Börsenaufträgen im In- und Ausland*

Sie empfiehlt und besorgt unvoreingenommen  
*Kapitalanlagen*

Vollständig neutral und unter Wahrung der strengsten Diskretion werden alle  
*Vermögensverwaltungen behandelt*

Weitere Geschäftsgebiete:  
*Treuhandgeschäfte, Handel in unkotierten Wertpapieren*  
*Verwertung ausländischer Titel, Emissionen*

### Aus verklungenen Tagen

Völker, Länder, Menschen und Bücher haben ihre Schicksale und feiern ihre Jubiläen. Warum sollte das Blatt nicht auch das Recht haben, seines 50. Geburtstages zu gedenken?

Wiederum von weltgeschichtlicher Bedeutung hat es mich belehrt! Wir erinnern uns auch heute an die Tage seiner Kindheit. Es war damals noch nicht grün geworden, in seiner Unschuld hat es sich präsentiert, als es nicht nur die jüdischen Bürger der Eidgenossenschaft zu seinen Abonnenten zählte, sondern auch ohne Pass und Visum über die Grenze bei den bündischen Nachbargemeinden Freiburg, Thurgau, Waldstatt, Rapperswil, Gailingen, Worthingen bis nach Konstanz seine Antrittsvorlesung machte.

In Konstanz, wo damals der bekannte Dankapitalist Wessenberg, der Menschenfreund, sein Wirkungskreis entfaltet. Wie wenig hat er sich bewahrt, den Jahren sein Plätzchen an der Sonne zu sichern und Vortrags zu zurechtzulegen. Mit einem schlichten Bürger in W. kam er hin und wieder zusammen. Er konnte seine Bescheidenheit, seine gesunde Lebensauffassung und seine... finanzielle Note. Einmal, als er in getriebener Stimmung bei ihm verbrachte, sah ihm Wessenberg dies an und fragte nach der Ursache. Bald leuchtete sein Gesicht wieder in Zufriedenheit, der gütige Mann hatte ihm eine Summe als Dankbros überreicht, die ihm über diegele Nöt hinweghalf. Es ging lange, bis sich der jüdische Freund wieder bei ihm sehen liess. Das Schuld-Bewusstsein bedrückte ihn, zumeist es ihm in der Zeitungszeit nicht vergisst war, ein Knecht zu werden. Da sagte er sich, der Wessenberg ihn eines Tages in Konstanz erblickt, er rief ihn nach und zeriss vor seinen Augen den Schuldchein, mit dem Witten: Unsere Gesellschaft soll weiterleben. In Tagen, wo Parteinist und konfessioneller Haß die Brücken über die den Herren der Menschen, dürfte die Erinnerung an die menschenfreundlichen Taten eines kirchlichen Würdenträgers nicht ohne Gewinn sein.

Kehren wir wieder zu unseren Blättern zurück. In den Gemeinden beglückte man sein Erscheinen, weil es verstand, ein Band jüdischer Solidarität und patriotischer Treue aus der Schweizgemeinden zu ziehen. In guten Gedrucks behielt ihn der eifrigste und klugen Herausgeber David Weinmann. Er liess von gottbegnadeten Köpfen in der jüdischen Literatur, führte eine flüssige und gewandte Feder. Ich besuchte ihn in seinem Redaktionszimmer ab. Jungling mit zum Teil noch lockiges Haar und überaus ihm als Erstlingsgabe einen Artikel, der sich mit den Aufgaben des jüdischen Jura befasse. Mit viel Anerkennung und ein wenig Humor quatterte er den Empfang meiner Arbeit, die bald erschien. Aber was sollte man verlangen von einem noch im Jugendstadium befindlichen jüdischen Blättern, eine junge Pflanze kann noch keine Dividenden ausschütten!

Wir wissen, dass der Redaktionsstall durch die Herren Rabbiner Dr. Littmann und Dr. David Strauss eine Entwicklung erfuhr, die den Juden zum Glück und zum Ruhm gereichte. Nicht nur Tagesfragen, die uns berührten, fanden eine objektive, leidenschaftliche Würdigung, auch das jüdische Gemüt kam auf seine Rechnung. Zu den Feiertagen erschienen landesweite Betrachtungen, die geeignet waren, die Seele zu heben und in freudiger Erhebung in das Gottesreich zu führen. Dies war freilich ein Gebot der Stunde. Denn in den alten Vatergemeinden, Endingen und Lengnau hatten sich die Reihen der vorläufigen



Dr. David Strauss  
Mitbegründer und Mitverleger des Blattes (1901-1918)

lichen Bepräsentung geleistet und es wurde verstanden sein, in die materiellsteile Zustimmung der Gesamtheit eine Note der geistigen Klärung und Vermittlung zu tragen. Ist doch die jüdische Presse zum Sprechsaal geworden, für die Politik nicht minder wie für die religiösen Belange. Neben den Leit- und anderen Artikeln wurde das Familienleben mit Gedächtnis des Rahmens des Wachstums einverleibt. Geboren und Tod figurieren in seinen Spalten und wenn auch freudig, ein Menschenkind ins Dasein trat, war es sicher ein Knecht, bei der Dame begrüsste man das Lebenslicht leuchtenden Freude. Aber wie viele unserer Heiden des Lebens sind seitdem den Feiern und Wirkungskreis eingeschwenkt! In den Familien, der Gemeinden, im Gemeindefund, in der Synagoge und Schule, in den Zirkeln der Philharmonen und edler Frauen, bei ihnen allen ist ein Vergessen nicht möglich.

Die Spuren guter Menschen vermag ein Jahrhundert nicht zu tilgen. — Eine treuende Waise ist wie eine Grabesblume auch einmal erblüht: Die *«Eidgenosse»* Synagoge. Schien bei der Architekt die Fassade gestaltet, mit Geschmack das Innere belebt, aber es fehlte doch die Lucarne, von der Moderne nicht ungeschicklichen Repräsentanten dieses Hauses, die einst in ihrer Anacht und Feiertagsfeier ihre Seele zu Gott erhoben. Wer denkt nicht an einen Abraham Raphael Ritz, den Camera in Israel! In den alten Dorfgemeinden war um 1800 das sogenannte Zwickelgenie krieg euland und hatte die Einsamkeit in Schrecken versetzt. Die empirischen Herren drangen in die Heize ein und bestanden auch die schließliche Leinwand des Rabbiner Ritz. Vorher seine Pollanten gebogen trafen sie ihn an, aber von seiner Persönlichkeit gebannt zogen sie ab, ohne ihn zu belästigen. Das Blättchen hatte hervor auch beleuchtet es ist bekannt, dass Legenden nicht immer aus der Phantasie allein erwachsen!

Zwei herrliche Weltkriege hat das Blättchen miterlebt. Im ersten fiele 12000 jüdische Helden für das Vaterland, im zwei-



**ORIENT-TEPPICHE**  
**SPANN-TEPPICHE**  
**MASCHINEN-TEPPICHE**  
**LÄUFER**  
**LINOLEUM**  
**GUMMI-BELÄGE**  
**KORK-PARKETT**  
**AT-PLATTEN**

**MAYER-MÜLLER**

ZÜRICH: Stämpfenstrasse 4 BERN: Bubenbergrasse 10

BESTE QUALITÄT ZU VORTEILHAFTEM PREIS!

【写真 30】マイヤー・ミュラー商会の広告（1904 年頃）

出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.

（日本語訳は筆者による翻訳である。）

ERSTES UND GRÖSSTES IMPORTHAUS DER SCHWEIZ  
FÜR ORIENTALISCHE TEPPICHE

Konstantes Lager von mehreren tausend Stück  
Auserlesenste seltene Exemplare

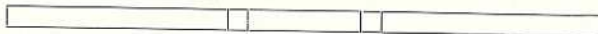
Grösste Leistungsfähigkeit in Preisen, Auswahl und Geschmack!

PERMANENTE AUSSTELLUNG  
ORIENTALISCHER TEPPICHE

in unvergleichlicher Auswahl. — Freie Besichtigung ohne Kaufzwang

Garantie für Echtheit unserer Orientteppiche

Fachmännische Bedienung — Auswahlensendungen

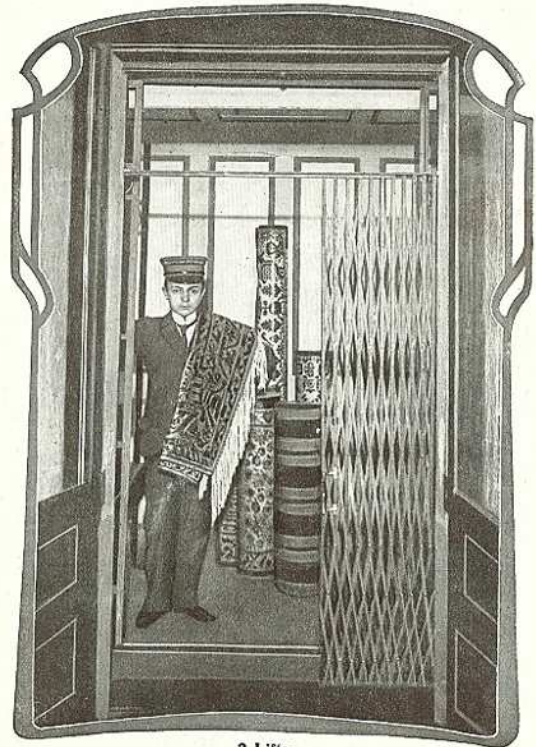


EINE BERECHTIGTE WARNUNG  
AN DAS KAUFENDE PUBLIKUM

zu richten, halten wir für unsere Pflicht, indem wir auf den vielfach bereits bekannten, **unreellen Hausierhandel** mit Orientteppichen hinweisen! Wie aus allen Fachschriften zu entnehmen ist und auf Grund unserer langjährigen Erfahrungen durch Experten etc. ist festgestellt, dass in neunundneunzig von hundert Fällen bei solchen „Gelegenheits-Teppichkäufen“ grobe Übervorteilung, oftmals der reinste Betrug stattfindet. Die beispiellose Aufdringlichkeit solcher Hausierer, die unter allen möglichen **erfundenen Vorwänden** ihre Ware zu **schwindelhaften Preisen** absetzen wollen, ist doch allein **bezeichnend genug!**

**Der Ankauf von Orientteppichen  
ist vollständig Vertrauenssache!**

Die beste Garantie, vorteilhaft und gut einzukaufen, besteht darin, dass der Käufer sich an ein **leistungsfähiges, reelles Geschäft** wendet! □



スイスにおける史上最高の輸入代理店

—オリエント産絨毯専門店—

数千枚の在庫を常備

—精選された稀少品—

素晴らしき価格、品数、センス!

常設展示室

オリエント産絨毯

無比無類の品々—お気軽にご来場ください

—絨毯の品質保証付き—

専門家御用達—見本送付承ります





【写真 31】 イスタンブルにおける絨毯の買い付け

出典 : Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.



Grosser Posten von uns erworbener feiner antiker Teppiche



Besichtigung eines wertvollen Seidenteppichs





Der  
Tisch  
ist  
mit  
Tisch  
bedeckt



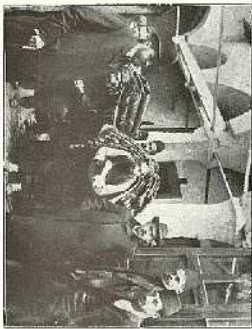
Handelsgut



Ein  
Tisch  
ist  
mit  
Tisch  
bedeckt



Ankunft  
auf  
Tisch



Der  
Tisch  
ist  
mit  
Tisch  
bedeckt

Handelsgut  
im  
Tisch



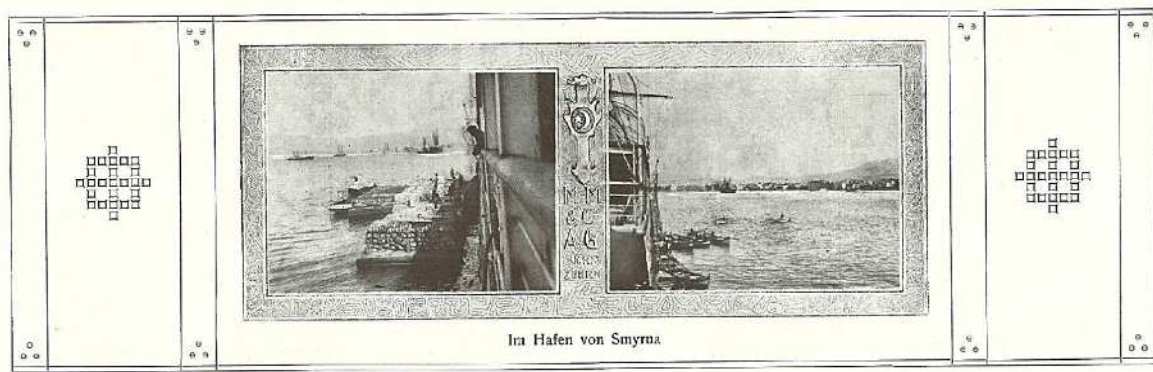
Ankunft  
auf  
Tisch



Türkische Lastwagen mit einem großen gepackten Teppich — Der Kauf wird durch Handelsgut abgeschlossen

【写真32】絨毯の運送（イスタンブル～スミルナ）

出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.



Unsere Einkäufer  
bei einem Posten ausgesuchter Teppiche

【写真 33】 スミルナへ向かう絨毯運搬用の駱駝

出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.

駱駝が背負った荷札に TMMC (Teppichhause Meyer-Müller Co.) と記されている。

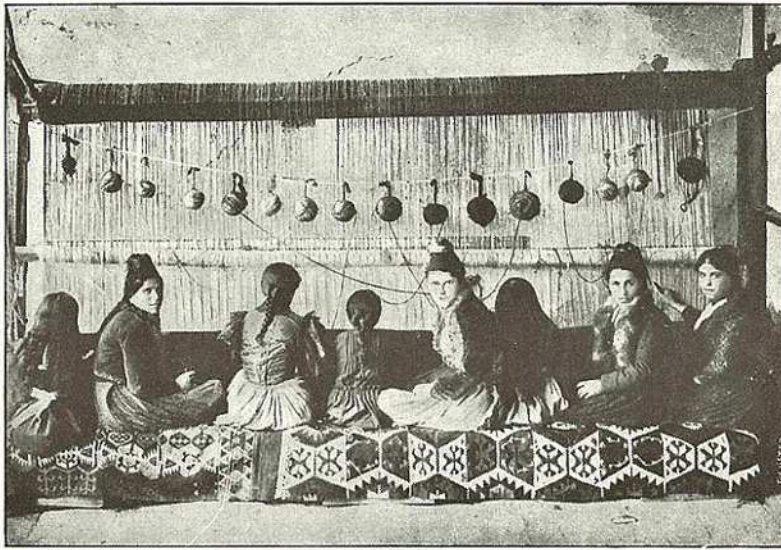


Mit Teppichen beladene Kamele nach Smyrna unterwegs



【写真 34】 スミルナの絨毯織り

出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.



【写真 35】 トリエステ港への入船

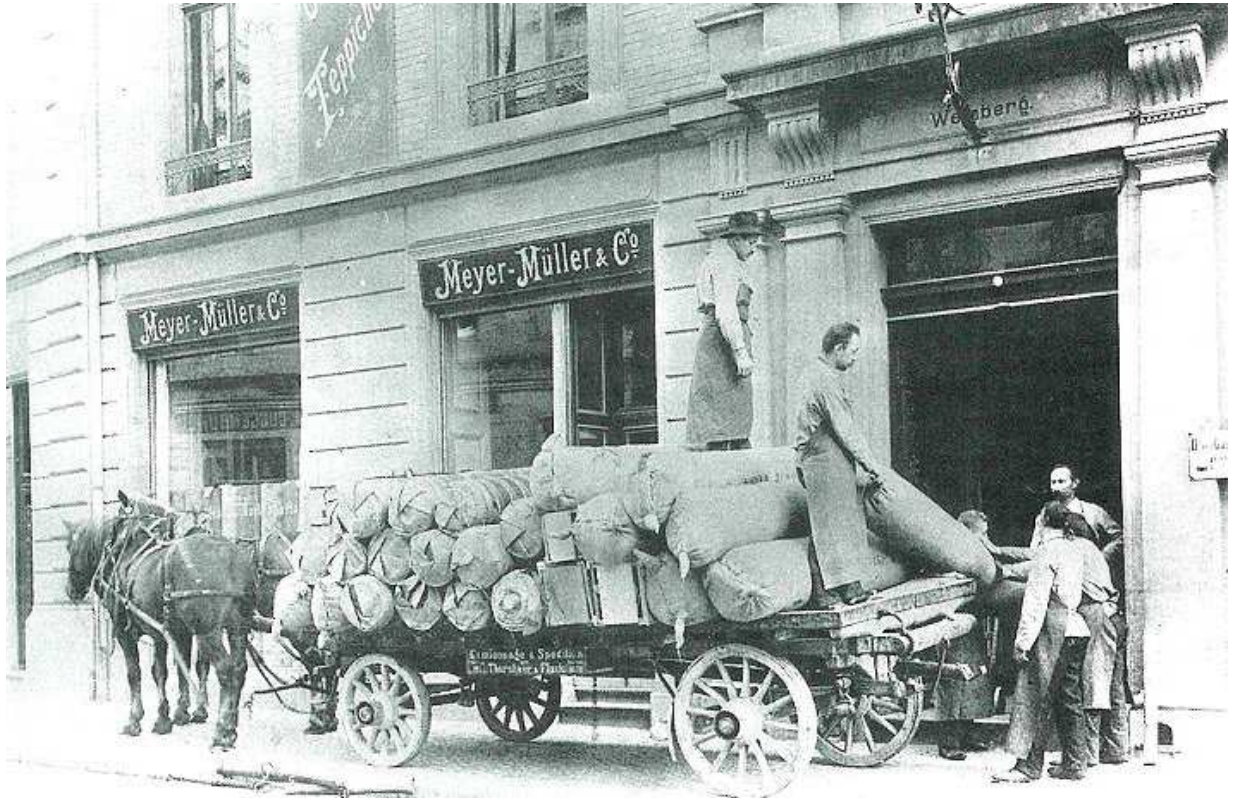
出典：Meyer-Müller. 1904. *Der Orientalische Teppich*.



Unsere Ankunft im Hafen von Triest

【写真 36】 チューリヒ本店への絨毯の搬入

出典：Christie's. 1990. *Fine Oriental Rugs and Carpets including the C. Meyer-Müller Collection (Part III)*. New York.





【写真 37】 マイヤー・ミュッラー商会が複製したパジリク絨毯

出典：Meyer-Müller. 1970. *100 Jahre aus dem Orient*.





【写真 38】 ゲオルク・マイヤー・ピュンターの領事執務室

出典 : Carl, Meyer-Pünter. 1917. *Der Orient Teppich in Geschichte Kunstgewerbe*



AMTSZIMMER DES PERSISCHEN KONSULS CARL MEYER-PÜNTER  
Mithhaber des Teppichhauses MEYER-MÜLLER & Co., A.-G., ZÜRICH.

【写真 39】 ヴィルヘルム・ボーデ肖像(1900 年頃)

出典 : Ohlsen, Manfred. 2007. *Wilhelm von Bode: Zwischen Kaisermacht und Kunsttempel*



【写真 40】 ボーデがイタリアで購入した絨毯

(ドラゴン・カーペット、コーカサス産、1700 年頃)

出典 : Spuhler, Friedrich. ed. 1988. *Oriental carpets in Museum of Islamic art, Berlin*





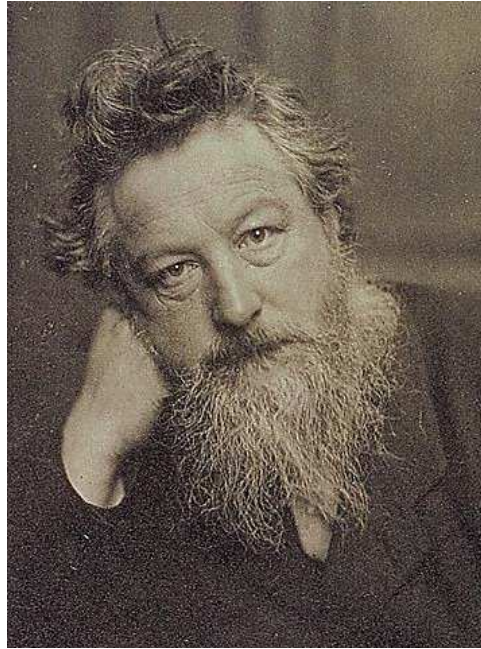
【写真 41】王立美術館彫刻部門に陳列された絨毯（1892 年）

出典：Enderlein, Volkmar. 1995. *Wilhelm von Bode und die Berliner Teppichsammlung*



【写真 42】 ウィリアム・モリス肖像

出典：藤田治彦. 2009. 『もっと知りたいウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』



【写真 43】 モリスの手織り絨毯（ハマスミス・ラグ）

（1880 年頃製作、木綿の縦糸にウールの手結び織り、86×130cm）

出典：ピーター・コーマック他. 2008. 『モリスが先導したアーツ・アンド・クラフツ』





【写真 44】 東洋絨毯博覧会(1891 年、ウィーン)

出典：Erdmann, Kunst. 1966. *Siebenhundert Jahre Orientteppich*.



【写真 45】カイザー・フリードリヒ博物館内に設置されたムシャッタ宮殿の城壁(1912 年)

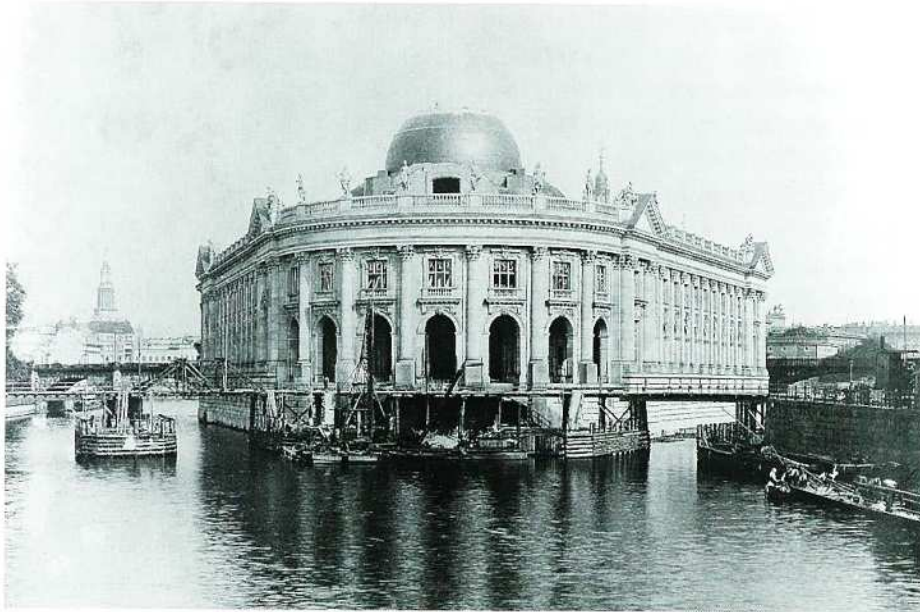
出典 : Kröger, Jens und Heiden, Désirée. 2004. *Islamische Kunst in Berliner Sammlungen: 100 Jahre Museum für Islamische Kunst in Berlin.*





【写真 46】カイザー・フリードリヒ博物館外観（1903 年）

出典：Staatliche Museen zu Berlin. 1995. *Wilhelm von Bode: Museumsdirektor und Mäzen* .



【写真 47】カイザー・フリードリヒ博物館内のイスラーム美術館(1909 年)

出典：Staatliche Museen zu Berlin. 1995. *Wilhelm von Bode: Museumsdirektor und Mäzen* .



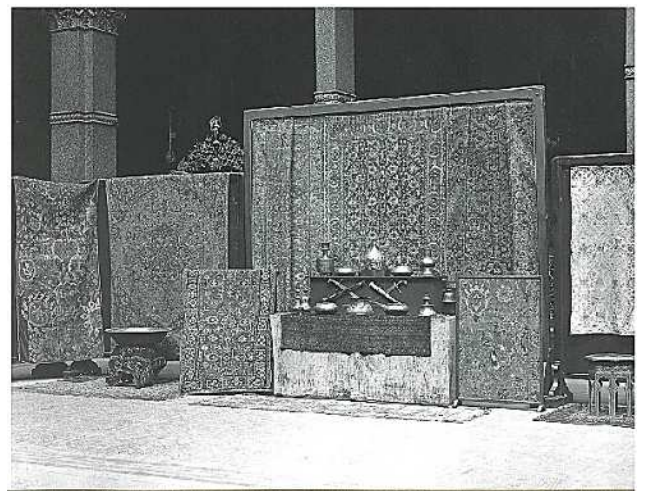
【写真 48】フリードリヒ・ザッレ肖像（1895年）

出典：Kröger, Jens und Heiden, Désirée. 2004. *Islamische Kunst in Berliner Sammlungen: 100 Jahre Museum für Islamische Kunst in Berlin.*



【写真 49】フリードリヒ・ザッレのアラブ・ペルシアコレクション（1899年）

出典：Kröger, Jens und Heiden, Désirée. 2004. *Islamische Kunst in Berliner Sammlungen: 100 Jahre Museum für Islamische Kunst in Berlin. für Islamische Kunst in Berlin.*





【写真 50】 イェームズ・ジーモン肖像（1914年頃）

出典：Schultz, Bernd. 2007. *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen.*



【写真 51】 現在のジーモン家の末裔（2006年）

出典：Schultz, Bernd. 2007. *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen.*





【写真 52】 ジーモン兄弟社の外観

出典：Schultz, Bernd. 2007. *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen.*



【写真 53】 ジーモン家邸宅（1885～1886年）

出典：Schultz, Bernd. 2007. *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen.*



【写真 54】「ネフェルティティ王妃の胸像」の発掘（1912年）

（1912年12月6日、エジプト中部のテル・エル・アマルナ）

出典：Schultz, Bernd. 2007. *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen.*



【写真 55】 皇帝ヴィルヘルム 2 世からイエームズ・ジーモンに宛てられた表彰状（1903年）

DOG設立と運営におけるイエームズの功績を讃えて、1903年2月21日に贈られた。

出典： Matthes, Olaf. 2000. *James Simon: Mäzen im Wilhelminischen Zeitalter*.



【写真 56】 パレスチナ（ハイファ）の科学技術のための研究教育機関（テクニオン、1914～1915年）

出典：Schultz, Bernd. 2007. *James Simon: Philanthrop und Kunstmäzen*.



【年表】絨毯をめぐる年表（1830年～現在）©田熊作成2016

年代	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940-	1994-	2000-
寄会の動き	Vincent Robinson&Co. (英) 1878-													
	★1891アルダビール瓶の競売→サウス・ケンジントン博物館へ売却 (ウィリアム・モリスが関与)													
	Liberty & Co. (英) 1875-現在に至る													
	Morris & Co. (英) 1875-現在に至る													
	Ziegler&Co. (英のチイス拠点) 1883-1934													
	Oriental Carpet Manufactures of London (英) 1907-1929													
	Persische Teppich-Gesellschaft (独) 1911-2015?													
展覧会の動き	Orient Teppich Gesellschaft 1994-2000年代													
	Bodenbelage 1994-2000頃													
展覧会の動き	★1873ウィーン万博 (ウィーン) →「ベルシア雑誌」の登場													
	★1891東京博覧会 (ウィーン)													
	★1903Exposition des Arts Musulmans (パリ)													
美術館・研究機関の動き (ドイツ中心)	★1910回教美術大博覧会 (ミュンヘン)													
人の動き	★1887オリエント委員会設立													
	★1898ドイツ・オリエント協会(DOG)設立													
	★1870年代-域経研究創始													
	★1892ヴィルヘルム・ボーデが域経研究論文を発表 ★1904ベルリン・イスラム美術館設立													
	★1907東アジア美術館設立													
人の動き	ウィリアム・モリス (英) 1835-1896 アーツ&クラフツ運動19世紀半ば													
	ロバート・マードック・スミス (英) 1835-1900 イランで美術品収集 (1873-1883)													
	ヴィルヘルム・ボーデ (独) 1845-1932													
	イェームズ・ジューモン (独) 1851-1932													
	エルンスト・ヘルツフェルト (独) 1879-1948 考古学/イラン語研究													
世界の動き	★1917-カール・グオルク・マイヤー・ビュンナーがイラン領事を務める													
ドイツ帝国	ヴィルヘルム2世 (在位1888-1918)													
	★1898ヴィルヘルム2世皇帝夫妻オリエント旅行													
ガーゼジャール朝イラン	★1903オスマン帝国からムシャッタ宮殿の城壁を獲得													
	アフマド (在位1909-1925)													
オスマン帝国	ナーセロッディン・シャー (在位1848-1896)													
	★1865ドールラン地方で穀子疫病の流行													
オスマン帝国	アフメド2世 (在位1876-1909)													
	メフメト5世 (在位1909-1918)													